

愛知淑徳大学大学院文学研究科 博士(文学)学位申請論文

「源氏物語」宇治中の君考

―その和歌表現を中心に―

磯部一美

愛知淑徳大学大学院文学研究科 博士(文学)学位申請論文

『源氏物語』宇治中の君考

—その和歌表現を中心に—

磯部 一美  
提出 二〇〇九年一月九日

# 目次

序論

009

第一部 幼少時の詠歌

第一章 宇治中の君の原点を求めて―橋姫巻「水鳥の唱和」考―

018

- 一 はじめに
- 二 八の宮の詠歌
- 三 大君の詠歌
- 四 中の君の詠歌
- 五 おわりに

第二部 宇治在住時の詠歌

第一章 停滞する宇治中の君物語―椎本巻「かざし」詠を中心に―

028

- 一 はじめに
- 二 宇治中宿りの場面
- 三 中宿り追想の場面
- 四 おわりに

第二章 すれ違ふ姉妹の行方―椎本巻の八の宮哀傷歌をめぐつて―

043

- 一 はじめに
- 二 両場面の同一性と差異
- 三 年の瀬の贈答歌に見える二人の差異
- 四 新春の贈答歌に見る差異
- 五 おわりに

第三章 宇治中の君の結婚―「宇治の橋姫」変奏譚として―

063

- 一 はじめに
- 二 「宇治の橋姫」伝承について
- 三 三人の「宇治の橋姫」
- 四 おわりに

第四章 常不輕という方法―総角巻「千鳥」の贈答歌考―

083

- 一 はじめに
- 二 薫の贈歌
- 三 中の君の答歌
- 四 方法としての常不輕
- 五 おわりに

## 第三部 上京後の詠歌

### 第一章 方法としての和歌—早蕨卷「梅の香」の贈答歌—

- 一 はじめに
- 二 二つの「梅の香」の贈答歌
- 三 おわりに

103

### 第二章 歌が紡ぐ物語—宿木卷「朝顔」の贈答歌—

- 一 はじめに
- 二 薫の贈歌
- 三 中の君の答歌
- 四 おわりに

119

### 第三章 宇治中の君の孤高性—宿木卷「山里の松」の解釈をめぐって—

- 一 はじめに
- 二 独詠歌「山里の松のかげにも」の解釈
- 三 中の君の孤独を照射するもの
- 四 おわりに

134

第四部 宇治中の君を取り巻く人々

第一章 「幸い人」の系譜——宇治中の君の可能性——

- 一 『源氏物語』の「幸い人」
- 二 「幸い人」の研究史
- 三 宇治中の君の可能性

152

第二章 宇治中の君物語の周縁——〈幸い〉を支える女房たち——

- 一 はじめに
- 二 女房の不在
- 三 筆頭女房大輔の君の役割
- 四 匂宮の好色性と中の君の嫉妬
- 五 〈幸い〉を支える女房たち

158

結論

171

『源氏物語』宇治中の君考

—その和歌表現を中心に—



# 序 論

『源氏物語』「宇治十帖」の世界は、薫、匂宮という二人の男主人公と、その執着の対象である宇治八の宮の大君、中の君、浮舟という三人の姫君を中心に繰り広げられる。しかし、薫との結婚を拒否し続け自ら死を選び取った大君と、薫と匂宮の愛の狭間で苦しみ尼になった浮舟という二人の個性的な生きざまに対して、匂宮の妻となり、京に迎えられ、世間から「幸ひ人」と称される中の君は、その平凡さゆえ宇治の世界では物語の主人公たり得ない存在として扱われてきた。

そもそも『源氏物語』の中で作中人物論が独自に行われるようになったのは、一九五〇年代半ばになってからのようである(注1)。しかし「宇治十帖」の中でも、とりわけ目立たない存在である中の君が注目されるようになったのは、一九六〇年代後半に入ってからのことであった。

先駆ともいえる藤村潔は、その論の中で「中の君の結婚生活は、大君の世界の駄目押しである」(一九六六年)と述べる(注2)。また一九七一年には、千原美沙子が「紫の上の二番煎じであり、構想上の役割も橋渡しのものである」と述べている(注3)。中の君が大君物語と浮舟物語の「橋渡し」であるとする説は、他に中野幸一(一九七一年)、倉又善良(一九八五年)、木村正中(一九八七年)、武谷恵美子(一九八九年)等にも見られる(注4)。一方これに反発する論には、工藤進思郎「中の君は独自の営みを持つている」(一九七〇年)、榎本正純「そのあまりに受動的で穏やかな(生)に紫式部の限りない中の君への情愛を見る」(一九七四年)、池田和臣「中君物語を緊迫感のない単なる中継ぎの物語とすることはできない」(一九七七年)等がある(注5)。

このような新しい中の君像を模索しようとする動きは、一九八〇年以降ますます活発になる。藤本勝義は「中の君は、ヒロイン的属性を兼ね備えているが故に、宇治の世界では逆にヒロインになり得ない存在として造型されている」(一

九八〇年)ことを指摘する(注6)。それに対し、吉井美弥子は「八の宮家からすれば、中の君は重要なヒロインであった。中の君は正編におけるヒロイン像をなぞりつつ相対化していくという意味において、中の君物語はきわめて独自の、かつ重要な異議を担っている」(一九九二年)と反論した(注7)。また森一郎は、主題論の立場から「聡明に主体的に生きたという点で、この姉妹は同じ命題を生きたのである」(一九七六年)と述べ(注8)、それは井野葉子「中の君の底辺を流れる荒涼とした心象は、大君・浮舟のそれと同じである。つまり二人は同じ命題を負っているのである」(一九九四年)へと受け継がれていった(注9)。さらに構造論の立場からは、原岡文子が「幸ひ人とは、幸福で不幸な存在に他ならない」(一九八二年)として、中の君の内面の苦悩と、それを取り巻く人々(主に女房たち)の構図を明らかにし(注10)、それを受けて齊藤昭子が「王朝異性愛関係の枠、女の幸いを越え出ていく力が秘められている」(一九九六年)と論じた(注11)。

以上のことから、中の君研究が人物論に始まり、主題論、構造論等へと広がりを見せているということが見てとれるのではないか。かつて神田龍身は、「宇治十帖」の世界を「絶対としての中心などというものはいかなる意味においても存在しない」と断じた(注12)。すべては相対的な存在であり、一人一人を取り出して論じることができないというのだが、中の君研究もまた同様の道筋を辿ってきたと言える。しかし、本当にそう言い切つてよいものだろうか。確かに「宇治十帖」は、多くの人物が複雑に絡み合うことによつて物語が生成されており、一個人を抜き出して語ることは容易ではない。しかし、それらの多くは、中の君自身の考察というより、置かれた状況、物語の流れなどという(現象)によつて見出された中の君の(あらまほしき姿)なのではないか。中の君自身にこだわり、そこから真の中の君の姿を引き出したいというのが、本論文の目的である。

今回はその手段として和歌を中心とした場面の考察を行う。『源氏物語』の和歌について小町谷照彦は次のように述べる。

物語の和歌は単に作中人物の行為や思索を示すものではない。和歌は、その独自の表現性や伝達機能によって物語の世界に深く浸透してくる。和歌は特異な表現領域を占有する言語なのである。和歌の存在すること自体がその意味内容が問題となる以前にすでに何らかの場面意識を形成するとさえ言つてもよい。このような和歌の性格に対して、源氏物語の作者はとりわけ敏感であつたように思われる。源氏物語には七九五首の和歌が見られるが、そのいずれも散文との有機的な結びつきによつて、物語の世界の構築に極めて効果的な役割を果たしている(注13)。

中の君の和歌について論じたものには、清水好子「宇治の中宿り―作中人物の歌」(一九八三年)、金子大麓「源氏物語「椎本の和歌」かざしをる」は誰の詠か―」(一九八八年)。また宿木卷関係では、田中仁「椎の葉の音―『源氏物語』宿木卷―」(一九九〇年)、樋口芳麻呂「海人も釣すばかりに―『源氏物語』「宿木」の巻の引歌一首について―」(一九九四年)、久保朝孝「薫と和歌―宇治の中の君との贈答から―」(二〇〇九年)等が掲げられるが(注14)、この分野については、少なくとも中の君に限つては、まだまだ未開拓の状態であるといつていい。

本論文では、中の君自身の最も切実な言葉(Ⅱ声)である(和歌)を読み解くことで、閉塞した中の君研究を打ち破り、宇治の物語の新たな読みへとつなげていきたい。

中の君は物語中に十九首の歌を詠んでいる。内訳は、唱和一、独詠三、贈答十五(贈二・答十三)である。今回は、そのうちの一〇首を取り上げる。構成は、基本的に時系列に沿ひ、四部構成とする。

第一部は、幼少時の詠歌を取り上げる。中の君は幼い時、都において八の宮・大君と歌を交わしている。中の君が物語の始発の段階で、どのような性格を付与されているのかを考察する。

第二部は、宇治在住時の詠歌を取り上げる。八の宮・大君との生活・死別、句宮との恋愛・結婚など運命の荒波に翻弄されつつも、どのような生き様をみせるのかを、歌を通して考察する。

第三部は、上京前後の詠歌を取り上げる。宇治を離れることへの不安と、それに寄り添おうとする薫の、歌による心の交流を通して、確かに結ばれる絆を考察する。

第四部では、宇治中の君を取り巻く人々を取り上げる。和歌の考察ではないが、中の君が都の内ですら自らの生を確立していく過程に女房がどう関わっていくのかを考察する。

中の君の詠歌十九首(※は本論文で扱ったもの)

No.	種類	中の君の詠歌	相手	相手の詠歌(下の句は省略した)	巻
①	唱	泣く泣くもはねうち着する君なくは我ぞ巢守りになるべかりける※	八の宮 大君	うち棄ててつがひさりにし水鳥の… いかでかく巢立ちけるぞと思ふにも…	橋姫
②	答	かざしをる花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬ春の旅人※	句宮	山桜にほふあたりにならぬわきて…	椎本
③	答	奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば※	大君	君なくて岩のかけ道絶えしより…	椎本
④	答	雪ふかき汀の小芹誰がために摘みかはやさん親なしにして※	大君	君がをる峰の巖と見ましかば…	椎本
⑤	答	いづくとかたつねて折らむ墨染にかすみこめたる宿の桜を※	句宮	つてに見し宿の桜をこの春は…	椎本
⑥	答	絶えせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき※	句宮	中絶えむものならなくに橋姫の…	総角

⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
答	答	答	独	独	答	独	答	贈	答	贈	答	答
みそぎ河瀬々にいざさんなでものを身に添ふかげとたれか頼まん	秋はつる野辺のけしきもしのすすきほのめく風につけてこそ知れ	みなれぬる中の衣とたのみしをかばかりにてやかけはなれなん	おほかたに聞かましものをひくらしの声うらめしき秋の暮かな	山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき※	消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされる	ながむれば山より出でて行く月も世にすみわびて山にこそ入れ	しほたるるあまの衣にことなれや浮きたる波にぬるるわが袖	見る人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆる花の香ぞする※	この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰の早蕨※	来し方を思ひいづるもはかなきを行く末かけてないたのむらん	あかつきの霜うちはらひなく千鳥もの思ふ人の心をや知る※	あられふる深山の里は朝夕にながむる空もかきくらしつつ
薫	匂宮	匂宮	—	—	薫	—	弁の尼	薫	阿闍梨	匂宮	薫	匂宮
見し人の形代ならば身にそへて…	穂にいでぬもの思ふらしのすすき…	また人に馴れにける袖の移香を…			よそへぞ見るべかりける白露の…		人はみないそぎたつめる袖のうらに…	袖ふれし梅はかはらぬにほひにて…	君にとてあまたの春をつみしかば…	行く末をみじかきものと思ひなば…	霜さゆる汀の千鳥うちわびて…	ながむるは同じ雲居をいかなれば…
東屋	宿木	宿木	宿木	宿木	宿木	宿木	早蕨	早蕨	早蕨	早蕨	総角	総角

- (1) 武原弘「源氏物語の人物造型」(国文学解釈と教材の研究「源氏物語を読むための研究事典」学燈社 一九九五年二月)。
- (2) 藤村潔「宇治十帖の世界 中君」(『源氏物語の構造』桜楓社 一九六六年十一月)。
- (3) 千原美沙子「大君・中君」(『源氏物語講座4』有精堂 一九七一年八月)。
- (4) 中野幸一「『源氏物語』の作中人物像―「宇治十帖」を中心に―」(『物語文学論攷』教育出版センター 一九七一年一〇月)、  
倉又幸良「浮舟物語構想の形成(下)―中の君入水構想はあつたか―」(『新潟大学国文学会誌』第二八号 一九八五年三月)、  
木村正中「幸い人の物語―早蕨・宿木」(『国文学』学燈社 一九八七年十一月)、武谷恵美子「宇治の中の君について」(『源氏物語とその周縁』一九八九年一〇月)。
- (5) 工藤進思郎「『源氏物語』宇治十帖中君についての試論」(『文学・語学』第五五号 全国大学国語国文学会 一九七〇年三月)、  
榎本正純「物語と家集―宇治十帖中君の再検討」(『國語と國文学』東京大学国語国文学会 一九七四年七月)、池田和臣  
「國語と國文學」東京大学国語国文学会 一九七七年十一月)。
- (6) 藤本勝義「宇治中君造型―古代文学に於けるヒロインの系譜」(『國語と國文學』東京大学国語国文学会 一九八〇年一月)。
- (7) 吉井美弥子「宇治を離れる中の君―早蕨・宿木卷―」(『源氏物語講座4 京と宇治の物語・物語作家の世界』勉誠社 一九九二年七月)。
- (8) 森一郎「宇治の大君と中君」(『平安文学研究』55 一九七六年六月)。
- (9) 井野葉子「宇治十帖の中君―大君・浮舟を評価する主体として―」(『論集 源氏物語とその前後5』新典社 一九九四年五月)。

- (10) 原岡文子「源氏物語作中人物論 中の君」(「別冊国文学13 源氏物語必携Ⅱ」学燈社 一九八二年)。  
(11) 齊藤昭子「中の君物語の〈ふり〉——宇治十帖の〈性〉——」(『新物語研究4 源氏物語を〈読む〉』若草書房 一九九六年一月)。  
(12) 神田龍身「分身、差異への欲望——『源氏物語』「宇治十帖」——」(『物語文学、その解体——『源氏物語』「宇治十帖」以降』有精堂 一九九二年九月)。

- (13) 小町谷照彦「源氏物語の唱和歌の表現性」(「國語と國文學」東京大学国語国文学会 一九八六年五月)。  
(14) 清水好子「講座源氏物語の世界〈第八集〉」有斐閣 一九八三年六月)、金子大麓(「並木の里29」国研出版 一九八七年一月)、田中仁(「国語国文」京都大学国語国文学会 一九九〇年一月)、樋口芳麻呂(「愛知淑徳大学論集」一九九四年三月)、久保朝孝(『源氏物語の歌と人物』翰林書房 二〇〇九年五月)。



第一部  
幼少時の詠歌

# 第一章 宇治中の君の原点を求めて―橋姫巻「水鳥の唱和」考―

## 一 はじめに

『源氏物語』宇治十帖の世界は、「そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり」と、故桐壺帝第八皇子（八の宮）の存在を語ることによって幕を開ける。そして、その最初の巻である橋姫巻冒頭は、都における八の宮家の様子を語ることによつて、今後の物語展開を暗示するものとして注目される。

ところで、橋姫巻は、八の宮家の様子、二人の姫君の出生、成長の様子が時間の進行に沿つて語られているのだが、今回取り上げる「水鳥の唱和」の場面は、その時間の流れが急に停滞し、突如として現れる特異な場面である。既にこの場面については、それまでの都における三人のあり方を象徴するとともに、今後語られようとする未来を暗示するという意義付けがなされている（注<sup>1</sup>）が、本章ではこの場面を、

①八の宮の和歌

②大君の和歌

③中の君の和歌

の三つに分け、さらに詳細に検討を加えてみたい。歌から導かれる三人の心の揺れをつらまえることで、「宇治」の物語の原点を再確認したい。

## 一一 八の宮の詠歌

八の宮は、光源氏と右大臣一派との政權鬭争に巻き込まれた結果、その敗者側の一員として世間からうち捨てられた存在であつた。また、唯一の慰めと寄り添つてきた妻北の方にも二女出産直後に先立たれてしまふ。帝と女御の間に生まれ、大臣の娘を娶り、いずれは皇太子にもと期待された八の宮であつただけに、その環境の劇的な変化は、八の宮自身に強い厭世觀をもたらしに違いない。すべての不幸が自らの意志とは全く無関係なところで起こつてくる上に、妻までも失つたという深い絶望の中で、しかし後に残された幼い娘たちを見棄てることもできず、仏道修行の傍ら、娘たちの養育に日々を過ごさざるを得ない。そのような日常の一風景として、「水鳥の唱和」の場面は語り起こされてゐる。

春のうららかなる日影に、池の水鳥どもの翼うちかはしつつかおのがじし囀る声などを、常ははかなきことと見たまひしかども、つがひ離れぬをうらやましくながめたまひて、君たちに御琴ども教へきこえたまふ。いとをかしげに、小さき御ほどに、とりどり掻き鳴らしたまふ物の音どもあはれにをかしく聞こゆれば、涙を浮けたまひて、

「うち棄ててつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたちおくれけん

心づくしなりや」と目をおし拭ひたまふ。容貌いときよげにおはします宮なり、年ごろの御行ひに瘦せ細りたまひにたれど、さてしもあてになまめきて、君たちをかしづきたまふ御心ばへに、直衣の姿えはめるを着たまひて、しどけなき御さまいと恥づかしげなり。

〔橋姫 一一二一〜一一二三頁(注2)〕

「春」は、その後文に「春の夜もいと明かしがたきを」「橋姫一七二頁」、「春のつれづれは、いとど暮らしがたくながめたまふ」「同一七六頁」とあるように、八の宮にとつては何より慰めがたい季節であつた。「春」は四季の始めであり、それは同時に年の始めでもある。人は年の始めに過去を振り返り、遠く未来に思いをめぐらすものである。「常ははかなきこと」としか映らない水鳥の様子も、「春」は過去を、妻を呼び起こす縁よすがとなる。この場面を規定する「春」は、現在を起点として、北の方(過去)と娘たち(未来)を同時に抱え込むことで、八の宮の孤独と憂愁が、その歳月に癒やされることなく、反復・継続されているものであつたことを示している。

八の宮の歌は、「仮のこの世」に「雁の子(卵)〓娘たち」を掛けたものであり、この世に取り残された娘たちの境涯を案じたものと読むのが通説である(注3)。亡き妻を偲びつつ、その忘れ形見の娘たちに琴を教える八の宮の涙は、確かに慈愛に満ちた父親の姿を強く印象付けるものではあろう。しかし、「つがひ」は母ではなく妻という意味合いの言葉であり、「うち棄て」られたのは八の宮自身である。この「棄て」られたという意識の中には、妻に先立たれた悲しみ、そして自らの意志で捨て去つたわけではない、自ら断ち切つた思いではないという俗世への未練が込められている。幼い娘たちはまだ「かりの子〓卵」でしかなく、その意味でも八の宮の孤独を象徴していよう。孤独という点で言えば、都の邸が焼亡して宇治に隠棲した時の詠出、「見し人も宿も煙になりにしをなにとてわが身消え残りけん」「橋姫一二六頁」にも類似の発想を見ることができよう。

死ぬこともできず、出家することもできない。なぜ私は、おめおめとこの世に残つてしまったのだろうか——歌の表面を掬つてみるならば、そこには娘たちへの慈愛や憐憫の情という以前に、自分自身に降りかかった不幸な運命を託つ八の宮の姿が浮き彫りになつてくるのではないだろうか。

こうした八の宮の姿は、当然ながら印象的な父親の像を結ばない。まただからこそ、この詠歌の直後に語られる八の宮の風貌は象徴的であるといえよう。つまり、姫君たちへの愛情が、父親としてというよりも、北の方への追慕の情の延長線上にあるがゆえに、より主体的、具体的な父親像は希薄なのである。ここに描かれているのは、手ずから姫君たちを育てるといふ憐れみ深い父親ではなく、むしろそんな中にありながら際だった気品と高貴さに支えられた親王としての八の宮の姿なのであった。

八の宮の詠歌は、北の方への追慕の情を基盤にして、置き去りにされた自分自身の嘆きを詠んだものであった。和歌を詠むということは、自らの突き詰められた心情を言葉として外に発する、ということでもある。このように表現された思いは、姫君たちに一体どのように受け止められていくのだろうか。

### 三 大君の詠歌

八の宮の詠歌は、唱和というよりも個人の心情の吐露——独詠と呼ぶに相応しいものである。しかし、その声をあえて掬い上げ、応えたのが大君であった。

姫君、御硯をやをら引き寄せて、手習ひのやうに書きませたまふを、「これに書きたまへ。硯には書きつけざなり」として紙奉りたまへば、恥ぢらひて書きたまふ。

いかでかく巢立ちけるぞと思ふにもうき水鳥のちぎりをぞ知る

よからねど、そのをりはいとあはれなりけり。手は、生ひ先見えて、まだよくもつづけたまはぬほどなり。

〔橋姫 一一三頁〕

「御硯」に、「手習ひのやうに」「恥ぢらひて書く大君の姿は、父親からすればまだまだ幼く、その内容も「あはれ」ではあるものの、「よからねど」と必ずしも父親を満足させるものではなかつた(注4)。しかし、懸命に歌を詠み出し、父親に応えようとする態度は、単に早熟であるというひと言では片付けられまい。

まず、「うき水鳥のちぎり」であるが、一見して分かるように、「うき水鳥」には「憂き身」が掛けられている。例えば新編全集の現代語訳には、「水に浮く水鳥のような憂わしいこの身の不運」とあるが、抽象的で、「不運」の内容も不明瞭である。では、父親の言葉を受けて観念的に詠んだ、自意識の強い歌ということなのであろうか。しかし、仮に不運の理由を母親の死とするならば、その原因となつたのは妹である。また、宇治転住や不如意な生活が理由であるとするならば、それは父親に責任があるということにならう。自ら「巢立ち」と自負する大君が、愛育してくれた父親の前で、また愛おしい妹の前で、自らだけが不幸に沈んでいくような歌を本当に詠むのだろうか。大君は傲慢で独りよがりな思いを吐露しただけなのだろうか。この「憂き身」「ちぎり」意識を、物語の中でどこまで遡れるかと考えてみた時、互いののみ生きる支えとしてきた八の宮夫妻の在りし日の姿が思い起こされてくる。

北の方も、昔の大臣の御むすめなりける、あはれに心細く、親たちの思しおきてたりしさまなど思ひ出でたまふにたとしへなきこと多かれど、深き御契りの二つなきばかりをうき世の慰めにて、かたみにまたなく頼みかはした

わずか数え年三歳で母と死別した大君に、両親が分かち合ってきた悲哀を重ね合わせて読むことは、いささか暴力的かもしれない。しかし、八の宮が娘たちを育んできた月日は、そのまま亡き北の方を偲んできた月日でもある。八の宮自身がそのことを事細かに語ることはなかったとしても、日々の暮らしの中に大君は亡き母の存在を感じ取ってきたに違いない。それが「巢立ちけるぞ」という意識にも反映されているのではないか。

この歌は、父を、妹を語る歌ではない。自らの不幸を嘆く歌でもない。父親の孤独に寄り添って、それを慰めるべく詠んだ歌である。常に父親の悲しみを眼前で見つめてきた大君には、八の宮の悲しみが自らの悲しみのように理解できるのである。歌を詠むこと——その稚拙な手跡とは裏腹な背伸びは、健気な大君の、父親に対する限りない思慕を示しているのである。

#### 四 中の君の詠歌

大君が八の宮の歌に即座に反応したのに対し、中の君は父親に勧められて、はじめて筆をとる。大君とは対照的なこのような姿勢は、年少ゆえというよりは、*まねぶ*ことが日常化していることの表れであろう。そうして「久しく」かかつて詠み出したのが、次の歌であった。

「若君も書きたまへ」とあれば、いますこし幼なげに、久しく書き出でたまへり。

泣く泣くもはねうち着する君なくはわれぞ単守りになるべかりける

御衣ぞもなど萎えばみて、御前にまた人なく、いとさびしくつれづれげなるに、さまざまいとらうたげにてもものし  
たまふをあはれに心苦しう、いかが思さざらん、経を片手に持たまうて、かつ読みつつ、唱歌もしたまふ。

〔橋姫一二三〜一二四頁〕

生まれてすぐに母親を失った中の君は、女親を知らない。したがって父や姉のように亡き母を偲んで歌を詠むことはできない。本来であれば当然在るべきはずの乳母も、「さる騒ぎにはかばかしき人をしも選りあへたまはざりければ、ほどにつけたる心浅さにて、幼きほどを見棄て」〔橋姫一二〇頁〕てしまうという有り様である。母親、そして乳母の不在という奇特な状況の中で、中の君はただ父と姉の愛情だけを受けて育つことになる。

そんな中の君の歌は一般的に、「受動的な生き方のよく表われている歌」とされているが(注5)、しかしそれだけではあるまい。注目したいのは、眼前の父親の姿をそのまま写し取った「泣く泣くも」という表現である。これは、大君が「うき水鳥のちぎり」と父親の辛い胸の内(内面)を詠んだのに対して、眼前の父親を詠んでいる(外面)という点で照応している。「単守り」も同様で、大君の「単立ち」を受けている。つまり中の君は、姉の言葉に自分の言葉を重ね合わせることで、大君に対して深い感謝の気持ちを含めているのである。

一方で、大君の言葉をいちいち反転させることで、自分は姉とは違う、過去も現在も父親だけに頼らざるを得ない



境遇であることも強調している。今、自分を育ててくれている人が流している涙は、他ならぬ自分(の出生)が原因である。中の君は、「泣きながらでも育ててくれた父上様のおかげ……」と、父の悲しみを理解し、寄り添おうとしている。「単守りになるべかりける」には、姉同様に「単立った自分」が意識されてもいよう。が、それを前面に打ち出すことはせず、ひたすらに父・姉への感謝に満ちた歌を詠むのである。中の君の詠歌は、自分を愛おしみ、育んでくれた父と姉への感謝そのものであると言つていい。受動的で父親の愛情に包まれ安穩と過ごしているだけの姫君に、このように配慮した歌が詠めるだろうか。ここには、「愛されることは当然のことではない」「自分は人を頼つて生きていかざるを得ない」という冷静な状況把握がある。中の君の詠歌には、「頼み」「頼む」という言葉が多く登場するが(十九首中四首)、ここにその萌芽を見ることもできるであろう。

## 五 おわりに

以上、見てきたことから言えるのは、「水鳥の唱和」と呼び慣わされているこの場面は、最初から唱和となることを意図されていたわけではないということである。八の宮の独詠を大君が受けて贈答になり、さらに中の君を引き込んで唱和となるこの場面は、あるいは三人の初めての心の交流であったのかもしれない。互いが互いを求め合い、寄り添うようにしてこの世の荒波を乗り越えていこうとする、三人の姿が描かれているこの場面は、文字通り「宇治の物語の始発」と

の場面として位置づけることができるであろう。

注

- (1) 大朝雄二「源氏物語・宇治の女はらから論(上)」(『文学』岩波書店 一九八六年三月) ↓ 『源氏物語続篇の研究』桜楓社 平成一九九一年一〇月。
- (2) 『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。
- (3) 新編全集頭注には、「無常の現世に残された娘たちの不幸を思い嘆く歌」とある。新日本古典文学大系『源氏物語』(岩波書店)頭注、新潮日本古典集成『源氏物語』(新潮社)などにも同様の指摘がある。その他、小町谷照彦「源氏物語の唱和歌の表現性」(『國語と國文學』東京大学国語国文学会 一九八四年五月)等。
- (4) 三谷邦明は、「源氏物語の言説区分―物語文学の言説生成あるいは橘姫・椎本巻の言説分析―」(『源氏物語研究集成第三卷 源氏物語の表現と文体上』風間書房 一九九八年一月)の中で、ここが自由間接言説であり、「語り手の認知だと理解できると同時に、宇治の八の宮の認識だといえるのである」と指摘している。従来解釈では、この部分を草子地、つまり語り手の評言とのみとらえてきたのだが、ここでは三谷氏同様、語り手と八の宮の心情が交錯する場面として読み解いておきたい。
- (5) 新編全集頭注には、「父宮なしに生きてはいけない運命を自覚した歌」とある。他、新大系の頭注や集成頭注等にも同様の指摘がある。

第二部 宇治在住時の詠歌

# 第一章 停滯する宇治中の君物語―椎本卷「かざし」詠を中心に―

## 一 はじめに

『源氏物語』『宇治十帖』に登場する女君のうちの一人中の君は、物語中に十九首の歌を詠んでいる。中の君に関する論考は決して少なくないが、その詠歌に注目し、主眼として論じたものは、まだまだ多くはないように思われる。しかし、和歌がその独自の表現性や伝達事項によって物語の世界に深く浸透してくるものであり、散文表現とは一線を画す特殊な表現領域を占有する言語である以上(注1)、そこに記されたものの意味を問うことは決して無意味ではあるまい。

本章では、結婚前に中の君が匂宮と交わした二組の贈答歌を取り上げる。両者は結婚前までに幾度となく歌を取り交わしたとされるが、その詠歌が具体的に物語中に描かれるのは、ここに取り上げる椎本卷の二度の贈答のみである。また、二度目の贈答は、一度目の贈答を踏まえる形で詠まれていて、照応性が強く見られる。このことについては、既に大君論の立場から小町谷照彦によって、「総角への物語の展望を含みつつ薫と大君の交渉の追求が一段落した部分で、間奏曲的に挿入されたものである(注2)」との見解が示されている。が、中の君論の立場から考えれば別の見方も可能であるように思われる。大君を中心とした一連の物語の流れの中で、中の君物語がどのように生成されていったのか、その単純ではないありようを「かざし」詠を中心として読み解いてゆく。

## 一一 宇治中宿りの場面

椎本巻は、匂宮の宇治への中宿りの場面から語り起こされる。荒れ果てた葎の宿に高貴な姫君を見出し出すという発想は当時好まれた恋愛の一つの型パターであり、かねて薫から宇治人の宮家の姫君たちの噂を聞いていた匂宮は、姫君たちへの関心から、初瀬詣でを口実として宇治を訪れたのであった。今をときめく帝の寵児の宇治訪問の様子は本文に、

上達部いとあまた仕うまつりたまふ。殿上人などはさらにもいはず、世に残る人少なう仕うまつれり。六条院より伝はりて、右大殿しりたまふ所は、川よりをちにいと広くおもしろくてあるに、御設けさせたまへり。……(夕霧右大臣の)御子の君たち、右大弁、侍従宰相、権中将、頭中将、藏人兵衛佐などみなさぶらひたまふ。帝、后も心ことに思ひきこえたまへる宮なれば、おほかたの御おぼえもいと限りなく、まいて六条院の御方さまは、次々の人も、みな私の君に心寄せ仕うまつりたまふ。

〔椎本一六九―一七〇頁(注3)〕

とあり、都の栄華を現出させたかのように華やかなものであった。その様子に触発された八の宮は、都社会からの疎外感を愁訴するかのような歌を贈る。これに匂宮が返歌、薫がそれを携えて八の宮邸を訪れることによって、初めて両者の交流が図られることになる。

かの宮は、まいて、かやすきほどならぬ御身をさへところせく思さるるを、かかると忍びかねたまひて、おもしろき花の枝を折らせたまひて、御供にさぶらふ上童のをかしきをして奉りたまふ。

「山桜にほふあたりにたづねきておなじかざしを折りてけるかな

野をむつまじみ」とやありけん。御返りは、いかでかはなど、聞こえにくく思しわづらふ。「かかるとのこと、わざとがましくもてなし、ほどの経るも、なかなか憎きことになむはべりし」など、古人ども聞こゆれば、中の君にぞ書かせたてまつりたまふ。

「かざしをる花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬ春の旅人

野をわきてしも」と、いとをかしげにらうらうじく書きたまへり。げに川風も心わかぬさまに吹き通ふ物の音どもおもしろく遊びたまふ。

「椎本一七四〜一七五頁」

対岸で饗応を受ける薫一行に対し、身分柄そこに留まらざるを得ない匂宮ではあったが、姫君たちへの思いは止みがたく、「かかるとにだに」と再び歌を贈る。この歌は、「山桜にほふあたり」と宇治の地を賞賛しつつ、二人の姫君を「山桜」の美しさに喩えたものであった。また、「おなじかざし」は、若菜下巻において紫の上が女三の宮に親交を求める場面に、「おなじかざしを尋ねきこゆれば、かたじけなけれど、分かぬさまに聞こえさすれど、ついでなくてはべりつるを。今よりは疎からず……」「若菜上九一頁」とあるように、同じ血筋、先祖、同類を意味する言葉である(注4)。匂宮の歌は、宇治の地を賞賛しつつ、そこに暮らす八の宮家が同じ皇族であることを訴えて交誼を求めようとする、多分に社交的なものであった(注5)。

しかし一方でこの歌は、その後「野をむつまじみ」と続けることにより、姫君たちへの恋情を滲ませてもいる。この言葉は、山部赤人の宴席における四連作の一（注6）、

春の野に すみれ摘みにと 来し我ぞ 野をなつかしみ 一夜寝にける

〔万葉集 卷第八〕

を引いていると諸注に指摘されているが、続く、

あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば いたく恋ひめやも

〔万葉集 卷第八〕

もまた連想されていよう。「野辺の美しさが慕わしくて、一夜をここで過ごしました」「この山桜が長く咲き続ける花ならば、こんなにも恋しく思ったでしょうか（儂い出会いゆえに、私の心はひどく乱れているのです）」——句宮からの交誼を求める言葉に姫君たちは戸惑いを隠せない。しかし老女房たちは「かかるをりのこと」、つまり座興としての返歌を勧めた。句宮の思ひは、場の空気に酔いしれる人の宮や老女房たちによつてかろうじて受け止められたのであった。

中の君の返歌は、「挿頭の花を折るついでに、山賤の垣根を通り過ぎた春の旅人よ」と、答歌とも独詠歌とも見分けのつかぬものである。句宮に積極的に応えようとするよりは、「うはべばかりをもて消たじ」「椎本二一四頁」といった心性が働いていようか。この歌は、姫君たちを限定する「おなじ」という言葉を排し、単なる「かざし」と一般化すること、句宮の下心をはぐらかすことに成功している（注7）。また、「かざし」「をる」「花」「山」「野をわきてしも」と、句宮の

贈歌と同一または類似の語句を多様することで、この「をり」に相応しい言葉遊びの興趣を醸し出してもいる。句宮の多分に社交的な歌に対し、中の君もまた同様の趣向で応えたと言つていいであろう。しかしそれに続く「野をむつまじみ」は、そうした社交性を越えていこうとするものである。この箇所には、次の引歌が指摘されている(注8)。

分きてしもなに句ふらむ秋の野にいづれともなくなびく尾花に

〔未詳〕

『源氏釈』以来、約三〇〇年支持されてきたこの歌は、『弄花抄』で「不当也」と評され、以来、引歌であることを疑問視されてきた。春の場面に相応しくないというのが一番の理由だが、他に適当な歌は見つかっていないのである。そこで現在は、「わざわざ野を分け入つておいでになつたのではありますまい」と解釈するのが通例となっている。しかし、引歌未詳とされる以上(注9)、『源氏物語』が書かれた時代に最も近い注釈書に収載されたこの歌を、今一度解釈に取り入れてみることは、あながち無意味な作業でもあるまい。

歌意は、「とりわけて美しく匂つたのでしょうか、秋の野にただ靡いている尾花たちの中にありましたのに(どうして私たちのことをお知りになつたのでしょうか)」となる。「尾花」は、例えば古今集に、

秋の野の花にまじり咲く花の色にや恋ひむ逢ふよしをなみ

〔古今集 恋一〕

とあるように群生植物で、古今集歌は、その尾花に交じることと逆に花の美しさが際だつという趣向になっている。





いづくとかたづけねて折らむ墨染めにかすみこめたる宿の桜を

なほかくさし放ち、つれなき御気色のみ見ゆれば、まことに心憂しと思しわたる。

〔椎本二一四頁〕

今ここで匂宮とともに昨年の宇治の中宿りを回想しているのは、「親王の御住まひをまたも見ずなりにしこと」と、薫とともに対岸の八の宮邸を訪れ、その楽の音を楽しんだ人々であった。実際に八の宮と接した彼らにとって、その死は身近なものとなり、命の儚さについての嘆きも口をついて出てくるのであるが、しかし匂宮にとつてその会話は、八の宮の不在を再認識させ、姫君たちへの恋情をますます募らせるものでしかなかった。また物語は、昨年中宿りの際に八の宮邸を訪れた人々のことを次のように語っていた。

客人たちは、御むすめたちの住まひたまふらん御ありさま思ひやりつつ、心つく人もあるべし。

〔椎本一七四頁〕

若き人々、飽かず、かへりみのみなんせられける。

〔椎本一七五頁〕

しかし、その宇治中宿りを回想しているはずのこの場面では、姫君たちのことはまったく話題に上っていない。このことは、八の宮が、

まれまれはかなきたよりに、すき事聞こえなどする人は、まだ若々しき人の心のすさびに、物詣での中宿、往き来のほどのなほざり事に気色ばみかけて、さすがに、かくながめたまふありさまなど推しはかり、侮らはしげにもて

なすは、めざましうて、なげの答へをだにせさせたまはず。

〔権本一七七〜一七八頁〕

と、行きずりの旅人の興味本位の文には決して返事をさせなかつたという、まさにその旅人を我々に想起させるとともに、逆に「この春は」と意気込む句宮の異常なまでの執心を浮かび上がらせるものとなっている。

句宮の歌は、こうした執心をはつきりと打ち出すものである。昨年「かざし」の贈答、さらには八の宮の忌み明け等も手伝つて、その思いをさらに率直に表現したもので、それゆえに逆に姫君たちの反感を買ってしまうものでもあった。「かざし」は、先に確認したように、姫君たちを象徴しているが、前回の社交性に富んだ歌に比べ、今回の歌は贈歌というよりも独詠的であり、むしろ決意表明に近い感がある。新編全集にも「傍若無人の発想。東宮候補でもある宮の高飛車な態度ともとれる」、「句宮は、ときに高飛車な物言いをする。その三の宮という素性・地位の、恐いもの知らずの自信から出る言葉である」(注10)とある。しかし好色人、風流人として名を馳せていた句宮が、いくら東宮候補としての自負心、自尊心があるとしても、女心を介さない強引、傲慢なだけの歌をおくるであろうか。また、女もそれに返歌をしようとするだろうか。

次頁に掲げたのは、宇治中宿りの場面における贈答歌、並びに中宿り追想の場面における贈答歌を、同一または類似の語句によって便宜的に分けたものである。

【歌の重層構造】

○中宿りの場面

句宮①	中の君①
山(桜)	山がつの
桜	花の
にほふ	
あたりに	
たづねきて	(すぎぬ)
同じかざし	かざし
折りてけるかな	をる
	たよりに
	垣根を
	春の旅人

○中宿り追想の場面

句宮②	中の君②
宿の桜を	宿の桜を
(見し)	墨染めに
	(いづくとか)
かざさむ	たづねて
折りて	折らむ
つてに	
へだてず	(こめたる)
この春は	
かすみ	かすみ

まず網掛け部分を御覽いただきたい。一見して分かることは、句宮②の歌が、中の君①の歌を受けて詠んでいるということである。それもただ受けているのではなく、「花」「桜」「かざし」「かざさむ」「をる」「折り」「たより」「つて」「垣根」「へだて」、「春の旅人」「この春」と、ほぼ同じ語句を使用している。このことは、句宮②の歌が宇治中宿りの場面における中の君答歌の趣向をそのまま踏襲しているということであり、言うならば前回の「かざし」の贈答の際の中の君の答歌の、その答歌という形になっているのである。確かに、いささか驕慢の誇りを免れぬ詠みぶりではある。しかし、一言一句を踏まえるという細心さと、そこから繰り出される恋の訴えの大胆さは、中の君に「見どころある文」と感じさ、返歌させる動機としては十分であつたと考えられる。

また、中の君の返歌の直接の動機は「いとつれづれなるほど」なのであつた。夏でも秋でも冬でもない「春」のつれづれは、「宇治」の物語のあちこちに鑲められていた。

i 御衣どもなど萎えばみて、御前にまた人もなく、いとさびしくつれづれげなるに……。

〔橋姫 一一三〜一二四頁〕

ii つれづれとながめたまふ所は、春の夜もいと明しがたきを……。

〔権本 一七二頁〕

iii いつとなく心細き御ありさまに、春のつれづれは、いと暮らしがたくながめたまふ。

〔権本 一七六頁〕

i は、八の宮家がまだ京にあつた春のある日、琴を奏する幼い姫君たちの様子、ii は、句宮の宇治中宿りに際し、八の宮の姫君たちの将来を案じる様子、iii は、中宿りの後、八の宮が姫君たちの将来を憂うる様子である。父娘三人の

慰む方のない暮らしの中で繰り返し語られてきた春のつれづれは、八の宮家にとって春こそが、四季のうちでも殊更に深い物思いを誘われる季節であったことを意味している。また、春のつれづれは、八の宮の姫君たちへの思いと抱き合わせに語られてもいた。姫君たちを身分不相応な暮らしの中に埋もれさせてしまうことを惜しむ八の宮にとって、春は都社会への断ち切れない未練を炙り出す季節でもあったのである。人気のない山里で、寄り添うように暮らしてきた父娘にとつて、春の憂い、無聊が父宮だけのものでは考えられまい。日常化した春の夜長にきら星のごとく現れた句宮一行に八の宮が都を想起し交流を求めずにはいられなかったように、昨年都の華やぎを体感してしまつた中の君もまた、句宮に文を返さずにはいられなかつたのである。

中の君の返歌は、「あるまじきことかな」と男の求愛を拒みつつも、一方で「うはべばかりはもて消たじ」と、その趣向に応えようとするものであつた。図表では、それぞれに共通した言葉を枠で囲つたが、再度確認すると、句宮②は中の君①と贈答関係になつており、さらに中の君②は句宮②だけでなく、句宮①もまた踏まえる形となつている。句宮①——中の君①、句宮②——中の君②が贈答関係にあることは自明であるが、前述のように中の君①——句宮②にも贈答関係が認められ、さらに句宮①——中の君②にも照応関係が認められるということにもなると、中の君②は句宮①を吸収摂取して成り立つているともいえよう。歌の重層構造と呼ぶ所以である。

いったい何処と尋ねて折るうとこのうか、墨染め色にかすみの立ち込めている宿であるものを——というのが中の君②の歌意である。その心を隔てているものは「墨染め」色のかすみ、つまり八の宮の死であつた。句宮はこの返歌に「まことに心憂し」「権本二一四頁」と失望の念を禁じ得ないのだが、しかし中の君の哀しみは実はかなり薄らいできているのである。

兵部卿宮よりも、たびたびとぶらひきこえたまふ。さやうの御返りなど、聞こえん心地もしたまはず。

〔椎本一九二頁〕

御忌も果てぬ。(匂宮は)限りあれば涙も隙もやと思しやりて、いと多く書きつづけたまへり。時雨がちなる夕つ方、

(匂宮)「牡鹿鳴く秋の山里いかならむ小萩がつゆのかかる夕暮れ

ただ今の空のけしきを、思し知らぬ顔ならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野辺もわきてながめらるるころになむ」などあり。(大君)「げに、いとあまり思ひ知らぬやうにて、たびたびになりぬるを、なほ聞こえたまへ」など、中の宮を、例の、そそのかして、書かせたてまつりたまふ。……(中の君)「なほこそ書きはべるまじけれ。やうやうかう起きゐられなどはべるが、げに限りありけるにこそとおぼゆるも、疎ましう心憂くて」と、らうたげなるさまに泣きしをれておはするもいと心苦し。

〔椎本一九三〜一九四頁〕

それまでの中の君は、匂宮への返歌を頑なに拒み続けていた。それは、返歌することが自らの悲しみの浅さを自覚することにつながると思えたからである。しかしそう自身に言い聞かせることそれ自体が、悲しみが薄らいでいつている証拠なのではないだろうか。中宿り追想の場面における中の君の答歌は、「詠まない」という姿勢が一転して「詠む」という姿勢へと変化したことが重要と、まずは考えるべきであろう。

さらにこの答歌では、中の君は自らが「花」の喩であることも受け入れている。一見「あるまじきことかな」と拒絶の反応を見せながらも、しかし匂宮の「花」となることを受け入れる形で読まれた歌——執拗に寄り添わされた言葉の数々は、もはや中宿りの場面における言葉遊びの域を明らかに越えてしまっているであろう。

#### 四 停滞する中の君物語

今まで二度の「かざし」の贈答の場面をそれぞれ考察してきたわけだが、最期に両場面を対比的に見ていくことで、その類似点・相違点を明らかにしておきたい。

まず類似点であるが、そもそも匂宮の宇治中宿りは、二で見てきたように、八の宮家にとっては春のつれづれの中に起こった大きな一つの事件であった。今、中の君もまた、やはり昨年と同じ春のつれづれの中で返歌をしている。また、両者の交流の端緒となった匂宮の贈歌は、「かかるをりにだに」という思いから送られたものであり、中の君はこれに「かかるをりのこと」として返歌をしたのであった。今中の君は、「見どころある御文の、うはべばかりをもて消たじ」と、やはり「をり」を重視した歌を返している。つまり両場面の状況、設定はかなり似通っているということができよう。

匂宮はこれに、一年という月日を経てすら何の変化も感じられない中の君の態度に落胆の色を隠しきれない。しかし中の君は本当に何も変わっていないのか。相違点として挙げたいのは、そこに八の宮、老女房といった他者が介在しないことである。振り返ってみると、中宿りの贈答は、八の宮が邸に匂宮を呼び込み、老女房がその返歌をすることで行うようになっていたのであった。しかしその後、贈答は何度も繰り返され、ついでこの中宿りの贈答になるのである。一年という期間は、その間に父親の死、匂宮の熱烈な求愛に戸惑う中の君の心情を挟み込むことで中の君の精神的成長を語っているのであり、ゆえに他者を介在させないこの贈答の成立は、一見表面的には大きな変化は見えないものの、中の君の心の匂宮への傾斜——その後の結婚の可能性までもが示されていると言えるのである。



以上、二度にわたり「かざし」の贈答を、地の文との関わりの中で考察してきた。両場面は、匂宮の宇治の姫君への執心と、中の君の精神的成長——二人の心の距離の接近を語っていたのであった。しかしこれらの贈答歌は、贈歌の言葉が返歌によって掬い絡めとられてゆくのみで、未来に開かれていくことはない。つまり、中の君②の答歌が匂宮①の贈歌を、匂宮③の贈歌が中の君④の答歌を、さらに中の君④の答歌が匂宮①③の贈歌を踏まえるというように、新しく読まれたはずの言葉は、過去の言葉に牽引されていってしまうのである。そうした言葉の循環構造または停滞状態の中で、中の君の物語はいったん終息せざるを得ないのであった。

当事者の間の関係性の中では、これ以上の展開は望み得ない。物語は第三者の介在・関与を要請することにならざるを得ないのである。しかしそれはこの二組の贈答が無効だということではない。和歌の応酬によって心の交流が果たされながらも、いわば熟柿状態を保ちつつ、その先に進めない飽和状態が現出していることを確認したかったのである。

## 注

(1) 小町谷照彦「源氏物語の和歌」『源氏物語講座第一巻 主題と方法』有精堂 一九六七年五月。

(2) 小町谷照彦「大君物語の始発—和歌的な始点から—」(『日本文学』24・11)→「大君物語の始発—「橋姫」「椎本」の展開—」『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年八月。

(3) 『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には

巻名・頁数を記した。

(4) 古語大辞典(小学館)には、「(舞人は一 双の場合、同じ花をかざすところから「同じかざし」の形で)血筋、先祖。同類」とある。この部分について、河海抄以来多数の注釈書が伊勢の「わが宿とたのむ吉野に君し入らば同じ挿頭をさしこそはせめ」を引歌としてあげているが、疑問である。宗雪修三も「椎本」巻における和歌言語の方法」(名古屋大学国語国文学43)名古屋大学国語国文学会 一九七八年(二月)において考察を試みているが、結論は保留している。

(5) 清水好子は「宇治の中宿り―作中人物の歌」(『講座源氏物語の世界』(第八集)有斐閣 一九八三年六月)の中で、「同じ皇族の血を云々することは、八の宮家の誇りを重んじ、加えて相手の心を開かせるには無上の手だてである」と述べている。

(6) 万葉集一四二四番「山部宿禰赤人が歌四首」。なお、引用本文は、新潮日本古典集成本に拠る。

(7) 小町谷照彦は、注(2)の論文において、「句宮の「野をむつまじみ」に形式を揃えているのは滑稽な感じで、諧謔的要素が強いように思われる」と述べている。

(8) 『源氏物語引歌索引』(伊井春樹編 笠間書院 一九七七年九月)。

(9) 『源氏物語評釈 第十巻』には、「「野をわきてしも」という文句はいかにも出典の本歌がありそうに思われるが不詳である」とあり、また新編全集頭注も「わきてしもなに句ふらん……」の歌を参考として載せつつも疑問としている。

(10) 新編全集『源氏物語』二一四頁。頭注五、同頁鑑賞・批評欄。

## 第二章 すれ違ふ姉妹の行方―椎本巻の八の宮哀傷歌をめぐる―

### 一 はじめに

宇治の大君と中の君の姉妹はそれぞれに違う属性を持つ、ゆえに違う人生を歩んだのだ——ということとは、今さら確認するまでもないことのようにでもある(注1)。しかしながら近年の研究においては、構造論的な立場から二人の同一性を重視した立論が少なからず見受けられる(注2)。たしかに、橋姫巻冒頭では、二人は出生のあり方、八の宮の養育態度(「いづれをも、さまざまに思ひかしづききこえたまへど……」「橋姫一二〇頁(注3)」、成長の過程(「……さまざままにおはす」「橋姫一二二頁)等に見られるように、それぞれ明確に描き分けられるが、成人後の差異はほとんど問題視されず、むしろ「二」ところ「椎本一八七頁」、「同じ心」「同頁」などと常に相似形の一对の姉妹であることが強調される。姉妹はその特殊な生育環境から互いに深く結びつかざるを得なかつたのであり、成人後についての(語り)が、差異よりも同一性により比重が置かれてしまうことも故なしとしない。

しかし本章ではあえて、同一性ということばの中に埋没してしまっている、互いに主張しあう(個)としての大君、中の君の姿に今一度注目したい。「宇治十帖」の人物たち(ここでは姉妹)が、他者との関係性の中でしか存在できないとするならば、その関係を形成する基盤となる(個)の単体としてのありようこそが重要であると考えからである。

さて、椎本巻において八の宮の薨去が語られる。父宮の死は、姉妹がいよいよ互いだけを頼りにして生きてゆかざるを得ない自覚を促すことになる。二人はその絆を確かめるように、同年の暮れと翌年の春と二度にわたってそれぞれ哀傷歌を詠出するのだが、物語の中で二人の贈答歌が具体的に記されるのは、実はこの二箇所しかないのである(注4)。無論、二人がこの他にまったく歌を交わさなかつたということはあり得ず、後に中の君は「行きかふ時々に従ひ、花鳥の色をも音をも、同じ心に起き臥し見つつ、はかなきことをも本末をとりて言ひかはし、心細き世のうさもつらさも語らひあはせきこえしにこそ、慰む方もありしか……」「早蕨三四五頁」と回想している。なぜ物語中に姉妹の贈答歌が二度しか表れないのか。さらに言うなら、なぜこの二組の贈答歌に限って語られなければならなかつたのか。

本章ではこの点に着目し、二組の贈答歌について詳細な検討を加えてみたい。手順としては、まず二つの歌の場面を比較することで、姉妹の(生)のあり方の違いを見出し、続いてこれらの贈答歌が物語に記された意味を考えていくことにする。

## 二 両場面の同一性と差異

まず、対象とする二つの場面を掲げる。

**本文A** (年の瀬の贈答歌)

雪、霰降りししくころは、いづくもかくこそはある風の音なれど、今はじめて思ひ入りたらむ山住みの心地したま

ふ。女ばらなど、「あはれ、年もかはりなんとす。心細く悲しきことを。あらたまるべき春待ち出でてしがな」と、心を消たず言ふもあり。難きことかなと聞きたまふ。……このごろのこととて、薪、木の実拾ひて参る山人どもあり。阿闍梨の室より、炭などやうの物奉るとて、「一年ごろにならひはべりにける宮仕の、今とて絶えはべらんが、心細さになむ」と聞こえたり。かならず冬籠る山風防ぎつべき綿衣など遣はししを思し出でてやりたまふ。法師はら、童べなどの登り行くも、見えみ見えみ、いと雪深きを、泣く泣く立ち出でて見送りとたまふ。「御髪などおろいたまうてける、さる方にておはしましませましかば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましやは」など語らひたまふ。

君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をもなにとかは見る  
中の宮、

奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば

うらやましくぞまたも降りそふや。

〔椎本二〇三〜二〇五頁〕

本文B〈新春の贈答歌〉

年かはりぬれば、空のけしきうららかなるに、汀の水とけたるを、ありがたくもとながめたまふ。聖の坊より「雪消えに摘みてはべるなり」とて、沢の芹、蕨など奉りたり。齋の御台にまゐれる、「所につけては、かかる草木のけしきに従ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」など、人々の言ふを、何のをかしきならむと聞きたまふ。

君がをる峰の蕨と見ましかば知られやせまし春のしるしも

雪ふかき汀の小芹誰がために摘みかはやさん親なしにして

など、はかなきことどもをうち語らひつつ、明け暮らしたまふ。

〔椎本二二二〜二二三頁〕

八の宮の死は「八月二十日のほど」〔椎本一八八頁〕のことであつた。本文Aはそれから四ヶ月ほどが経つた十二月末のことであるが、姉妹の悲しみは癒えることがない。女房たちは沈み込んだ邸内の雰囲気をあらためるためにも早く春が来て欲しいと願うが、姫君たちは「難きこと」と思う。そんな折り、阿闍梨の元から「炭などやうの物」が法師や供の童らによつて届けられる。姉妹は、深い雪の中を帰山する使いの者たちの後ろ姿に、山寺で亡くなつた父宮を偲び、歌を交わす。

一方本文Bは、それから程ない翌春の場面である。阿闍梨の元から今度は芹や蕨などの山野草が届けられる。いち早く訪れた「春のしるし」に、女房たちは喜びを交わすが、姉妹は悲しみを分かち合うばかりである。

本文AとBの場面は、春の到来を切望し、またはそれを喜ぶ女房たちの会話（傍線部）から、それに共感し得ない姫君たちの心情が語られる（波線部）という展開の様相が共通する。またその位置は前後するにしても、阿闍梨からの季節の贈り物が語られる（二重傍線部）という点も重要な共通点としてあげられよう。しかしその類似性は、同時にその差異をも明らかにしてしまふに違いない。両場面の違いとは何か。

本文Aの和歌において、姫君たちは父宮の亡くなつた阿闍梨の山寺に関わることは、すなわち「岩のかけ道」「奥山（の松葉）」を詠み込んでいる。姉妹はひたすら亡き父宮を慕つており、父宮の眠る山寺と生前暮らしていた自邸とをつ

なく訪問者の帰山が、二人に歌を詠出させる端緒となったのであった。この時の二人は、春の到来を待ち望む女房たちの言にはほとんど同調できないでいる(渡線部)。一方本文Bの和歌は、阿闍梨からの贈り物ではあるが、父宮の記憶には直接かかわらない「峰の蕨」「汀の小芹」を、そのまま歌に詠み込んでいる。ここでは詠歌のきっかけが、芹、蕨などの野草に春の到来を感じ喜ぶ女房たちへの反発であったことを見逃してはなるまい。本文Aでは「難きことかな」という思惟に終わっていた女房たちへの違和感が、本文Bにおいては「何のをかきならむ」と心中に呻吟するにとどまらず、〈声〉を伴う表現行為へと展開していくのである。

姫君たちは本文Aではひたすら亡き父宮への哀傷の思いに沈んでいるのに対し、本文Bでは春の到来を喜ぶ女房たちや否応なしにやってくる春という季節に抵抗する形で歌を詠んでいるのだ。反撥とは跳ね返す力であり、それには相應のエネルギーが必要であろう。本文Bにおける姉妹は、もはや悲しみに打ちひしがれているだけの存在ではない。否、積極的に周囲と対峙していかうとする〈生〉の姿勢がここにはあるのである。

従来、本文Bの贈答歌は、二人が周囲の人々に反撥し、ますます二人だけの世界に入り込んでいくものとして解釈されてきた(注5)。しかし本文Aと比較することによって、本文Bの場面が、二人が父宮の思い出だけに縋って生きることをやめて、それぞれの〈生〉を歩み出そうとしている姿と捉えることができるのではないだろうか。本文Bは、八の宮哀傷という物語の流れにとりあえずの区切りをつけるとともに、一方で新たな物語展開を呼び込むものとなっていると読み得るのである(注6)。

### 三年の瀬の贈答歌に見える二人の差異

#### (1) 寄り添う二人

八の宮の死後、忌みに籠もる者や弔問者などで賑わった宇治の邸だが、今となつては訪れる者は誰もいない。訪問者が多ければ多いで恐ろしく、しかしいなければいけないでそれもまた寂しい——年の瀬を迎え、姉妹には父宮の不在が身に染みて辛く感じられている。そんな折り、阿闍梨の元から使者がやつてくる。二人は返礼の品を持って帰山する法師、童を見送り会話を交わすのだが、それは「さる方にておはしまさましかば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましやは」「本文A参照。以下同」と、反実仮想表現によつて覆い尽くされたものであつた。この本文Aの会話部分(点線部)は、本文Bには見られない独自の要素である。二人の会話は融和し、どちらがどのように発したもののなにか区別がつかない。あたかもそれは、姉妹が互いのことばを共有することで、その悲しみをも融合させようとしているかのようなのである。しかしいくら語り合つたところで二人の心が一つになることはない。続く贈答歌は、まさにそうした会話からこぼれ出た、それぞれの悲嘆の〈声〉なのであつた。

#### (2) 背反する心

大君は、「君なくて」「岩のかけ道絶えしより……」と、不在、断絶を意味する語を重ねて用いることによつて、父宮が亡くなった現実を直視した歌を詠む。「生きていると仮想したい」と語り合いながらも、八の宮の死は厳然としてそこに



あることを、大君は認めざるを得ない。どんなに待ちたくとも待つことはできぬという絶望感、引歌として指摘されている次の歌からも読みとることができるのである(注7)。

世にふれば憂さこそまさされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ

〔古今集 雑歌下(注8)〕

この歌の上句からは、さらに大君が自らの(へ生)を憂えて、いつそ父宮の後を追って山へ籠もってしまいたいとの気持ちまでもが読み取れる(注9)。また下句の「松の雪をもなにとかは見る」には「待つ」の意が掛けられている。歌語「松の雪」は、はかないことの喩である(注10)。ここには待つ甲斐もなく過ごすはかない日々が投影されていると考えられる。さらに、「なにとかは見る」の「かは」も——諸注「疑問」と解していて特に問題はないようだが——反語の意とも取れる余地を残しており(注11)、そうなると返歌を期待しない自らへの問いかけの形ともなる。父宮の亡くなった今、宮家の家長として生きていかなばならない己れの姿を顧みるとき、父宮の死と、自らが置かれた「帰らぬ人を待つ」境遇と、自らの未来(将来)とを悲観的な思いで眺めたものなのであった。

一方の中の君は、大君の(山(里)の松)を受けて、(奥山の松)へと展開させている。「奥山」は、父宮の薨去した山寺を指しており、その背景には先程見送ったばかりの「法師ばら、童べなどの登り行くも、見えみ見えみ、いと雪深きを……」の情景が想起されている。また、下句「消えにし人を思はましかば」には、歌の直前の語らい「……さる方にておはしまさましかば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましやは」が踏まえられていると考えられ、その会話(心情)がそのまま歌に流れ込んだものと見ることがで

きよう。つまり中の君は、大君と二人で見た情景を、また共に慰め語り合つたことばを踏まえて歌を詠んでいるのである。それは中の君が大君に心を合わせよう、寄り添おうとしている姿に他ならない。中の君は、大君に心開いているのである。さらに中の君の歌には次の歌が引歌として指摘されてもいる(注1と)。

深山には松の雪だに消えなくに宮こは野辺のわかなつみけり

〔古今集 春上〕

傍線部に見るように、この古今集上句には「山」「松」「雪」「消え」と、中の君の詠歌と同じ語が使用されている。また、深山では(はかないはずの)松の雪でさえも消えていない(消えにくい)というのに——という歌意も、松の雪をはなくはないと捉えている点で、中の君の詠歌との共通性が認められる。しかしそれよりも重要なのは、この古今集歌には大君の問いかけ「松の雪をもなにとかは見る」の「松の雪」がそのまま見えるという点であろう。おそらく中の君は、大君の問いかけに対してこの古今集を想起し、それを展開させて「せめて待つことを仮想できたら」と自らを慰める歌を詠出したのであろう。八の宮邸の庭の松から、宇治山の松へと、その空間を転移させながらも、中の君の歌は、大君と共通のことばや背景を詠み込むことで、共に寄り添って生きていこうとする、否、生きていかねばならない(生)のあり方を自覚的に詠んでいるのである。振り返って、大君の歌は中の君の歌のような背景を持たない。深く自らの世界に入り込んで、他者を受けつけようとはしないのである。大君の歌は、語りかけながら自閉する。このように、両者の詠歌からは、まったく対照的な二人の心のありようが鮮明に浮かび上がってくるのである。

#### 四 新春の贈答歌に見える二人の差異

(1) 結束する二人

春の気配が漂い始めた宇治の山里に、阿闍梨の元から芹や蕨などの若菜が届けられた。阿闍梨から若菜が贈られるという場面は、本文Bの翌春を描いた早蕨巻頭にも見ることができが、阿闍梨はそこで次の歌を詠んでいる。

君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初蕨なり

〔早蕨三四六頁〕

「君」は八の宮を指す。また「つみ」には蕨を「摘み」と年月を「積み」の意が掛けられている。故宮にと毎年摘んできた蕨を、今年もまた忘れずにお届けします、という意であるが、春、八の宮家に若菜が贈られることは恒例になっていたのである。それも今まではいち早く春を告げるめでたい風物として宮家の人々には受け止められてきたのであった。それが今年、服喪中の精進料理として食膳に供されている。姫君たちはこの春が、昨年の春とはまったく違うものになつてしまったことを、若菜を通して実感する。

そのような姉妹を尻目に、女房たちは待ちかねた春の到来に喜びの声をあげるのであるが、姉妹は論外のこととしてこれに大きく反撥する。大君は、女房たちの言葉「行きかふ月日のしるし」〔本文B参照。以下同〕をそのまま歌の中に「知られやせまし春のしるしも」と詠み込み、この蕨は春のしるしではない、春を受け入れることはできないと否定し

去る。不快感をあらわにしているとみてよいであろうか。また中の君も、「所につけては……をかしけれ」と若菜をもてはやす女房たちに応じて「誰がために摘みかはやさん」と、埋めることのできないその心理的距離を慨嘆するばかりである。これも女房たちの態度に対するあからさまな非難と見ることができよう。姉妹は、女房たちの会話をそれぞれの中の否定的な形で詠み込むことによつて、周囲への對抗姿勢をはつきりと打ち出している。ここには本文A（点線部）にみえた、姉妹二人が違いに寄り添うようなしめやかな会話は一切ない。贈答歌の前に位置していた父宮哀傷の会話——互いに慰めあう傷心の姫君たちの姿は、まったく消え失せているのである。姉妹はもはや悲しみに打ちひしがれているだけの存在ではないのだ。

と同時に、この贈答歌には姉妹が違いに深く結びつこうとする姿勢もまた詠み込まれている。大君の歌は、今年の年の瀬の中の君の答歌を踏まえており、一方中の君も、その大君の贈答歌を踏まえて返歌をしている。そうした姉妹のありようは、それぞれの歌の細部に焦点を絞り込むことによつてさらに明白となつてこよう。

次に掲げる表は、本文Aの年の瀬の贈答歌と、本文Bの新春の贈答歌を、同一または類似の語句などによつて便宜的に分類したものである。

（網掛け部は類似（同一）語句。波線部は関連語句。逆矢印は大君②、中の君②で対比関係にあるもの。また、重複する語句は括弧で括った。）

						大君①
		何とかは見る	松の雪をも	絶えしより	岩のかけ道	君なくて
思はましかば	奥山の		松葉につもる 雪とだに	消えにし人を		中の君①

						大君②
		見(ましかば)	春のしるしも↑↓雪深き			君がをる↑↓誰がために 摘み(かはやさん)
知られやせまし (見)ましかば	峰の蕨と↑↓汀の小芹	(摘み)かはやさん		親なしにして		中の君②

大君②は、まず「君がをる(折・居)」と詠出する。「峰(＝山)に父がいる」という発想は、中の君①「(父を)奥山の松葉につもる雪とだに(見たい)」をそのまま受けていると思しい。また、中の君①の反実仮想「まし」は、大君②では「ましか……まし」と、より強調されて用いられている。類似した発想といい、類似した形式といい、ここからは大君②が中の君①を強く意識して詠まれたであろうことが十分に察せられる。またこれに対する中の君②も↑↓で示したように、「君(父親)がを(折)る」に対して「(子である自分が)摘む」、「峰(山)」に対して「汀(里)」、「蕨」に対して「小芹」、「春」に対して「雪深き(冬)」と対比的な語を用いて、やはり大君の歌を意識し、絡みつくように返歌している。

二人はそれぞれの言葉を意図的に重ね合うことで、その心理的結束をより強固なものにしようとしているのである。姉妹がこのように強く結びつこうとする理由には、例えば、本文AとBの間に挟まれた薫の宇治訪問がその背景として考えられようか。

中納言の君、新しき年はふとしもえとぶらひきこえざらんと思しておはしたり。……(大君は)うちとくとはなけれど、さきざきよりはすこし言の葉つづけてものなどのたまへるさま、いとめやすく、心恥づかしげなり。かやうにてのみは、え過ごしはつまじと思ひなりたまふも、いとうちつけなる心かな、なほ移りぬべき世なりけりと思ひわたまへり。……「暮れはてなば、雪いとど空も閉じぬべうはべり」と御供の人々声づくれば、帰りたまひなむとて、「心苦しう見めぐらさるる御住まひのさまなりや。ただ山里のやうにいと静なる所の、人も行きまじらぬはべるを、さも思しかけば、いかにうれしくはべらむ」などのたまふも、「いとめでたかるべきことかな」と片耳に聞きてうちあむむ女ばらのあるを、中の宮は、いと見苦しう、いかにさやうにはあるべきぞと見聞きわたまへり。

〔椎本二〇五〜二二一頁〕

薫は、この年の瀬の宇治訪問で、大君への恋情をはつきりとその胸の内に意識する。そして匂宮の中の君への懸想(ただし匂宮自身は姉妹を区別して恋情を訴えているのではない。匂宮が中の君を慕っているというのは、あくまで薫の都合によるもの)にこと寄せて、自らの気持ち大君に大胆に訴えかける。八の宮亡き今、薫は姫君たちの後見として絶對的な位置にあり、大君への接近は、それを助ける者(女房たち)はいいても、阻む者はいない。薫はさらに大君を京に迎え入れたい旨を申し入れ、帰京する。

この場面で姉妹は、薫の懸想相手としての大君、匂宮の懸想相手としての中の君と、それぞれ薫によって明確に振り分けられる。また、いつ男たちを手引きしてもおかしくない女房たちの姿も同時に語られており、二人を取り巻く環境は確実に変化してきているのである。父宮の遺言を遵守し、世間に翻弄されることなく生きていくためには、もはや互いの結束は不可欠なのだと言えよう。

この訪問に続いて語られる新春の贈答歌は、姉妹が一体となって生きていこうとする(生)の姿勢を強く打ち出すものであった。

## (2) 背反する心

しかし、その内実も果たして一体だったと言えるだろうか。例えば、大君の歌は「君なくて」「君がをる」と「君」という親愛の情を込めた二人称的表現を一貫して用いている。それに対し中の君の歌は、「消えにし人」「親なしにして」と、やや距離を置いた三人称的な表現を用いている。二人の、父を慕う心情は決して一体ではない。さらに詳しく見ていくことにしたい。

まず、(1)でも触れたが、大君②は中の君①の反実仮想「思はましかば」を受けて「見ましかば……知られやせまし」と詠んでいる。これを単なる呼応と捉えて済ましてしまつてはなるまい。大君は、中の君と同じ語をあえて用い、さらには二度重ねることによって、春を拒否する心情をより強めているのである。父宮が折りとつて下さった蕨ではない。よつてそれは春のしるしではない。春の到来は認められない——大君は、父宮不在のこの春を受け止めかねている。

また、「君が・居る・峰」という意味の連鎖と同時に成立している「君が・居る・蕨」の方を重視するならば、自分のために蕨を折りとつてほしい」と解釈することが可能であり、その場合「誰かのために(自分が)折り取る」という状況ではなくなる。ここで次のような歌が想起されるのである。

i 霞立つ春日の野辺の若菜にもなり見てし哉人もつむやと

〔後撰集 春上(注13)〕

ii 君のみや野辺に小松を引きに行く我もかたみにつまむ若菜を

〔後撰集 春上〕

i は、詠歌である女自身を「野辺の若菜」に見立てる。歌意は、「(自分が若菜となつて)摘んでもらいたい」となり、女から男への大胆な詠みかけであると理解されている。また、ii は、「(小松引きに出かける男に対して)女である自分も一緒に野辺に出でて若菜を摘みたい」という意である。「摘んでほしい」ではなく、「相手と一緒に摘みたい」という詠み方は、iとは発想を異にしているが、女からの積極的な働きかけという点では類似性が指摘できよう。

これらを大君②と照らし合わせてみるならば、大君B歌は、まるで父宮を恋人のように受けとめ、自分のために若菜を手折つてほしい、と詠みかけていると読み取ることができのではないだろうか。大君の歌の主体は、あくまでも



〈君〉（Ⅱ父宮）に対する〈我〉なのである。本文Aの場面では、大君の歌に自己に固執した自閉的な性質があることを指摘したが、この大君②からも同様に、自己本位な大君の性質が読みとれよう。そしてそれは中の君の歌と対比すること、よりいっそう鮮明になってくるのである。

中の君②は、若菜を摘むのはあくまでも自分であり、贈るべき相手は〈親〉（Ⅱ父宮）である。そもそも芹や蕨などの若菜を摘むことは、新しい生命を体内に取り込むことでその年の無病息災を祈るといふ呪的行為であった。民間の習俗としてあつたものが、延喜、天曆の頃、宮廷行事として取り入れられ、以後盛んに歌のなかにも詠まれていったのだと言われている（注14）。『源氏物語』若菜上巻にも、玉鬘が養父・光源氏の四十賀に若菜を献上した際の歌の贈答の中に「若菜」という語が見える。

（玉鬘）若菜さす野辺の小松をひきつれてもとの岩根をいのる今日かな

（源氏）小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき

〔若菜上五七頁〕

若菜を贈ることは、このように相手の長寿を寿ぐめたいものなのだが、しかし中の君には、長寿を寿ぎたいはずの〈父〉は既にある。中の君の歌はさらに「だから私はわざわざ芹を摘んだりしない」と続く。ここで注目されるのは、中の君は大君と違って、春の到来を決して認めていないわけではないということである。できることなら、早春の雪深い中をかき分けてでも父宮のために小芹を摘みたい——中の君の心は常に〈誰か〉（ここでは父宮）に向けて開かれている。

それは、同じように父を恋い慕いながらも、頑なに春の到来を拒否し、自らの悲しみの中に沈潜していかうとする大

君とはあまりに対照的な姿といえよう。

## 五 おわりに

ここまで八の宮の死の、その年の暮れと翌春の姉妹の贈答歌をそれぞれ対比的に見てきた。これらの場面は、阿闍梨からの贈り物、女房たちの会話、そして姉妹の贈答歌へと展開する状況が共通しており、このことは両場面が一つの流れの中で読まれるべきものであることを示している。

年の瀬の贈答歌は、姉妹がひたすら悲嘆に沈む中、阿闍梨からの贈り物を契機にして詠出されたものであった。二人は互いに言葉を共有することで、その悲しみを融合させようとするが、しかしその心は決して一体となることはできない。大君の歌は「松の雪をも何とかは見ると中の君に問いかげながら、その内実は、父宮の死によつて自らに課せられた〈生〉のあり方を悲嘆するものであり、一方の中の君の歌は、大君と共に見た情景、会話をその歌中に詠み込み、さらには歌語「松の雪」を用いた歌を引歌とすることで、悲嘆にくれる大君を慰めようとするものであった。ここには、自らの悲しみの中に埋没していく大君と、互いに寄り添って生きていかなばならない〈生〉のあり方を自覚する中の君の姿が描かれていた。

翌春の贈答歌は、同じく阿闍梨からの贈り物を契機として詠出されたものであったが、それは同時に春の到来に歓喜する女房たちへの反撥でもあった。二人はまるでその後の、周囲に翻弄される〈生〉を予感するかのように、互いに結

束しようと言葉を執拗に絡み合わせる。しかしその心はやはり一体とはなり得ない。大君は、年の瀬の中の君への贈歌同様「君」という語をその歌中に詠み込み、父宮への変わらぬ親愛の情を示す。そして、その父宮が私のために若菜を折りとつてくれたのだつたら……と慨嘆する。どんなに中の君と心あわせようとしても、また語り合つても、大君は父宮不在のこの春を受け入れることはできないのである。大君の歌は、多分に自閉的で自己中心的なものであった。一方の中の君は、父宮のために早春の若菜を摘んであげたかつた……と、亡き父宮を念頭においた歌を詠む。中の君は決して春を拒否してはおらず、また「親なしにして」と、その死を受け入れてもいる。ここには、年の瀬同様に自らの悲しみの中に埋没していく大君と、それとは逆に自らの置かれた状況を甘受する中の君の、まったく対照的な姿が描かれているのである。

最初の問題に戻ろう。なぜ姉妹の贈答歌が、この八の宮哀傷の場面に限って語られねばならなかつたのか。

姉妹は長い年月、父八の宮の庇護の下、長閑で穏やかな月日を過ごしてきたのであった。椎本巻における父宮の死は、そんな二人の精神を揺さぶり、その生活を根底から変えてしまう大きな事件だったのである。この場面に見える二人は、共に一体化しようとしながら、しかし一体化できないでいる。神田龍身氏の言を借りるならば(注15)、それは「差異への欲望」ではなく、「同化への欲望」と言えようか。しかし、それらの欲望が満たされることは決してない。おそらく物語は、埋めることのできない二人の差異を浮き彫りにすることで、その後の二人のまったく違う生の起点を定めようとしている。つまり、この哀傷歌の場面において明らかにされた差異性こそが、その後の姉妹それぞれの物語を領導していくのである。

(1)「三姉妹のうち大君と中君とは父母を同じくし、同じ父に育てられたが、二人の性質にはかなり大きな違いがあり、それが二人を異なる人生を歩ませる重要な原因ともなった」という重松信弘の論(『源氏物語研究叢書Ⅰ 源氏物語の人間研究』第四章第五節「宇治の三姉妹」風間書房 一九八〇年三月)を待つまでもなく、姉妹が対照的な性格を賦与されていることは、自明のこととして論じられてきた。一般に大君は「内向的。思考(理論)が先行する」等と言われ、また中の君は「受動的。体験によって成長する」等と言われている。

(2)アプローチの方法は様々であるが、姉妹という構図に着目したものには、例えば三田村雅子「第三部発端の構造」(『日本文学』日本文学協会 一九七五年一月)↓『源氏物語 感覚の論理』有精堂 一九九五年三月)、茅場康雄「宇治十帖の造型―薫と中の君―」(『日本文学紀要』一九八八年一月)、神田龍身「分身、差異への欲望―『源氏物語』『宇治十帖』―」(『物語文学と分身(ドッペルゲンガー)―『源氏物語』『宇治十帖』をめぐって―)↓『源氏物語と平安文学 第1集』早稲田大学出版部 一九八八年一月)『物語文学、その解体―『源氏物語』『宇治十帖』以降―』有精堂 一九九二年九月)、河添房江『(ゆかり)の身体・異形の身体』(『源氏物語試論集』論集平安文学第四号 勉誠社 一九九七年九月)、三田村雅子「大君物語―姉妹の物語として―」(『源氏物語研究集成 第二巻』風間書房 一九九九年九月)などがある。

(3)『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(4)実は姉妹が歌を交わすのは、この場面だけではない。橘姫巻には、まだ幼少の二人が父宮と三人で唱和をする場面がある。拙

稿『源氏物語』橋姫巻「水鳥の唱和」考―宇治の物語の（始発）として―（愛知淑徳大学国語国文第二二号）一九九九年三月（参照。これは母親を哀傷する場面であり、本稿との共通性が見い出せる。また、「春」「哀傷」という点では、早蕨巻の中の君の詠歌も想起されよう。これらの関連性についても注目されるところであるが、今は別稿に譲りたい。

(5) 例えば『源氏物語の鑑賞と基礎知識 No.16 椎本巻』（監修 鈴木一雄 編集 雨海博洋 至文堂 二〇〇一年四月）の鑑賞欄には、「姫君たちは、ここでもまた、現実逃避・過去への陶醉を歌にしている。……せつかくの山の阿闍梨の志をも無にするような詠みぶりである。……いずれの場合も、受け取った姫君たちは、父宮を失った悲しみを新たにし、父宮が生きていてくれたらと姉妹で歌を交わしている」（一六九頁 岡山美樹）とある。

(6) 原岡文子は「宇治の阿闍梨と八の宮―道心の糸―」（「むらさき」一九七三年六月）『源氏物語 両義の糸―人物・表現をめぐって―』（一九九〇年一月）の中で、本文Bの場面を取り上げ、「……逆に言えば、他ならぬ阿闍梨の贈った芹や蕨をめぐって、侍女達の反応を描き、それに対する姫君達の側のちぐはぐな思いを胸にした抵抗を浮き彫りにすることによって、はじめて匂・薫の新春の挨拶が抵抗なく物語に描かれ得たのだ」と阿闍梨論の立場から述べている。

(7) 引歌の指摘については、笠間索引叢刊『源氏物語引歌索引』（伊井春樹編 笠間書院 一九七七年九月）を参考にした。

(8) 本章の『古今和歌集』の引用本文はすべて、新日本古典文学大系『古今和歌集』（小島憲之・新井栄蔵校注 岩波書店 一九八九年二月）に拠る。なお、和歌に付した傍線は、すべて引用者による。

(9) 大君の隠棲への指向については、すでに高田祐彦の論「山姫としての大君―宇治十帖の表現構造」（「むらさき」二一九八五年七月）に指摘がある。

(10) 「松の雪」は、文字通り細い松葉に積もる雪のことで、積もりにくくまた消えやすいものであることから、非常にはかないもの

の喩として用いられた。諸注には伊勢大輔集収載の贈答歌「(紫式部)奥山の松葉に氷る雪よりも我が身世にふるほどぞ悲しき」(伊勢大輔)消えやすき露の命にくらぶればげにとどこほる松の雪かな」(私家集注釈叢刊『伊勢大輔注釈』(久保木哲夫校注・訳 平成四年六月 貴重本刊行会)が参考歌として掲げられている。同様の発想のものに、古今和歌集「深山には松の雪だに消えなくに宮こは野辺のわかなつみけり」「春上 題知らず 読人知らず」、公任集「松の雪消え帰りつつ君がため千年をへても我ぞつかへん」(新大系『平安私家集』(後藤祥子校注 一九九三年一二月 岩波書店)等がある。

(11)大君の贈歌に反語(自問自答)の意を読み取るものには、例えば『源氏物語評釈 第十卷』(玉上琢弥著 角川書店 一九六七年一月)の鑑賞欄には「姉君は、『松の雪をもなにとかはみる』と妹に問う。妹は、せめて、この『雪とだに消えにし人をおもはましかば』と答えている。問うた姉も又、妹と同じ思いで問うたのであるうか。雪もつもれば、はかなく消える、まことにはかないものである。しかし、消えた上にまたつもるではないか。それなのに、『消えにし人』は、消えたまま帰ってこない。いくら待っても甲斐ないのである」とある。また、新体系『源氏物語』の脚注には、「松」に「待つ」をひびかせ、どんなに待とうとも父官は帰らぬ、の思いをもこめる」とある。

(12)岷江入楚には、「古今にみ山には松の雪たにきえなくにといへるも消えやすき物なればたにもといへり松葉のみよむへからす云々」(源氏物語古注集成第十四卷『岷江入楚 第四卷』中田武司編 桜楓社 一九八三年二月)とある。

(13)後撰和歌集の引用本文は、新日本古典文学大系『後撰和歌集』(片桐洋一校注 岩波書店 一九九〇年四月 岩波書店)に拠る。掛詞などの指摘についても同書に拠る。

(14)『平安朝の年中行事』(山中裕 塙書房 一九七二年六月)など。

(15)注(2)神田論文参照。

### 第三章 宇治中の君の結婚―「宇治の橋姫」変奏譚として―

#### 一 はじめに

大君、中の君、浮舟は同じ八の宮の娘として生まれながら、その生の軌跡は三者三様、全く異なるものである。しかし、それぞれの人生のありよう、結末はともかくとして、それぞれの姫君について語られる固有の物語の、その始発の段階に目を向けた時、三人が皆例外なく〈宇治川の情景〉の中に置かれていることを見逃してはなるまい。

本章は、三度繰り返し返して語られる〈宇治川の情景〉描出の意味を、その発想の根底にある「宇治の橋姫」伝承との関わりから考察するものである。

#### 二 「宇治の橋姫」伝承について

「宇治の橋姫」が始めて文学の舞台にのぼるのは『古今和歌集』所収「題知らず」「読み人知らず」の次の三首である。

i さむしろに衣かたしきこよひもや我を待つらむうぢのはしひめ

〔卷第十四 恋歌四（注1）〕

ii わすらるる身をうぢはしの中たえて人もかよはぬ年ぞへにける

〔卷第十五 恋歌五〕

iii ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば

〔卷第十七 雑歌上〕

i は、別業宇治の地にあつて、空しく男の来訪を待ち続ける女を、都にいる男の立場から詠んだ歌である。「狭筵」には「寒し」が、また「橋」には「愛し」と「(都の)端」の意が掛けられている。ii は、宇治橋の中絶えによそえて女が男に顧みられなくなった絶望を詠んだ歌で、仲が絶えて長い年月が経ってしまったが、未だ男を忘れられずにいるという意。

そもそも「橋姫」とは、「大昔我々の祖先が街道の橋の袂に祀っていた美しい女神(注2)」のことであった。「水辺、特に橋は精霊の宿るところとされており：『宇治の橋姫』はその守り神として最もよく知られるものだった(注3)」のである。このことは、iiiの歌の初句「ちはやぶる」という枕詞(神または広く神に関わるものにかかる)からも窺い知ることができよう。また、「宇治の橋姫」についての逸話は、『奥義抄』『顕注密勘』等に「橋姫の物語」としてその存在が知られているが(注4)、先に触れた通り『古今集』以前の使用例が認められないこともあり、ここではその原型が荒ぶる宇治川の神を鎮め、破損・流失を防ぎ守る女神(巫女)であったとの理解にとどめておく(注5)。

### 三 三人の「宇治の橋姫」

「宇治十帖」の基底には「宇治の橋姫」伝承があり、それが『古今集』に詠まれた範囲を出るものではないことは既に



指摘されているが(注6)、では「宇治の橋姫」になぞらえられる人物は誰かということになると、その解釈は必ずしも一定ではない(注7)。しかしここでは、直接「橋姫」と呼びかけられる大君と中の君、また直接直接呼びかけられるわけではないが、「衣かたしき今宵もや」「浮舟一四七頁」と薫に口ずませ、また匂宮に「かたしく袖を我のみ思ひやる心地しつる」「同頁」と思わせる浮舟をも加えて、三人それぞれの「宇治の橋姫」像を、その物語の筋に添いながら見ていくことにしたい。

### (1) 大君の橋姫物語

晩秋、薫は例の如く突然思い立つて宇治を訪れる。折悪しく八の宮は参籠中であり、代わりに応対する姫君たちに厚誼を訴えるものの、姫君たちはなかなか応じようとはしない。薫はそんな彼女たちの境遇と心中を慮り、歌を詠みかけてその場を立とうとする。

……かのおはします寺の鐘の声かすかに聞こえて、霧いと深くたちわたれり。

峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに、なほこの姫君たちの御心の中ども心苦しう、何ごとを思し残すらん、かくいと奥まりたまへるもことわりぞかしなどおぼゆ。

「あさぼらけ家路も見えずたづねこし槇の尾山は霧こめてけり

心細くもはべるかな」とたち返りやすらひたまへるさまを、都の人の目馴れたるだになほいとことに思ひきこえたるを、まいていかがはめづらしう見ざらん。御返り聞こえ伝へにくげに思ひたれば、例のいとつつましげにて、

雲のある峰のかけ路を秋霧のいとど隔つるころにもあるかな

すこしうち嘆いたまへる気色浅からずあはれなり。

〔橋姫一四八頁(注8)〕

山寺の鐘の声は霧に隔てられ、憂いに沈む人の宮の嘆息はかすかに運ばれてくるのみである。法の友として心を通わせ合うことを期待し来訪した薫の人の宮への思いは「峰の八重雲」によって遠く隔てられてしまっており、ゆえに薫はますます孤愁を深めるより他はない。「槇の尾山」の霧立ち込める風景は、そのまま薫の心の姿に重なるものとして読まなければなるまい(注9)。また、大君の返歌中の「峰のかけ路」は父八の宮が籠もっている場所であり、それは雲居の遙かであるのみならず、秋霧によっていつそう隔てられてしまっている。父宮を思いやりながら、しかし顧みられない大君の孤絶感はお深い(注10)。八の宮の不在、そして秋霧は、それぞれの孤絶感をいや増すものであり、ここに連続して描かれる二度の贈答歌は、その孤絶感の共有によって奇しくも二人の心が通じ合ったことを語っているのであった。この贈答に飽き足りない思いを抱いた薫は、さらに従者の語る網代漁の様子に宇治川の情景を思い浮かべ、「橋姫」の歌を贈る。

「網代は人騒がしげなり。されど水魚もよらぬにやあらん、すさまじげなるけしきなり」と、御供の人々見知りて言ふ。あやしき舟どもに芝刈り積み、おのおの何となき世の営みどもに行きかふさまどもの、はかなき水の上に浮かびたる、誰も思へば同じごととなる世の常なさなり。我は浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かと思ひつづけらる。

硯召して、あなたに聞こえたまふ。

「橋姫の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる

ながめたまふらむかし」とて、宿直人に持たせたまへり。いと寒げに、いららぎたる顔して持てまゐる。御返り、紙の香などおぼろけならむは恥づかしげなるを、ときをこそかかるをりはとて、

「さしかへる宇治の川長朝夕のしづくや袖をくたしはつらん

身さへ浮きて」と、いとをかしげに書きたまへり。まほにめやすくものしたまひけりと心とまりぬれど、「御車率て参りぬ」と、人々騒がしきこゆれば、宿直人ばかりを召し寄せて、「帰りわたらせたまはむほどに、かならず参るべし」などのたまふ。

「橋姫一四九〜一五〇頁」

この贈歌中の初句によつて、大君は「宇治の橋姫」伝承の主人公としての性格を付与されることになる——男の来訪を待ち続ける女。実際は父の帰宅を待つ娘であるのだが、薫が伝承の世界を仮構することによつて、その世界が同時に招き寄せずにはおかない和歌的情緒の世界に転移する自由が大君に開かれることになったのである。「棹のしづく」に「袖濡る」という和歌的类型に応ずる形で、その誇張表現としての「袖朽たす」が導かれるのであり、その結果、八の宮の不在に対する悲嘆という先の贈答の主題を越えて、「逢えぬ嘆き」という普遍性を、換言するなら「恋の苦悩」という次元まで、後者の贈答は主題を拡大することになったのである。

この場面に描かれた二度の贈答については、内容的には必ずしも両者の接近を語るものではないが（注1）、形式的には男女の典型的な呼吸によつており（注2）、とりあえず両者の困難な関係は一步踏み出したのである（注3）とまでは既に指摘されているが、むしろ以上のように、より積極的に評価されるべきであろう。したがって、この場面は結果とし

てその基底に濃く恋愛の情趣を漂わせることで、今後、他ならぬ薫と大君の「宇治の橋姫」物語が展開されてゆくであろうことを予感させることになる。つまりこの場面こそが、大君物語の實質的始発なのであった。

ところで、「橋姫」である大君の待つ相手は、俗聖と呼ばれる父親であり、薫は自らを「高瀬さす」船頭になぞらえたのであった。俗聖の娘、あるいは聖を指向する処女せとめである大君は、『古今集』以前の最も始原的な「橋姫」Ⅱ「橋を守る美しい女神（巫女）」として薫に捉えられている（注14）。しかしその後、八の宮は死に、薫はその遺言通り姫君たちの後見人となる。つまり第二の俗聖となることを求められるわけだが、結果的には大君に結婚を執拗に迫り、その心を追いつめ、死に至らしめてしまう。薫は八の宮を継いで第二の俗聖となることはできなかった。大君によって待たれる対象とはなり得なかつたのである。「橋姫」の贈答は、薫が大君を聖Ⅱ八の宮のもとへ導く（死に追いやる）船頭となつてしまふという、その後の皮肉な展開をも予示していたのである。

## （2）中の君の橋姫物語

薫は、求愛を拒み続ける大君に、中の君さえ結婚させてしまえばと一計を案じ、匂宮をその寢所へ引き入れる。中の君は突然の結婚という事態に戸惑い動揺するものの、匂宮の真摯な態度に次第に心うち解けてゆく。

明けゆくほどの空に、妻戸おし開けたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所がらのあはれ多くそひて、例の、柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心にはをかしく思しなさる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御容貌のまほにうつくしげにて、限りなくいつ

きすゑたらむ姫宮もかばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの、わが方さまのいとつくしきぞかし、こまやかなるにほひなど、うちとけて見まほしう、なかなかなる心地す。……今朝ぞ、ものあやめも見ゆるほどにて、人々のぞきて見たてまつる。「中納言殿は、なつかしく恥づかしげなるさまぞそひたまへりける。思ひなしのいま一際にや、この御さまは、いとことに」などめできゆ。

〔総角二八二〜二八五頁〕

少しずつ白んでゆく空に、匂宮と中の君は、「もろともに誘ひ出でて」、宇治川の情景を眺めやる。元来宇治は、夕霧の別邸があるように「椎本一六九頁」、また人の宮邸がそうであったように「橋姫一二五〜一二六頁」、貴族の別荘地であった。ここに描かれた「柴積む舟」の情景は、

世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白波

〔拾遺集 卷第二〇 哀傷〕

を踏まえることによつて、旅の宿り、景勝地としての宇治の姿をあらわにしている。このような風雅の世界がそのまま現出したかのような宇治川の情景は、「霧わたれる」風情と相まつて、非現実的な「をかし」の世界を現出しており、今上帝の寵児として大切にかしずかれてきた「色なる御心」の匂宮は、「この見馴れぬ宇治の光景に触発されるところから、いよいよ中の君の美しい風情の感動をいだきなおすことになる」(注16)のであるが、しかしここで中の君が比類なき理想の女性・女一の宮を超越する位置におかれるのは、「山の端の光」もさることながら、本来の「宇治の橋姫」の持つ神聖さ、神々しさが重ね合わされているためでもある(注17)。

ところで、「山の端の光」を受けて美しく輝く男女の姿は、「明うなりゆけば、(薰)さすがに直面なる心地して……」「橋姫一四九頁」、「明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。……(大君)今だに。いと見苦しきを」「総角二三八頁」、「(薰)かばかりの御けはひを慰めて明かしはべらむ。……しるべせしわれやかへりてまどふべき心もゆかぬ明けぐれの道」「総角二六七頁」等と、曙光を拒み続けた大君と薰の物語とはあまりに対照的である。光を浴びること、共に朝を迎えることを再三にわたつて拒否し続けてきた大君の物語は、もはや「宇治の橋姫」物語としては何の進展も望めないといつてよい。したがつてこの場面は、「橋姫」の交代、新しい「宇治の橋姫」物語を予感させるのであり、換言すれば中の君物語はここで実質的に始発するのだと言えよう。

では、中の君の「宇治の橋姫」物語は今後どのような展開が予想されるのであろうか。

……人々いたく声づくりもよほしきこゆれば、京におはしまさむほど、はしたなからぬほどにと、いと心あわただしげにて、心より外ならむ夜離れをかへすがへすのたまふ。

中絶えむものならなくに橋姫のかたしく袖や夜半にぬらさん

出でがてに、たち返りつつやすらひたまふ。

絶えせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき

言には出でねど、もの嘆かしき御けはひ限りなく思されけり。

〔総角二八三〜二八四頁〕

句宮の贈歌中の第三句で、中の君は「橋姫」に見立てられる。この歌は前掲『古今集』i「はしひめ」「衣かたしき」「こ

よひ」を、同 ii の「中たえ」を重層的に引くことで一首を構成しており、またこれに応える中の君の歌も、i「待つ」ii、「たえ」iii「うぢはし」iv「中」を重ねて引用している。

三日夜の後朝、美しい男女が曙の光の中、切ない思いを抱えつつ互いを見交わす——この場面は、その背景として「宇治の橋姫」の幻想的な恋物語を想起させながら、同時に人生の門出の時であるにもかかわらず、『古今集』恋歌四（恋の終末を予感させる歌）、恋歌五（別離の歌）を踏まえてしまっているという点で、その直後からの「中絶え」という二人の暗い未来を暗示するものであった（注18）。

そもそもこの結婚の実質はいかなるものであったのか。無論この結婚が、薫が大君を手中に収めるための計略であり——結果的にはそれが裏目に出、大君は拒否感はいや増さっていくのであるが——少なくとも大君の体面を損なうことになる結婚の不成立だけは避けねばならぬことであった。しかしだからと言って、この結婚が中の君の妻としての位置・立場を確約するものであったとは言いがたい。事実、結婚三日目の夜、宇治に赴こうと機会を狙う匂宮に母明石の宮は次のように諫言する。

なほかく独りおはしまして、世の中にすいたまへる御名のやうやう聞こゆる、なほいとあしきことなり。何ごとももの好ましく立てたる心なつかひたまひそ。上もうしろめたげに思しのたまふ。

〔総角二七六頁〕

また結婚後も、宇治を訪問できず煩悶する匂宮に次のように妥協案を持ち出す。

「御心つきて思す人あらば、ここに参らせて、例ざまにのどやかにもてなしたまへ。……と、大宮は明け暮れ聞こえたまふ。

〔総角三〇三頁〕

この明石の中宮の発言は、そのまま都における匂宮の立場を表している。つまり中宮から見れば、この結婚は所詮色好みという匂宮の艶聞(悪評)を広めるものでしかなく、それは言い換えれば、都社会において認められない妻は妻ではない、匂宮が依然「なほかく独りおはしまして」である状態に変わりはないということなのである。匂宮自身も結婚後、中の君の処遇について、

なべてに思す人の際は、宮仕の筋にて、なかなか心やすげなり、さやうの並々には思されず…。〔総角二九〇頁〕

と、思案を重ねているが、これも女房(召人格)として迎え取られても何らおかしくはないという中の君の不安定な立場を示している。つまり、この結婚は、当面宇治という特殊な場を除けば、その有効性を主張し得ないのが現実なのであった。匂宮によって辛うじて守られた結婚という形態は、実はそのまま匂宮の「宇治の橋姫」へのこだわりなのであり、それは中の君が単なる妾ではないという位置付け、その後都に引き取られ、世に「幸ひ人」と称されるもう一つの未来をも暗示するものだったのである。

ところで、匂宮の我が「橋姫」との呼びかけに、中の君は待つ女として返歌をした。つまり「宇治の橋姫」となることを承引したのである。この点で中の君は、古今集の「宇治の橋姫」に最も近い造型がなされているということができらるであ



ろう。しかしその後、大君の死をきっかけに匂宮の二条院に移ることになる。これは「宇治の橋姫」が、その存在の根拠となる宇治を離れることを意味している。

住み馴れた思い出の土地を棄て、遠い過去の記憶にしかない都で新しい生活を送ることは、中の君にとって大きな不安であった。しかしまた、誰一人として身寄りのない今、頼れるのは夫・匂宮の愛情だけなのである。都のうちで愛する人と共に生きる——「宇治の橋姫」——待つ女にとって、都に引き取られるということは、望むべき理想の姿であったに違いない。しかし、都に移った中の君を實際に待ち受けていたのは、夫・匂宮と夕霧右大臣女・六の君との縁組みであった。いくら政略結婚とはいえ、上京後三ヶ月余りで持ち上がってきたこの縁談話に、中の君の悲嘆は深く、次第に望郷の念を募らせていく。

よそにて隔てたる月日は、おぼつかなさもことわりに、さりともしなど慰めたまふを……。

〔総角二九五頁〕

……山路分け出でねんほど、現とおぼえず悔しく悲しければ、なほ、いかで忍びて渡りなむ、むげに背くさまにはあらずとも、しばし心をも慰めばや、憎げにもてなしなどせばこそ、うたてもあらめ、など心ひとつに思ひあまりて……。

〔宿木四二二頁〕

女君は、……山里にあからさまに渡したまへと思しく、（薫に）いとねむごろに思ひてのたまふ。〔宿木四二五頁〕

一方の匂宮は、予想に反した六の君の美しい容貌の魅せられ、中の君のもとへは夜離れの日々が続く。中の君は、「もし宇治に留まっていたら、それはそれで我慢できようものを。今は長の別れではなく、ほんのひととき宇治に帰って心を

休ませたい」とまで思い詰めるようになるのであるが、しかしここで大切なのは、中の君は決して匂宮との離別を願っているわけではないということであろう。中の君は、宇治にあって匂宮の訪れを待ちたいと考えている。つまり、宇治で男を寂しく待つ女Ⅱ「宇治の橋姫」に戻ることを希求しているのである。

『古今集』の「宇治の橋姫」は、訪れない、あるいは訪れの間遠な男を待つ女であり、それは忌避すべき境遇であった。しかし中の君は、宇治を離れ、都での厳しい現実と向き合うことにより、原郷でたる宇治で待つ女に戻りたいと願うのである。中の君にとって「宇治の橋姫」は、回帰すべき境遇なのである。中の君の「宇治の橋姫」物語は、『古今集』の「宇治の橋姫」像を正確になぞりながら、しかしその究極の理想（上京）が、実は儂い夢物語でしかなかったことを示すという皮肉な逆転現象を語っているのである。

最終的に中の君の宇治帰郷は果たされることはない。宇治行きを頼むことのできる唯一の人物——薫の思わぬ添い臥しは、もはや誰も頼むことはできない、都のうちで生きるしかないことを中の君に自覚させるのである。中の君の「宇治の橋姫」物語は、回帰を切望しつつも断念することによって終息せざるを得ないのであった。

### (3) 浮舟の橋姫物語

恋情を訴え続ける薫に中の君は異母妹浮舟の存在を語る。浮舟に亡き大君の面影を見た薫は、三条の小家から強引に連れ出し、宇治に隠し住まわせるが、その後はなかなか足が向かず、そうしているうちに匂宮が浮舟の居所を突き止め、強引に契ってしまう。そんな折りも折り、薫は久々に宇治を訪問する。大君を偲ぶ薫、二人の男を通わせてしまっている自分を顧み煩悶する浮舟、共に宇治川の情景を眺めながら、しかし両者の心は遠く隔たってしまった。

山の方は霞隔てて、寒き州崎に立てる鵲の姿も、所がらはいとをかしう身ゆるに、宇治橋のはるばると見たさるるに、柴積み舟の所どころに行きちがひたるなど、ほかにて目馴れぬことどものみとり集めたる所なれば、見たまふたびごとに、なほ、その昔のことのただ今の心地して、いとがからぬ人を見がはしたらむだに、めづらしき中のはれ多かるべきほどなり。まいて、恋しき人によそへられたるも、こよなからず、やうやうものの心知り、都馴れゆくありさまのをかしきも、こよなく見まさりしたる心地したまふに……。

〔浮舟一四五頁〕

かつて、宇治川の情景は、大君との贈答の場面で心象風景を表わすものとして印象的に語られていた。しかしここに描かれた春霞は、周囲の山々を隔てるばかりで、かつての秋霧のように薫の心の奥底にまでは立ち籠めていかない。「宇治橋のはるばると見たさるる」様子は、むしろ中の君物語にみえた「宇治橋のいともの古りて見えわたさるるなど、霧晴れゆけば……」「総角二八二頁」を連想させるものであり、眼前の景色を「いとをかしう」感じる薫の姿もまた、「色なる御心にはをかしく思しなさる」「総角同頁」匂宮の姿と重なってくるものである。この場面における薫は実直人というよりもむしろ好色人あるいは懸想人としての性格がより強調されているといつてよからう。この情景を前に薫は、「ここにあれば、それがたとえ大君ゆかりの女性でなくともきつと心惹かれるに違いない、ましてそれがよく似た浮舟であれば……」と考えるのであるが、それは慕わしい大君との記憶そのものである宇治川の情景それ自体が、女を輝かせ、その魅力を引き出す力を持っているのだと感じているためである。事実、浮舟はそれまで、

いとよく思ひ出でらるれど、おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。いといたう児めいたるもの

から、用意の浅からずものしたまひしはやと、なほ、行く方なき悲しさは、むなしき空にも満ちぬべかめり。

〔東屋九六頁〕

故宮の御事ものたまひ出でて、昔物語をかしようこまやかに言ひ戯れたまへど、ただいとつつましげにて、ひたみちに恥ぢたるを、さうざうしう思す。

〔東屋九九頁〕

と、美点以上にその欠点が語られていた。浮舟は始めから大君の形代として求められ、ゆえにことあるごとに薫を失望させてしまっていたのだが、しかし宇治川の情景が、大君との慕わしい過去の記憶そのものとなった今——大君への深い愛情が眼前の宇治川の情景の中へと昇華された今——、浮舟は形代であることを超えて、一人の女としてその魅力、価値を認められていくことになるのである。しかしそんな薫とは対照的に、浮舟の憂悶はますます深くくなってゆく。

……女はかき集めたる心の中にもよほさるる涙ともすれば出で立つを、慰めかねたまひつつ、

「宇治橋の長き契りは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな

いま見たまひてん」とのたまふ。

絶え間のみ世にはあやふき宇治橋を朽ちせぬものとなほたのめとや

さきさきよりもいと見棄てがたく、しばしも立ちとまらまほしく思さるれど、人のもの言ひのやすからぬに、今さらなり、心やすきさまにてこそなど思しなして、暁に帰りたまひぬ。いとようも大人びたりつるかなと、心苦しく思し出づることありしにまさりけり。

〔浮舟一四五〜一四六頁〕

薫の贈った歌は、眼前の宇治橋の情景によそえた、自らの変わらぬ愛を表明するものであったが、しかし実際は途絶えばかり多いその不誠実さを、誠実な夫としての未来を約束することと覆い隠そうとするものであった。また当の宇治橋も「はるばると」「浮舟一四五頁」、「いともの古りて見わたさるる」「総角二八二頁」有り様で、これをもって「朽ちせじ」と詠みかけてくる薫に浮舟は誠意を感じる（注19）。浮舟は眼前の今にも朽ちそうな宇治橋と前掲『古今集』②の男に顧みられない絶望感を詠んだ歌を踏まえることによつて、その絶え間の多さを語り、文字通り二人の「あやふき」仲への不安を訴えるのであるが、しかし薫はこの危機感をまったく理解できず、むしろ浮舟が自らを待つ女として受容しているものだけ捉えるのであった。

薫は都に戻つてからも浮舟のことを思い続ける。

……大将、人にもものたまはむとて、すこし端近く出でたまへるに、雪のやうやう積もるが星の光におぼおほしきを、「闇はあやなし」とおぼゆる匂ひありさまにて、「衣かたしきこよひもや」とうち誦じたまへるも、はかなきことを口ずさびにのたまへるもあやしくあはれなる気色そへる人さまにて、いともの深げなり。言ひしもこそあれ、宮は寝たるやうにて御心騒ぐ。おろかには思はぬなめりかし、かたしく袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるもあはれなり、わびしくもあるかな、かばかりなる本つ人をおきて、わが方にまさる思ひはいかでつくべきぞ、とねたう思さる。

〔浮舟一四七〜一四八頁〕

二月十日頃、宮中で行われた作文会、管弦の宴の後、薫は「衣かたしき今宵もや」と吟誦する。そのなまめかしい姿態、芳香はまさしく恋する男のそれであり、その様子に薫の浮舟への並々ならぬ執着を感じ取り焦慮した匂宮は、橋の小島の隠れ家に浮舟を連れ出し、耽溺の二日間を過ごすことになる。ここでは薫によつて浮舟が「宇治の橋姫」ととらえられることにより、それが匂宮の焦燥感を駆り立て、物語を展開させていく力となつていくことが確認できよう。と同時に、この場面は、今後一人の女と二人の男によつて新たな「宇治の橋姫」物語が展開されるであろうことを予感させる。そう考えると、薫の心を揺り動かし、浮舟を「宇治の橋姫」と呼ばしめる契機となつた宇治川の情景の場面こそが、浮舟物語の実質的始発であつたといふことができよう。

ところで、浮舟は最初、大君、中の君と同様に待つ女として登場したのであつた。しかしそれはただ一人の男を待つ女ではない。薫を、そして匂宮を待つ女である。やがて両者から都に引き取る旨の文が度々寄せられるようになるが、しかしそのどちらも選ぶことができない浮舟は、次第に追いつめられ、結果、入水を覚悟することになる。都に行くこともできず、かといつて宇治に留まることもできない浮舟は、待つ女であることを放棄するのである。『古今集』の一人の男を待つ女は、浮舟物語においては二人の男を待つ女となり、さらには待つことを放棄する女へと変容していったのであつた。

『源氏物語』はその後の「宇治の橋姫」の物語を語ろうとはしない。浮舟の出家、小野での暮らしはもはや別の物語なのであり、『源氏物語』における「宇治の橋姫」物語は、ここに実質的に終焉を迎えるのであつた。

## 四 おわりに

これまで大君、中の君、浮舟における「宇治の橋姫」物語を、それぞれ宇治川の情景とのかかわりの中で見てきたわけだが、それらの基底には『古今集』の「宇治の橋姫」の世界が潜んでおり、その「宇治の橋姫」像が模倣されたり、あるいはずらされたりすること、『源氏物語』独自の「宇治の橋姫」物語が展開されてきたことが確認できたのではないだろうか。

大君は、古伝承にみえる「宇治橋の女神」、『古今集』における「待つ女」のイメージを踏襲しているが、結果的には「宇治の橋姫」となることを拒否し、物語から退場していった。中の君は、男を待つ女であり、『古今集』のイメージをそのまま踏襲しているが、宇治を離れることでヒロインの座から滑り落ちていった。浮舟は、一人ではなく二人の男を待つ女であった。しかしそのどちらを選ぶこともできず入水を覚悟する。つまり「待つことを放棄する女」なのであった。

繰り返すが、物語はいったん男女を宇治川の情景の中におくことで、その度ごとにあらためてその人物たちを「宇治の橋姫」物語の主人公として据え直している。それはこの物語が男女の関係性を少しずつずらしながら、つまりは当初のモチーフを変奏させながら、遁走曲的に同じ主題を繰り返し語ろうとしているためなのである。

さて、こうして見てくると、『源氏物語』における「宇治の橋姫」の物語は、究極的には「宇治の橋姫」を存在させていないことに気づかされるのではないか。つまり、古来人々に親しまれてきた「宇治の橋姫」の物語は、『源氏物語』においては実現しないのである。そして恐らくそれは、『源氏物語』の大きなテーマである男女の恋物語の、その一番最後に位

置付けられている」ととも決して無縁ではあるまい。つまり、「宇治」の物語は、文字通り恋物語に対する「憂し」の物語でもあったのである。

「宇治の橋姫」の物語は、最後の女主人公・浮舟の入水という形で終息する。そうして恋愛を語ることが放棄した物語は、ゆつくりと出家への過程について語り始めるのである。

## 注

(1) 引用本文は、『古今和歌集全評釈(下)』(竹岡政夫著 右文書院 一九七六年一月)に拠る。掛詞等の指摘についても、同書に拠る。

(2) 柳田国男『橋姫』(『定本柳田国男全集第五卷』筑摩書房 一九六八年一〇月 初出は一九一九年一月)。柳田の説を参考にしてと思われるものは、寺本直彦「古典注釈と説話文学」(『日本の説話 第四卷中世Ⅱ』東京美術 一九七四年六月)、吉海直人「橋姫物語の史的考察―源氏物語背景論―」(『國學院大学大学院紀要文学研究科紀要13』一九八二年三月)↓「橋姫物語の史的考察」(『源氏物語研究(而立篇)』影月堂文庫 一九八三年一二月)、石原昭平「宇治の伝承」(『源氏物語の世界(第8集)』一九八三年六月)、小嶋正亮「待つ女から嫉妬する女へ―橋姫―」(『宇治文庫6 宇治をめぐる人びと』宇治歴史資料館 一九九五年三月)、糸賀きみ江「宇治の橋姫」受容考(『青山語文26』一九九六年三月)、原田敦子「橋を守る女神―宇治橋姫伝承考―」(『古代伝承と王朝文学』和泉書院 一九九八年七月)等。

(3) 北川忠彦「王朝の文学と宇治」(『宇治市史―古代の歴史と景観』宇治市役所 一九七三年一月)



(4) 久曾神昇「古風土記逸文「宇治の橋姫」其他に就て」(『國學院雜誌』42-112)一九三四年(二月)、桑原博史「宇治の橋姫伝説と橋姫物語—中世小説成立の一過程—」(『國語と國文學』東京大学国語国文学会 一九五九年六月)、保里十三子「橋姫物語考—橋姫物語と関連して—」(『東洋大学短期大学論集國語篇』5)一九六九年三月)、三角洋一「『橋姫物語』の位相」(『日本文学』33-4)日本文学協会 一九八四年四月)、伊藤千世「『橋姫物語』の古体性」(『愛知淑徳大学国語国文』16)一九九七年(一月)他、注(2)吉海論文等。

(5) 『橋姫』「宇治川」「宇治橋」に関する論考は多く、管見に入った限りでも計四十六本に上る(柳田論文以外は昭和十年以降。『国文学年鑑』、『源氏物語講座』10 源氏物語研究文献目録)、吉海直人編『源氏物語ハンドブック』等を参照。ただし、『源氏物語』関係論文は、表題に「橋姫」「橋姫物語」等を冠していても、内容が「宇治の橋姫」と直接関わっていないものについては除いて算出してある。内容としては、概ね①歴史的観点(風土・歴史)からのもの、②「宇治の橋姫」伝承、並びに散逸物語『橋姫物語』についてのもの、③歌枕・歌集等、和歌史における位置づけについてのもの、④『源氏物語』における「宇治の橋姫」についてのもの、⑤その他(史料整理等)に大別することができる。

(6) 高橋亨「宇治物語時空論」(『國語と國文學』東京大学国語国文学会 一九六九年(二月)↓)『源氏物語の対位法』東京大学出版会 一九八二年五月)、広川勝美「源氏物語・宇治時空試論—その基層と表層—」(『日本文学』一九七五年(一月)、今井源衛「『宇治橋』の贈答歌について—宇治十帖の主題—」(『春日春男教授退官記念語文論叢』一九七八年(一月)↓)『紫林照徑—源氏物語の新研究』角川書店 一九七九年(一月)等。

(7) 例えば高橋は前掲論文の中で、大君と中の君を「宇治の橋姫」として挙げている。また広川は浮舟を橋姫物語の継承者として位置づけている。

(8) 『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には

巻名・頁数を記した。

(9) 新編全集『源氏物語⑤』一四八頁頭注二、三を参照。

(10) 上坂信男は「小野の霧・宇治の霧」(『源氏物語―その心象風景序説―』笠間書院 一九七四年五月)において、「大君の眼に映った「秋霧」も父を思い遣り、わが将来を思う吐息を思わせる。心の霧と重なり合つて薫の捉えた霧と同質のものである」と述べている。

(11) 小町谷照彦「大君物語の始発―和歌的な視点から―」(『日本文学』24-11)↓「大君物語の始発―「橋姫」「椎本」の展開」(『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年八月)。

(12) 鈴木日出男「古典への招待 人物造型について」(新編全集『源氏物語⑤』小学館 一九九七年七月)。

(13) 注(11)に同じ。

(14) 注(2)糸賀論文等に同様の指摘がある。

(15) 題知らず 沙弥満誓(巻第二十・哀傷歌)なお、引用本文は、新日本古典文学大系『拾遺和歌集』小町谷照彦校注 岩波書店 一九九〇年一月)に拠る。古来、諸注はこれを引いている。

(16) 鈴木日出男「源氏物語の場面」(『源氏物語研究集成 第三巻 源氏物語の表現と文体(上)』風間書房 一九九八年一月)。

(17) 「宇治の橋姫」の高貴性については注(1)の他、注(2)石原論文等にも指摘がある。

(18) 新編全集『源氏物語⑤』一八五頁 鑑賞・批評欄。

(19) 伊藤博は「宇治橋の長き契り」(『源氏物語の基底と創造』武蔵野書院 一九九四年一〇月)の中で同箇所を取り上げ、「この詠み口自体に薫の浮舟にのぞむ態度のなおざりさが露呈している、と見るのはうがちすぎであろうか」と述べている。

## 第四章 常不輕という方法―総角卷「千鳥」の贈答歌考―

### 一 はじめに

「宇治十帖」総角卷は、大君の薫との結婚拒否、中の君の匂宮との結婚、そして大君の死が語られる、物語の大きな転換点となる卷である。宇治八の宮の一周忌法要の準備に始まるこの卷は、そのわずか三ヶ月後の大君の死までを一気に語りあげてゆくのである。この大君の死という一点をとつても、総角卷が大君論、薫論を展開する上でいかに重要な卷かということは知れるのだが、しかし中の君にとつてもこの卷は注目すべき点が多いのではないか。人生の転機となつた匂宮との結婚、そして何より大君の死は、中の君上京の大きな契機となつたからである。

本章で取り上げるのは、総角卷の後半、大君が死の床についている、その枕辺でなされた薫と中の君の贈答歌の場面である。ここには、その直前に八の宮が成仏できずに中有を彷徨つているという阿闍梨の夢語りがあり、ついで供養に常不輕を行わせている旨が語られる。従来この場面については、「なぜ阿闍梨は常不輕を選んだのか」という点については論じられてきたのだが(注1)、続く和歌についてはほとんど看過されてきたのであつた(注2)。本稿はそうした中で、常不輕はあくまでこの贈答歌を導くための(方法)としてあつたのだという立場からの考察を試みたい。結論を先に言ってしまうならば、常不輕は死してなお娘たちへの執着を捨てきれなかつた八の宮と、八の宮と共にしか生きられなかつた

大君を葬り去る(物語から退場させる)ためのものとしてあり、それと同時に語られる贈答歌は、もう一つの「中の君物語」、即ち薫と中の君の物語の端緒となっているということを指摘したい。

## 二 薫の贈歌

まず最初に考察の対象とする本文を掲げておこう。

この常不軽、そのわたりの里々、京まで歩きけるを、a 曉の嵐に b わびびて、阿闍梨のさぶらふあたりを尋ねて、中門のもとにゐて、c いと尊くつく。回向の末つ方の心ばへ d いとあはれなり。客人もこなたにすすみたる御心にて、a あはれ忍ばれたまはず。中の宮、切におぼつかなくて、奥の方なる几帳の背後に寄りたまへるけはひを聞きたまひて、あざやかにゐなほりたまひて、不軽の声はいかが聞かせたまひつらむ。重々しき道には行はぬことなれど、b 尊くこそはべりけれ」とて、

(薫) 霜さゆる江の千鳥 c うちわびびてなく音かなしき朝ぼらけかな

言葉のやうに聞こえたまふ。つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、答にぐくて、弁してぞ聞か  
えたまふ。

(中の君) d あかつきの霜うちはらひなく千鳥もの思ふ人の心をや知る

似つかはしからぬ御かはりなれど、ゆるなからず聞こえなす。かやうのはかなし<sup>こと</sup>もつつましげなるものから、なつかしうかひあるさまにとりなしたまふものを、今はとて別れなば、いかなる心地せむと思ひまどひたまふ。

〔総角三二一〇〜三二二頁(注③)〕

二重傍線部が語り手の言、傍線部が薫、中の君の思惟である。この場面ですまず注目されるのは、薫の思惟とそれに続く和歌が、地の文と抱き合わせて語られていることである。二重傍線部b「わびて」は傍線部c「うちわびて」に、二重傍線部c「いと尊くつく」は傍線部b「尊くこそはべりけれ」に、二重傍線部d「いとあはれなり」は傍線部a「あはれ忍ばれたまはず」にそれぞれ対応している。いずれも語り手の言に呼応するように薫の感慨が語られているという点で、薫はこの場面の状況を語り手と同様に理解・把握し、それと心情を<sup>ぶ</sup>にしていると言ふことができるであろう。薫は中の君に、「霜が凍りつく寒さの中で、汀の千鳥がその寒さに堪えかねて鳴いている、その声がかなく聞こえる夜明け方ですな」と、同調を求める歌を詠みかける。薫の歌は、例えば『源氏物語提要(注4)』には「修行の経を千鳥にとりなしてのうたなり。法めかずして殊勝の歌也」などと評価されているが、「法めかず」「殊勝」とあるのは、そこに教義が踏まえられているという前提に拠るのである。確かに薫の歌は、経を唱える僧の声に触発されての詠出であり、いわゆる釈教歌とはいえるのである(注5)、しかしここには本当に「殊勝」なほどに教義が込められているのだろうか。

常不軽行は、衆生に「我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏」という二十四字の偈を唱え礼拝して廻る厳しい忍辱行である。この行は、薫が「重々しき道には行はぬことなれど」と言うように、宮中では行われず、民間信仰としてあつたものらしい(注6)。その由来は、法華經二十八品中の第二十「常不軽菩薩品」にあり、概略は

以下の通りである。

昔、威音王如来という仏がいて、説法し涅槃に入った。後にその教えが形骸化しそうな時に、常不軽菩薩があらわれた。菩薩は、会う人ごとに、「あなたはやがて仏になるひとだから、わたしは尊敬します」と礼拝した。人々はかえって腹をたて、石をぶつけ、棒でなぐるなど、この菩薩を迫害した。やがてこの菩薩が命つきようとするとき、威音王如来の『法華經』にふれて寿命をのびし、かつて彼を迫害したものに『法華經』を説いて悟りを得させた。常不軽菩薩とは、ほかならぬ釈迦そのひとであり、このように『法華經』を受けたものが大切なのである(注7)。

衆生を礼拝する理由については、世親の『法華論(注8)』に「下不軽菩薩品中示現応知。礼拝讚歎作如是言。我不軽汝。汝等皆当得作仏者。示現衆生皆有仏性故」とある。この、「人は皆、仏性あるが故に敬う。たとえ人々が瓦石を投げ、罵ったとしても、それさえも仏縁として人々を成仏に導く」という常不軽菩薩の行状は、例えば次のような詠歌によっても知ることができる。

打罵るもさても種をし植ゑつれば終に御法のむなしからぬを

藤原公任(注9)

みる人をつねにかろめぬ心こそつひにほとけの身には成りぬれ

赤染衛門(注10)

不軽大士の構へには逃るる人こそ無かりけれ 誹る縁をも縁として 終には仏に成したまふ

梁塵秘抄(注11)

不軽大士ぞあはれなる 我深敬汝等と唱へつつ うち罵り悪しき人もみな 救ひて羅漢と成しければ

(同)

しかし薫の詠んだそれは、そうした忍辱行に堪え、不撓不屈の精神でもって衆生を成仏へと導く者の姿ではなく、「暁の嵐にわびて」宇治まで戻ってきてしまった僧たちの姿ではなかったか。薫は、「嵐」という逆境に「わびる」人としての僧を詠んでいるのである。僧に寄り添う薫の歌は、教義を尊び、そこに心酔している自身の心情を詠んだ、多分に叙情歌的要素が強いものであったと考えるべきであろう。

そして、そうした心情を共有したい相手は、二つ目の波線部「かやうのはかなし」ことも（大君であれば）……なつかしうかひあるさまにとりなしたまふものを」にも表出されているように、勿論大君であつた。薫が大君を「心を分かち合うことのできる友」として常に求めてきたことは、本文中に繰り返して語られている。

i「……世の常のすきずきしき筋には思しめし放つべくや。……つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も、聞こえさせどころに頼みきこえさせ、また、かく世離れてながめさせたまふらん御心の粉らはしには、さしもおどろかさせたまふばかり聞こえ馴れはべらば、いかに思ふさまにはべらむ」など多くのたまへば……。〔橋姫一四二頁〕

ii「……世の常になよびかなる筋にもあらずや。ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむなん……。』な」と言ひぬたまへり。

〔総角二三〇頁〕

iii「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば……。〔総角二三八頁〕

iは、八の宮不在中に偶然邸を訪れた薫が、姫君たちに交誼を求め語りかける場面。iiは、全くうち解けようとしてない大君に痺れを切らした薫が、その理由を弁に問いただす場面。iiiは、大君のもとに押し入った薫が、実事に至れず夜を過ごしたその夜明け方、大君に語りかける場面である。iiとiiiはその背後に恋情を忍ばせてはいるが、いずれも大君を恋愛の相手としてだけではなく、無常の世を慰め合う友としても求めていたことが理解できるであろう。さらに今回もまた同様の心情が反映されているであろうことは、薫が常不軽の声として選び取った「千鳥」からも見てとることができる。千鳥の詠出は、『源氏物語』中には、この場面の他に一例しか見られない。源氏が須磨に退去した際の次の独詠歌である。

例のまどろまれぬ暁の空に千鳥いとあはれに鳴く。

友千鳥もろ声に泣くあかつきはひとり寝さめの床もたのもし

〔須磨二〇九頁〕

千鳥は、歌ことばとしては秋・冬に分類される。またその哀愁を帯びた美しい鳴き声は人々に愛され、古来多くの歌に詠まれてきたのであった(注12)。都を遠く離れて異郷の地を流離う源氏は、眠れぬ夜を明かしながら、慕わしい友の声としてこの「千鳥」の鳴き声を聞いている。一方の薫もまた、宇治という異郷の地において、夜明け方に響く常不軽の声に千鳥を重ねて歌を詠出している。異郷の地で孤閨を託ち嘆く源氏の姿は、同じく異郷の地で大君に受け入れられず嘆息する薫の姿と重ね合わせる事ができるであろう。「千鳥」には、無常の世を慰め合う友として、大君とこそ語り合いたかったという薫の強い思いが込められているのである。



しかし、実際には薫は中の君に歌を詠みかけたのであった。この場面について玉上琢弥氏は次のように述べる(注13)。

常不軽は、「中門のもと」で、拜をする。偈を唱えて。「当ニ仏ト作ルヲ得ベシ」。一切衆生は成仏しうる。八の宮も、姫宮も。そう思わなくては、生から死への関門を、弱い人間はこえられない。……姫宮は何も言わない。薫も、今は、姫宮にむかつて何も言えない。

薫は大君には歌を詠みかけなかった。それは、薫がこの時点で既に大君に返歌をもらうことを諦めてしまっているからである。大君をこの世に留め置くことはできない、と薫は本能的に感じている。大君が死へと傾斜していくこの場面において、初めて交わされる薫と中の君の贈答歌は、今まさに中の君が大君の代替者として薫の心の中に位置付けられようとしていることを示しているのである。

### 三 中の君の答歌

ではこの贈歌に対する中の君の答歌はどのようなものであったのか。歌意は「霜を払って鳴く千鳥は、私の気持ちを知らないのでしょうか」である。地の文や贈歌の歌との関連を見ていくと、二重傍線部 a「暁」が、薫の歌では傍線部 e「朝ぼらけ」(ほのぼのと明るくなる頃)となっていたのに対して、傍線部 f「あかつき」(夜明け前)に戻されている。また傍線

部「霜さゆる」に対しては、まったく逆の意である傍線部「霜うちはらひ」で応えており、さらに地の文における薫の問いかけ「不軽の声はいかが聞かせたまひつらむ」には、「もの思ふ人の心をや知る」と明確に応えていない。

一体この歌はどのように解釈すべきなのか。まず、「霜うちはらひ」に着目したい。「霜」と「払ふ」の組み合わせは、和歌では常套表現であるが、「千鳥」詠には類例が見いだせなかった。しかし贈歌の「霜さゆる」と併せ鑑みると、「鴛鴦」を詠んだ歌の中に興味深い例を見いだすことができる。

霜さゆる二見の浦の鴛鴦の上を 君よりほかにたれか払はん

小大君(注14)

「霜がつめたく凍った二見の浦に棲む鴛鴦の羽の上におく霜を、お妃さま(※宣耀殿女御)以外のどなたが払うことができましようか」という意である。傍線を施したように、一首中に「さゆる」と「払ふ」の二語が同居している。言われてみれば当たり前のごとだが、霜は、まず「冴ゆる」(凍りつく)、そしてそれを「払ふ」のである。中の君の詠歌は、「(霜)うちはらひ」という強い表現について目がいきがちだが、しかしそれは反発心などからではなく、薫のそれを受け、発展させて詠んだのだと言えないだろうか。

また、「もの思ふ人」という語も例えば、

かつ消えて空に乱るる泡雪は物思ふ人の心なりけり

藤原蔭基(注15)

我がごとく物思ふ人はいにしへも今行末もあらじとぞ思ふ

読み人知らず(注16)

などあるように、恋の情緒を感じさせる歌ことばである。

そもそも、なぜ弁という仲介者が必要であったのかを思い出してみたい。薫に、波線部「つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれど、答へにくくて……」と匂宮を想起する中の君は、薫を必要以上に意識してしまっている。薫を姉の恋人ではなく、異性として意識する中の君は、自らの心的動揺を押し隠すために、弁という介在者を求めたのである。そもそも恋歌における女の答歌は、相手の男に対して、その不誠実さを疑い、責め、詰り、躲すというのが常套であった。この答歌も、実は薫のことば一つ一つに呼応している。「私の凍てついた心をあなたは癒そうとしてくれるけれど、でもあなたは本当に私の心を理解しているのかしら」と、相手の不誠実さを詰る歌として読むことも、あるいは可能なのではないか。

勿論この場面は、瀕死の大君を前に常不軽の声が響いているという状況であり、恋歌として見るべきではないかもしれない。しかしここには社交辞令というにはあまりには過度な表現が使用されているのであり、見方によつては十分に恋歌とも読めるものとなっているのである。

一方でこの歌は、そうした表層部の読みにとどまるべきではないであろう。『一葉抄(注17)』には「これハ不軽の心ハなし」とあるが、そもそも阿闍梨同様に八の宮の夢を見た中の君が、父の成仏を願う常不軽の声を無心に聞いていたとは考えられないことである。

第二節でも述べたが、まだ夜の明けない暁方の霜は、僧たちの心細さそのままに、彼らを苦しめる試練の象徴であった。常不軽菩薩は「何事にも堪え、自らの信念を貫き、衆生を救う」のであるが、僧はその試練に「わびている」のが実態であり、薫の歌はそうした僧の姿を率直に伝えていた。それに対して中の君の詠歌は「あかつきの霜うち払ひ」と、暗

闇の中、その試練をうち払う——試練に果敢に立ち向かう千鳥の姿をそこに描いている。中の君の詠む千鳥は、薫の詠む現実的な千鳥(僧の声)とは違い、本来あるべき常不輕の声(八の宮の鎮魂の声)なのである。そして、その先に「もの思ふ人の心をや知る」がある。

もの思ひにふける人の心を知っているのでしようか——という表現は大変抽象的である。第一「もの思ひ」の内容が分からないし、「人」が誰を指すのかも不明である。先に掲げた『提要』には、「此の物思ふ人は中君也」と記されているが、現代に至るまでこれに異論は差し挟まれていないようである。しかしあえてこうした臚化表現が用いられていることにこそ注意すべきなのではないか。ここには、本来他者に対しては口にすべきではない、憚られることばが隠されているのである。父宮の往生のために修されている常不輕、それは一方で自分たちから父宮を引き離すものでもある。往生してほしいと思いつつも、しかしまだ中有を彷徨っているのであれば、ぜひ自分たちの前に現れて欲しいと願う心情は、本文に次のように語られていた。

このごろ明け暮れ思ひ出でたてまつれば、ほのめきもやおはすらむ、いかで、おはすらむ所に尋ね参らむ。罪深げなる身どもにてと、後の世をさへ思ひやりたまふ。外国にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしく思さるる。

〔総角三二二頁〕

まだ大君が重態に陥る以前、中の君が八の宮の夢を見たことを大君と語り合う場面である。父宮の元へ迎え取られたい。しかし罪深い女の身である自分たちにはそれも叶わないであろう。ならばせめて反魂香を手に入れて、父宮を呼

び戻したい——中の君はあの大君との記憶を歌に詠み込むことにより、その気持ちを再度分かち合うべく大君に詠みかける。それは、独り父の元へ向かおうとする大君に対して、「父宮を呼び寄せたい」と詠むことにより、大君に生きてほしいと願う、中の君のメッセージなのである。

薫の歌は、一見中の君に歌を詠みかけながらも、実際はその背後に大君を幻視していた。一方の中の君の歌も、その奥に大君への気持ちを詠み込んでいる。両者の歌は、共にその心底に大君を横たえているのである。

#### 四 方法としての常不輕

今まで、薫と中の君の贈答歌がその向こうに大君を透かし見ていることを確認してきたわけだが、肝心の大君自身はこれに何も応えてはいない。死にゆく女君が辞世歌(注18)ともいうべき歌を詠出する場面は、既に御法巻に印象的に語られている。

かばかり隙あるをもいとうれしと思ひきこえたまへる(そうした源氏の)御気色を見たまふも(紫の上は)心苦し  
く、つひにいかにも思し騒がんと思ふに、あはれなれば、

(紫の上)おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだる萩のうは露

げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、

(源氏)ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな

とて、御涙を拭ひあへたまはず。宮、

(明石の中宮)秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草葉のうへとのみ見ん

〔御法五〇四〜五〇五頁〕

周知の通り、紫の上逝去直前の場面である。病床に臥す紫の上の容態は、厳しい夏が過ぎて、過ぎしやすい秋がやってきても何の甲斐もなく、ただ衰弱の一途を辿っていた。そんな紫の上の元へ、見舞いのため里下がりにしていた養女・明石の中宮が、内裏帰参の挨拶に訪れる。起きあがって迎える紫の上に源氏は喜びの色を隠さず、そんな源氏の姿に、紫の上は「これも一時のもの、儂く風に乱れ散る露のように、私の命も消え果てるでしょう」と贈歌とも独詠歌ともつかない歌を詠みかける。これに源氏が「私もあなたに後れはしない」と応じ、さらに明石の中宮が「儂い露の世は他人ごとではない」と続ける。直後、「露」が消え入るように紫の上は命果てたのであった。

最も近い関係にある者たちと歌を交わし、その者たちに看取られ、惜しまれてこの世を去る——という紫の上逝去の場面は、女主人公の死をより劇的に、印象的に彩っていた。宇治の女主人公・大君もまた、恋人(たろうとする)薫と、たった一人の身内である中の君に看取られて亡くなつていこうとする点で、両場面は重ね合わせる事ができるだろう。ただ違うのは、前者では唱和歌であつたものが、後者では贈答歌になつてゐるという点である。

なぜ大君は歌を詠まないのか(注19)。その理由を常不軽の中に探つていきたい。常不軽ということばが『源氏物語』中に表れるのは、最初に掲げた贈答歌の場面の二箇所と、その直前に位置する次に掲げた場面の計三箇所のみである。

(阿闍梨)「いかがが今宵はおはしましつらむ」など聞こゆるついでに、故宮の御事など聞こえ出でて……「いかなる所におはしますらむ。さりとて涼しき方にぞと思ひやりたてまつるを、先つころ夢になむ見えおはしまし。俗の御かたちにて、世の中を深く厭ひ離れしかば、心とまることなかりしを、いささかうち思ひしことに乱れてなん、ただしばし願ひの所を隔たれるを思ふなんいと悔しき、すすむるわざせよと、いとさだかに仰せられしを、たちまちに仕うまつるべきことのおぼえはべらねば、たへたるに従ひて、行ひしはべる法師ばら五、六人して、なにがしの念仏なん仕うまつらせはべる。さては思ひたまへ得たることはべりて、**常不輕**をなむつかせはべる」など申すに、君もいみじう泣きたまふ。(※大君)かの世にさへ妨げきこゆらん罪のほどを、苦しき心地にも、いとど消え入りぬばかりにおぼえたまふ。いかで、かのまだ定まりたまはざらむさきに参でて、同じ所にもと聞き臥したまへり。

〔総角三二〇〜三二二頁〕

今まで大君は、父宮の後世を「罪深かなる底にはよも沈みたまはじ、いづくにもいづくにも、おはすらむ方に迎へたまひてよ」〔総角三一―頁〕と、仮に(子への妄執によつて)往生は遂げられなかつたとしても、よもや悪道に墜ち入つてゐるということはあるまいと考へてゐた。しかし阿闍梨が語つた人の宮の姿は、その愛執ゆゑに往生できず、死後一年以上を経てなお中有を彷徨つてゐるといふ、あまりにも無惨なものであつた。阿闍梨はその供養に「なにがしの念仏」を唱えさせ、さらに「常不輕」をつかせてゐるといふ(注20)。なぜ阿闍梨がこの時常不輕を選んだのかということについては既に多くの研究者先によつて興味深い見解が示されているが(注21)、本稿の指向するところではないのであえて触れない。むしろ重視したいのは、この経の功德の大きさである。

生前、娘たちへの執着によつて出家の本願を遂げることができなかった八の宮は、それゆえ阿闍梨にとつては常に心配の尽きない仏弟子であつた(注22)。山寺参籠の際に発病、重態に陥つていく中で下山を希望する宮に阿闍梨はそれを許さず、また死してもその遺骸を山からは降ろさなかつた。これらすべて、八の宮が往生できないことを危惧したからである。しかしそのような配慮も、その後薰によつて立派に営まれたであろう法要の数々も、八の宮を往生させることはできなかつたのである。その現実を一番よく知る阿闍梨が、最後の手段として選んだのが常不軽なのでなかつたか。

『今昔物語集』卷十九「僧蓮田修不軽行救母死苦語第二十八」には、母親の「邪見深クシテ、因果ヲ不知ズ。……悪相ヲ現ジテ、頭ニ惡道ニ墜チヌ」姿を見た息子の蓮田が、その供養のために常不軽行を修して全国各地を廻り歩き、その結果「我罪報重クシテ、此ノ地獄ニ墜テ苦ヲ受ル事量リ無カリツ。而ルニ、汝チ我ガ為ニ年来不軽ノ行修シ、法華經ヲ講ゼルニ依テ、今我レ(母)地獄ノ苦ヲ免レテたう利天上ニ生レヌ」と、母を救つた話が記されている(注23)。また『閑居友』「あづまのかたに不軽拝みける老僧の事」にも、「……すべてこの不軽といふ事の心は、衆生のむねのそこに仏性のおはしますを、うやまひ拝みたてまつる也。我等がやうなる惑ひの凡夫こそ、この事わりをしらねども、悟りのまへにはいかなる蟻、螻蛄<sup>けち</sup>までも思ひくたすべきもなく仏性をそなへて侍也。地獄、餓鬼までもみな仏性なきものはひとりもなければ、この理をしりぬれば、あやし鳥、けだ物までもたうとからぬ事なし。されば、仏、涅槃にいり給はんとせし時、おほきなる光をはなち給ひて、十方をてらし給ひしに、地獄のそこまでその光いたりて、光の中にこゑありて、「もろもろの衆生にみな仏性あり」ととなへしかば、そのくるしみ、みなのだごりて、天上に生まるとぞ侍るめ」と、あらゆるものを救う尊い経として「常不軽」が記されている(注24)。

大君は、「生けとし生けるものは皆救われる」という常不軽に静かに耳を傾けた。確実に死へと向かう大君には、も



はや薫の声も中の君の声も届かない。八の宮を往生せしめるこの経に、同様に罪障深い(と考える)大君もまた死して救われようとするのである。常不軽は、父宮と共に極樂往生したいと願う大君の声ならぬ声を代弁しているということができるであろう。

紫の上にとつての辞世歌が大君にとつての常不軽であつた。常不軽は、大君の心情をそのまま代弁しているのであり、紫の上の歌と同様の役割を果たしている。常不軽は、贈答歌を導く(方法)として物語中に組み込まれているのである。

## 五 おわりに

本章は、常不軽をめぐる一連の場面を、そこに描かれた薫と中の君の贈答歌を中心に考察してきた。

薫の贈歌は、夜明け方の空に響く尊い常不軽の声に感興を催しての詠出であつた。同じ思い(無常観)を共有したいという願いは常に薫の心底にあつたのであり、この贈歌も本来は大君に詠みかけるべきものであつた。しかし薫はそれを中の君に詠みかけた。それは、薫が無意識のうちに大君の生を諦め、その代替者として中の君を求めたためなのである。

一方中の君は、薫の様子に思わず匂宮を意識してしまふ。弁に代詠をさせたのは、そうした動揺を押し隠すためなのであり、中の君の答歌は、それを反映してか、この場にそぐわない恋の情緒を感じさせるものとなつている。歌ことばによつて導かれた中の君の薫への媚態(注25)は、今後の両者の関係を先取りするものとなつている。

しかし一方で中の君の歌は、薫だけでなく大君に向けられてもいた。常不軽の声を叙情的に受け止める薫と、八の

宮という抛り所を失い、さらに大君まで失おうとしている中の君の心情は大きく隔たっている。薫によつて千鳥によそえられた不軽の声は、父宮を自分たちから引き離してしまふ恨めしい声としても中の君の耳には届いていたのである。夢でもいいから父宮に再会したいと切実に願う姉妹の心中を詠んだ中の君の歌は、共に生きて欲しいと願う大君へのメッセージでもあつたのである。

両者の歌の背景には、大君が幻視されている。その点では、大君は未だこの物語の女主人公たり得ていると言えることができるであろう。しかし、当の大君の心は現世に執着していない。ひたすら常不軽に耳を傾け、父宮と同じ蓮台に乗ることを願う大君は、常不軽に導かれ、この世から、物語から退場していこうとしている。

総角巻は巻頭の八の宮一周忌法要の準備から、大君の死までを一気に語りあげる。「光源氏物語の敗者」という影を引きずつた八の宮と、その影響を強く受けて育ち、八の宮死後もその亡霊に取り憑かれ続けた大君の死は、一つの大きな物語に幕を下ろさせることになる。そうした過去のしがらみを一掃したところで、初めて中の君の上京は達成されようとしている。それは、薫と中の君の物語の第一歩であると同時に、「宇治十帖」の新しい物語を切り拓く第一歩でもあるのだ。

## 注

(1)『源氏物語評釈第十卷』(玉上琢弥著 角川書店 一九六七年一月)、清水公照・清水好子「巻頭対談 経典の教理―絢

爛たる法華経を中心に―(『太陽仏の美と心シリーズ 絢爛たる経典』平凡社 一九八三年八月)、松本寧至「なぜ常不軽か―『源氏物語』宇治十帖の志向―」(『鈴木弘道教授退任記念国文学論集』和泉書院 一九八五年三月)など。

(2)この場面の和歌を取り立てて扱ったものには『国文学 解釈と鑑賞別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識No.32総角』(監修・鈴木一雄編集・後藤祥子・大軒史子 至文堂 二〇〇三年一月)がある。

(3)『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(4)源氏物語古注集成第二巻『源氏物語提要』(今川範政著 稻賀敬二編 桜楓社 一九七八年一月)。

(5)釈教歌の定義については、例えば山田昭全は、その論「釈教歌の成立と展開」(仏教文学講座第四巻『和歌・連歌・俳諧』伊藤博之・今成元昭・山田昭全編集 勉誠社 一九九五年九月)の中で、釈教歌を①法文歌、②仏教講会の取材した歌、③その他仏教的述懐の三つに区分している。この区分によれば、薫の歌は③に位置づけることができるだろう。

(6)神野志隆光「源氏物語の位相源氏物語の仏教思想の問題点」(講座日本文学 源氏物語上)監修・市古貞次編集・秋山虔 至文堂 一九七八年五月)。

(7)図説日本仏教の世界③『法華経の真理』(集英社 一九八九年一月)。

(8)『大正新修大蔵経』「妙法蓮華経憂波提舍卷下」に拠る。指摘は、岩波文庫『法華経下』(坂本幸男・岩本裕訳注 岩波書店 一九六七年一月)の解説に拠った。

(9)新日本古典文学大系『平安私家集』「公任集」(後藤祥子校注 岩波書店 一九九四年一月)に拠る。本歌は法華経二十八品中の「不軽品」。なお、新大系本に関しては、一部私に表記を改めた箇所がある。

(10)『新編国歌大観』に拠る。本歌は「法花経の心をよみし」と題する法華経二十八品中の「不軽品」。

(11)新編日本古典文学全集『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』(白田甚五郎、新聞進一、外村南都子、徳江元正校注・訳  
小学館 一九九九年一二月)

(12)『王朝語辞典』(秋山虔編 東京大学出版会 一九九九年三月)、『歌ことば・歌枕大辞典』(久保田淳・馬場あき子編 角  
川書店 一九九九年五月)など。

(13)注(1)『源氏物語評釈 第十卷』参照。

(14)私家集注釈叢刊1『小大君集注釈』(竹鼻續校注・訳 貴重本刊行会 一九八九年六月)。

(15)新日本古典文学大系『後撰和歌集』(片桐洋一校注 岩波書店 一九九〇年四月)所収。卷八・冬・四七九。

(16)新日本古典文学大系『拾遺和歌集』(小町谷照彦校注 岩波書店 一九九〇年一月)所収。十五・恋五・九六五。

(17)源氏物語古注集成第九卷『一葉抄』(藤原正存著 井爪康之編 桜楓社 一九八九年三月)。

(18)倉田実「紫の上の(辞世の歌)」(『紫の上造型論』新典社 一九八八年六月 初出『平安文学研究』77 一九八七年五月)、「紫の上の死と光源氏―御法巻―」(源氏物語講座第三卷『光る君の物語』(勉誠社 一九九二年五月)。倉田は、紫の上の最後の詠歌が夫と子の唱和であったことに着目し、「こうして死去することが物語一代限りの女主人公への手向けになったのだ」と述べている。

(19)井野葉子は、その論「大君 歌ことばとのわかれ」(『源氏物語の思惟と表現』新典社 一九九七年二月)の中で大君が最後に詠んだ薫への答歌について、「……大君はせつかく拒否の表明の歌を詠んだのに、薫には伝わらなかつたことになる。歌ことばに託された大君の心は宙に浮いたまま、薫には決して伝わらない。和歌の伝達機能とは所詮そんなものなのか。これ以降、大

君は二度と歌を詠まなくなることは示唆的である」と述べている。

(20) 常不軽行は、会う人ごとに類ずいて礼拝をするので、常不軽行を修することを「常不軽をつく」という。

(21) 注(1)(6)の他、重松信弘『源氏物語の仏教思想―仏教思想とその文芸的意義の研究』(平楽寺書店 一九六七年八月)など。

(22) 鈴木裕子「宇治八の宮の「死霊」をめぐる―大君を追いつめたもの、そして阿闍梨の「欲望」―」(『日本文学』48)一九九八年五月)。

(23) 新編日本古典文学全集『今昔物語集②』(鳥淵和夫・国東文麿・稻垣泰一校注・訳 小学館 一九九九年五月)。

(24) 『閑居友』(美濃部重克校注 三弥井書店 一九七九年五月)。なお、「常不軽菩薩行」を扱った説話の研究については、原田哲通「法華経常不軽菩薩品第二十が生む説話―閑居友第九話を基点として」(『説話文学研究第十八号』一九八三年六月)に詳しい。

(25) 鷲山茂雄は、「宇治十帖主題論 薫と中の君」(『源氏物語主題論』塙書房 一九八五年二月)の中で、「薫がなき姉の代りに自分に心を傾けつつあるのを十分知りながら、夫の不実を拗ねて宇治に籠ろうとするのに、その薫にすがろうとするとあまりに女としての“甘え”が過ぎるといふものだ。しかし、物語はどうやらこの“甘え”が中の君の最大の魅力であることく描いているふしがある。……(物語は中の君を)一見弱々しくも“可愛い女”として描いている。しかし、一方、そうした中の君に読者は実にしたたかな女の姿を見てとる必要もあるだろう」と述べている。また、斉藤昭子も「中の君物語の(ふり)―宇治十帖の(性)―」(『新物語研究』4 源氏物語を(読む)物語研究会編 平成八・一一)の中で、宿木巻における中の君に匂宮の欲望を模倣し、可愛らしく振る舞う、(ふり)をするしただたかな女性としての一面を読み取っている。

第三部 上京後の詠歌

# 第一章 方法としての和歌——早蕨卷「梅の香」の贈答歌——

## 一 はじめに

早蕨卷は、椎本卷において父八の宮を、総角卷において姉大君を失い天涯孤独になった中の君が、宇治の地を離れ、夫匂宮のもとに引き取られる、その過程を綴った短い巻である。従来この巻は、「大君追慕を基調とする巻である（注1）」、「大君物語と浮舟物語をつなぐ巻である（注2）」、「大君物語に決着をつけるとともに新たな物語展開を予示する巻である（注3）」などといったように、物語の構造を見極めようとする立場から主に論じられてきたのであった。

本章もこうした一連の先行研究の延長線上に位置するものであるが、特にここでは巻中に描かれた（和歌）を再検討していきたいと考えている。早蕨卷の歌については、小町谷照彦による詳細な論考が既にある（注4）。小町谷は、早蕨卷に記された全十四首の歌すべてを物語の流れに即して考察し、「早蕨卷は、薫と中の君の物語である」と結論づけられたのであった（注5）。しかし本論文では、本来ならば記されてしかるべき歌が記されていない——婚姻の当事者たる匂宮と中の君の贈答歌が記されていない、という点に注目したい。この巻には、その短さとは対照的に、多くの歌が散在している（注6）。にもかかわらず、肝心の当事者たちの贈答歌は記されていないのである。

『源氏物語』において、女君たちが上京する（あるいは賤所から貴所に移る）場合には、必ず当事者による歌の贈答が

記されていた(注7)。紫の上しかり、明石の君しかり、玉鬘しかりである。それは、上京する者と、それを受け入れる側の心の結合が贈答歌という形によって表現されているのであり、その詠歌は後の物語を展開させていく、大きな力となつていたのであった。繰り返すが、早蕨巻には句宮と中の君の歌の贈答が記されていない。しかし、句宮も中の君も歌を詠んでいない訳ではないのである。

本論文では(記されない)ことの意味を、(記された)和歌から読み解いていきたいと考えている。

## 二 二つの「梅の香」の贈答歌

### (1) 相似する場面

早蕨巻には、中の君と句宮の贈答歌が記されない代わりに、都における句宮と薫、宇治における中の君と薫の贈答歌が、それぞれ近接した時間の中で記されている。これらの場面は、それぞれがまったく無関係とは思えない程に表現が類似している。まずは、その二つの場面を掲げる。

### 本文A

内宴など、もの騒がしきころ過ぐして、中納言の君、心にあまることをも、また、誰にかは語らはむと思しわびて、兵部卿官の御方に参りたまへり。しめやかなる夕暮なれば、宮、うちながめたまひて、端近くぞおはしましける。



箏の御琴掻き鳴らしつつ、例の、御心寄せなる梅の香をめでおはする、下枝を押し折りて参りたまへる、匂ひのいと艶にめでたきを、をりをかしう思して、

a 折る人の心に通ふ**花**なれや色には出でずしたに匂へる(匂宮)

とのたまへば、

b 見る人にかごとよせける**花**の枝を心してこそ折るべかりけれ(薫)

わづらはしく」と戯れかはしたまへる、いとよき御あはひなり。

〔早蕨三四八〜三四九頁(注8)〕

本文B

御前近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見過ぐしがた げにうち鳴きて渡るめれば、まして、「春や**昔**

の「と心をまどはしたまふどちの御物語に、をりあはれなりかし。風のさと吹き入るるに、花の香も客人の御匂ひも、橘ならねど**昔思** ひ出でらるるつまなり。つれづれの紛らはしにも、世のうき慰めにも、心とどめてもてあそびたまひしものを、など心にあまりたまへば、

c 見る人もあらしにまよふ山里に**むかし**おぼゆる花の香ぞする(中の君)

言ふともなくほのかにて、絶え絶え聞こえたるを、なつかしげにうち誦じなして、

d 袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる(薫)

たへぬ涙をさまよく拭ひ隠して、言多くもあらず、「またもなほ、かやうにてなむ。何ごとも聞こえさせよかるべき」など聞こえおきて立ちたまひぬ。

〔早蕨三五八頁〕

本文Aは、大君の死の翌春、忙しい新年の儀式を終えた薫が久方ぶりに匂宮のもとを訪れる場面である。折しも匂宮はお気に入り梅の花を賞翫中で、薫は「下枝を押し折りて」匂宮のもとに参上する。匂宮は梅の香と薫の体香とが交じりあつて芳香を漂わせるのに興を覚え、薫に歌を詠みかけ贈答する。一方本文Bは、上京を明日に控えた中の君のもとを薫が久しぶりに訪れ、交誼を求めめる場面である。本文Aと同様、眼前には梅の花が美しく咲き誇っている。大君鍾愛の紅梅、それに薫の体香が交じりあつて、中の君は昔を想起させられずにはいられない。思い余つた中の君は薫に歌を詠みかけ贈答する。

これらの共通点として掲げられるのは、どちらも眼前に梅の花が咲き匂っているという情景の中で、訪問者・薫の体香に触発されて歌を詠みかけているという点であろう。また和歌的情趣に満ちた美的世界がそこには現出しているという点でも両者は共通している。本文B「春や昔の心をまどはしたまふ……」「橘ならねど昔思ひ出でらる……」には著明な和歌、

e 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

〔古今集巻 第十五 恋歌五(注9)〕

f 五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

〔古今集 巻第三 夏歌〕

が引用されている。一方の本文Aは、本文Bのような明瞭な引歌こそ指摘できないが、薫の「下枝を押し折」という行為それ自体が、次の古今集収載歌に見られるような和歌的世界を背景としているのである。

gよそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

〔巻第一 春歌上〕

梅の花を折りて人におくりける

ともりの

h君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

〔巻第一 春歌上〕

このように、一見関係性の希薄にみえる本文ABではあるが、実は非常によく似た表現構造をしているのであり、これらはまったく無関係なものとして看過されるべきではない。以下、両場面について、さらに仔細に検討を試みることにする。

## (2) 句宮と薫の贈答の場面

大君の死から三ヶ月、新しい年を迎えながらも薫の悲しみは癒えることがない。思いあぐねた薫は「心にあまることをも、また、誰にかは語らばむ」と、句宮邸を訪れる。句宮は、「梅花雪を帯びて琴上に飛ぶ(注10)」の如く、端近に出て琴を掻き鳴らし、白梅を賞翫している最中であつた。そこに薫は「下枝を押し折りて」参上する。薫のこの行為は、前節で確認したように、和歌的情趣の世界を体現しようとするものであつた。この場面は、漢詩の美的世界を体現する句宮と、和歌の美的世界を体現しようとする薫の緊張関係によつて成り立っている。

a歌の「したに匂へる」には、薫の中の君への恋情を読み取るのが一般的である(注11)。「あなたはこの白い梅の花と同じで、表(顔色)には出さないけれど、密かに中の君を慕っているのではないか」との意で、中の君への横恋慕を疑う句宮が、薫を牽制(あるいは揶揄)する気持ちを込めて詠出したものと理解されている。

一方、薰のb歌は、「託言」に「香」の意味を込めて、「ただ見ていただけの私ですのに。それは言いがかりというものです」と、句官の猜疑心を軽妙に受け流す。しかし下の句では「心してこそ折るべかりけれ（もつと気をつけて折るべきでした）」と、中の君への未練を滲出しており、句官のもとに中の君が引き取られることを喜びつつも、恋情を棄てきれないでいる薰の複雑な心中が吐露されている（注12）。つまりこの場面は、中の君をめぐる二人の男たちの攻防——緊張関係が、和歌を中心として記されていると言えるのであるが（注13）、しかしそれだけではあるまい（注14）。

ここで注目したいのは、句官の贈歌の「花」の解釈である。今まで句官の贈歌は、下の句ばかりが注目され、「花」については何の解釈も施されてこなかった。しかし薰の答歌の「花」に中の君の喩を認めるのが通説化しつつある中で（注15）、それを受けているはずの句官の贈歌の「花」に中の君の存在を認めないのは如何なものであろうか。梅の花を女の喩とするものには、例えば次のような歌がある。

i 梅の花 立ちよる許りありしより人のとがむる香にぞしみぬる

〔古今集 卷第一 春歌上〕

j 梅の花 よそながら見むわぎもこがとがむばかりの香にもこそしめ

〔後撰集 卷第一 春上（注16）〕

i 歌は、「梅の花」に近づいたあの時から、誰の移り香かと人に咎め立てられるほどの匂いが染みついてしまったよ」との意で、「梅の花」に女の姿がよそえられている。j 歌も類似の発想で、「梅の花は離れて賞美しよう、愛しい人が誰のものかと咎めるほどの香が染みついてしまうから」との意。いずれも題知らず、読人知らずであることから、広く人口に膾炙していた歌と考えることが可能であろう。梅の「花」は、女の喩なのである。

もし句宮の贈歌の「花」に、中の君の存在を認めるならば、この歌の解釈は「この花（中の君）もまたあなたを慕っているのだろうか。あなたが手折ったことで、それに応じるようにいい匂いを放っている」と解釈できることになる。句宮が薫と中の君の仲を案じていることは、例えば、大君逝去に憔悴しきった薫の姿に句宮が、

音のみ泣きて日数経にければ、顔変りのしたるも見苦しくはあらで、いよいよものきよげになまめいたるを、女  
ならばかならず心移りなむ……なまうしろめたかりければ、いかで人の譏りをも恨みをもはぶきて、（中の君を）  
京に移ろはしてむと思す」

〔総角三三八頁〕

と発想することからも理解できる。しかしやはり、句宮に常々劣等意識を抱かせてきたもの、それは薫の持つ（香）であつた。薫の体香に劣等感や闘争心を抱く句宮の姿は、既に句宮巻に見ることができぬ。

（薫の）はかなく袖かけたまふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く……なつかしき追風ことにをりな  
しがらなむまさりける。かく、あやしきまで人の咎むる香にしみたまへるを、兵部卿宮なん他事よりもいどましく  
思して、それは、わざとよろづのすぐれたるうつしをしめたまひ、朝夕のことわざに合はせいとなみ、御前の前裁  
にも、春は梅の花園をながめたまひ……。

〔句宮二七頁〕

ここには薫に手折られることによつて芳香を増す花々に、手折られることを望む女たちの姿が暗に重ね合わされて

いる。匂宮は女たちを虜にする薫の（香）に對抗しようと香を焚きしめ、このことによつて二人は、「匂ふ兵部卿宮、薫の中將」「匂宮卷二八頁」と呼び慣わされるようになったのであつた。

薫の美質である（香）を最大限に生かすもの、それこそが「梅の香」なのであり、今、薫は、その梅の花の「下枝を押し折りて」匂宮のもとにやつてくる。この超越的な美を現前せしめる薫に、匂宮は、「をりをかし」と感じつつも、しかし一方で美を体現しているという点において薫との圧倒的な差——劣等意識を抱かないわけにはいかない。匂宮の詠歌には、薫への劣等意識と、それゆえに生じる中の君への猜疑心、そして中の君を奪われまいとする焦燥感が反映されているのである。

総角卷末から早蕨卷前半にかけて、匂宮が中の君の処遇を気にかける場面は数回語られている（注17）。が、中でもこの贈答の直後の匂宮の中の君への消息は、「浅からぬ仲の契りも絶えはてぬべき御住まひを、いかに思しえたるぞ」とのみ恨みきこえたまふも……。「早蕨三五二頁」と、今までになく強い口調のものであり、これによつて中の君の上京は一気に加速することになる。

本文Aの場面は、匂宮の薫への劣等感とともに、上京を拒み続ける中の君への猜疑心、そして中の君を薫に奪われてはならぬという焦燥感が記されている。それは換言すれば、匂宮と中の君の関係が今なお不安定なものでしかないことを暴き出してもいるのである。

### (3) 中の君と薫の贈答の場面

いよいよ上京という前日の朝、薫は宇治に中の君を訪れる。悲しみに沈む中の君は対面を渋るものの、女房らの説得

に仕方なく応対に出る。しかしこの対面は、中の君の心情に微妙な変化をもたらすことになる。

(薫)「月ごろの積もりもそこはかとなけれど、いぶせく思ひたまへらるるを、片はしもあきらめきこえさせて慰めはべらばや。例の、ほしたなくなさし放たせたまひそ。いとどあらぬ世の心地しはべり」と、聞こえたまへれば、(中の君)「はしたなしと思はれたてまつらむとしも思はねど、いさや、心地の例のやうにもおぼえず……」など、苦しげに思いたれど、「いとほし」など、これかれ聞こえて、中の障子の口にて対面したまへり。……(薫)「渡らせたまふべき所近く、このごろ過ぐして移ろひはべるべければ、夜半、暁とつきづきしき人の言ひはべるめる、何ごとのをりにも疎からず思しのたまはせば、世にはべらむ限りは、聞こえさせうけたまはりて過ぐさまほしくなんはべるを、いかが思しめすらむ。人の心さまざまにはべる世なれば、あいなくやなど、一方にもこそ思ひはべらね」と聞こえたまへば、「宿をば離れじと思ふ心深くはべるを、近く」などのたまはするにつけても、よろづに思ひ乱れはべりて……。

〔早蕨三五五〜三五六頁〕

この対面に際して、薫は二つのことを中の君に訴えている。一つは、鬱陶しく晴れない現在の気持ち、親しく語り合うことで慰めたい(慰められたい)ということ。今一つは、上京後は今まで以上に親しい交際をしてほしいというものである。大君逝去の際には法事の一切を取り仕切り、また此度の中の君の上京に際しても、その細部に至るまで諸事万般取り仕切ってきた薫であったが、匂宮の妻となつて二条院に引き取られて後は、それも叶わない。中の君を失つてしまうという現実に、薫はひたすら今後の交誼の約束を取りつけようとするのである。

しかし中の君は困惑するばかりで、これに応じようとしな<sup>い</sup>。薫の「はしたなくさし放たせたまひそ」に対して「はしたなしと思はれたてまつらむとしも思はねど……」、「渡らせたまふべき所近く」に対して「近く、などのたまはするにつけても……」と、ただ薫のことばを鸚鵡返しのように口にする中の君は、なるほど他者を慮るだけの精神的余裕はないかもしれない。しかし一見上京を拒んでい<sup>る</sup>ように見えるこれらの発言も、実は薫の言葉に応えることによつて、その思<sup>い</sup>を擲い上げてい<sup>ると言えるのではないか。薫の語る都には、自身に移り住む二条院があるのである。茫漠とした上京への不安を抱きつつも、薫の言葉におぼろけながら自らの上京後の姿が浮かび上がってくる。中の君の心は、薫の言葉に導かれるように京へと向き始めていくのである。そして、その延長線上にあるのがc dの贈答歌なのであつた。</sup>

c 歌の上の句「見る人もあらしにまよふ」には「見る人もあらし」の意が掛けられている(注18)。「今後はこの梅の花を賞美する人もなくなるこの山里に、昔を思い起こさせる花の香りがする」との意で、「見る人もあらし(いないだろう)」「(Ⅱ未来)に対して、「むかし」(Ⅱ過去)が想起され、それを「山里」(Ⅱ現在)が結びつけるという構図になっている。ここで注意したいのが、「むかし」という語である。この語は早蕨巻に十例見られるが、そのほとんどは亡き大君に関連して、あるいは連想させるものとして使用されている。本文Bにも(c 歌を含めて)三例あり、このことは吉井美弥子の言うように(注19)、中の君が大君との日々を「昔」(Ⅱ過去)として位置付けようとしてい<sup>ると考<sup>える</sup>ことができるであ<sup>ら</sup>う。さらに、これら三例が全て和歌の関連語句として使用されていることを鑑みると、中の君は大君を和歌的情緒の中に、美しい思<sup>い</sup>出の中に位置付けようとしてい<sup>る</sup>ことも分かるのである。</sup>

一方、下の句「むかしおぼゆる花の香」は、歌の直前の地の文「つれづれの紛らはしにも、世のうき慰めにも、心とどめてもてあそびたまひしものを」から、姉妹二人で紅梅を愛でた時分を懐かしんだものと理解できる。しかし発された言



葉は、有名な古歌、

かさつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする

〔古今集 夏歌〕

を踏まえたものであった。「むかし」人とは本来大君を指すのだが、古歌を踏まえることにより、ここに恋愛の情緒が呼び込まれ、対象が薫へとずらされることになる。「昔の人の袖の香」と薫に呼びかける時、それは昨年の秋の夜の一件のことを暗に指している。前年の秋、なかなか靡かない大君に焦れた薫は、老女房弁と結託して二人の寝所に忍び込んだ。しかし大君にはすんでのところで逃げられ、薫は仕方なく中の君と「をかしくなつかしきさまに語らひて」〔総角二五三頁〕一夜を明かしたのであった。その夜の一件が中の君の口から語られることは一度もないが、しかし薫の実直な態度は、その後の大君の葬送、上京への配慮などに見られる誠意と相俟って、中の君に大きな安心と信頼を与えていたはずである(注20)。c歌は、大君と過ごしたかつての「春」の情景と、昨年「秋」の一件に始まる薫との関係を総括し、「過去」のものとして位置付けようとする中の君の心情の表れなのであった。

中の君の歌に、薫は「袖ふれし梅」「根ねごめうつろふ」と未練を滲ませた歌を贈り、涙をこらえながらその場を去る。ここには大君を追慕する言葉はまったくなくない。思うに、薫が求めていたのは、中の君と共に亡き大君を偲ぶことではなく、むしろ中の君と自分が互いを大切に思っているという確信だったのでないだろうか。両者の心は必ずしも一致するものではないが、大君という共通の話題を通して二人は互いに求め合い、繋がるうとする。もう一つの男女の形が、ここには語られているのである。

### 三 おわりに

本章では、中の君の上京の場面において、なぜ当事者同士(匂宮と中の君)の贈答歌が描かれていないのかということ、描かれた和歌——匂宮と薫、中の君と薫の贈答歌から考察した。

本文Aにおける匂宮と薫の贈答は、薫の中の君思慕(未練)と、匂宮の(中の君への)猜疑心を炙り出すものであった。それは、結婚したとはいえ、匂宮と中の君の関係がいまだ不安定なものであることを象徴していた。

一方、本文Bにおける中の君と薫の贈答は、中の君の未来への指向と薫の未練が語られていた。しかし、それだけではない。大君を通して、二人は強く結びついているのである。夫婦でも恋人でもない、新しい男女の形がここには示されているのであった。

これらの贈答歌は、薫という仲介者を通して、互いにすれ違う心のありよう描いているといえるのではないか。中の君を信じ切ることができない匂宮と、過去を振り捨て前向きに生きていこうとする中の君と。そしてそんな中の君の姿には、その後の幾多の試練に対応できる強さとしなやかさの一端を見ることができるのであり、よってこの本文ABは、正編における紫の上や明石の君、玉鬘の場合と同様に、上京に際しての贈答歌として認めることができるのである。

- (1) 篠原昭二「早蕨」(『國文學解釈と教材の研究』學燈社 一九六六年六月)、鈴木一雄「橘姫・椎本・総角・早蕨・宿木」(『源氏物語講座第四卷 各巻と人物Ⅱ』有精堂 一九七一年八月)、榎本正純「早蕨巻の和歌二首―源氏物語における和歌の一問題―」(『平安文学研究第四十九輯』一九七二年一二月)など。
- (2) 前掲鈴木論文、長谷川正春「早蕨」(『國文學解釈と教材の研究』學燈社 一九七四年九月)、吉岡曠「中の君の都移り」(『講座源氏物語の世界(第八集)』有斐閣 一九八三年六月)など。
- (3) 注(1) 掲出榎本論文、重松信弘「中の君を中心とする物語 早蕨―宿木」(『源氏物語研究叢書Ⅳ増訂 源氏物語の構想と鑑賞』風間書房 一九八二年三月)など。しかし「新たな物語」が、果たして誰のどのような物語なのかについての具体的な言及はない。
- (4) 小町谷照彦「源氏物語第三部―「早蕨」の歌ことば表現を読む」(『國文學解釈と教材の研究』學燈社 一九八六年一月)
- (5) これに対して吉井美弥子は、その論「宇治を離れる中君―早蕨・宿木巻」(『源氏物語講座4 京と都の物語・物語作家の世界』勉誠社 一九九二年七月)の中で、早蕨巻を「薫と夫匂宮との間に中君がはさまれる三角関係の物語」と位置づけている。
- (6) 中の君の上京のみを語るこの短い巻には、和歌が十五首散在する。その内訳は以下の通りである。薫五首(贈1答3独1)、中の君四首(贈1答2独1)、弁の尼二首(贈2)、匂宮一首(贈1)、阿闍梨一首(贈1)、大輔の君一首(贈1)、女房一首(答1)。なお分類のし方については、新編全集本「源氏物語作中和歌一覽」(鈴木日出男編)に拠る。
- (7) 紫の上は二条院に引き取られた数日後、明の石君は大堰の邸に落ち着いた数日後、玉鬘は六条院に引き取られる前に、それ

ぞれ源氏と歌を交わしている。

(8)『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(9)『古今和歌集』の引用本文はすべて、新編古典文学全集『古今集』(小沢正夫、松田成穂校注・訳 小学館 一九九三年一月)に拠る。なお、分類項目など一番上に記した算用数字は、新編国歌大観の歌番号である。以下、算用数字についてはすべて同じ。

(10)和漢朗詠集「梅花雪を帯びて琴上に飛ぶ 柳色煙に和して酒の中に入る」[卷上 春梅]。なお、引用本文は、講談社学術文庫 和漢朗詠集(川口久雄 講談社 一九八二年二月)、なお参考欄には『栄花物語』わかばえの巻に中宮大夫斉信がこの句を朗詠したことが見える」とある。

(11)注(7)掲出の「新編全集」を始めとする、現代における代表的な注釈書「源氏物語評釈」(玉上琢弥著 角川書店)、「新潮日本古典文学集成」(新潮社)、「新日本古典文学大系」(岩波書店)を指す。

(12)例えば新編全集本の現代語訳には、a歌「この梅の花はこれを手折るあなたと心が通っているのでしょうか。外には色が現れないで、内においを包んでいます。あなたは何気なくよそおいながら、内心ではあのお方を恋慕しているのではあるまいか」「早蕨巻三四八頁」、b「ただ梅の花を賞美しているこの私ですのに、それがそのような言いがかりをおつけになる花の枝なのでしたら、はじめからそのつもりで折るべきでした。あのお方を私が頂戴すればよかったですね(傍線引用者。以下同じ)」「同頁」とある。

(13)新編全集頭注には「匂宮と薫は中の君をめぐって対立しかねない動機をはらんでいるが、語り手はその二人を、睦まじい仲と

語りおさめる」「早蕨巻三四九頁・頭注一一」とある。また注(4)掲出の小町谷論文も、「句宮は薫が大君の死後も宇治に主人顔で親しく出入りしているのを見て、「女ならば必ず心移りなむと、おのがけしからぬ御心ならひに思し寄るも、なまうしろめたかりければ」「(総角)と、自分の行状を顧みて、薫と中の君との仲を邪推するようになり、このことが中の君引き取りにつながることになる。この贈答歌は冗談めかしてはいるけれども、薫も内心中の君を句宮に譲ったことを後悔しており、心底を見すかされたところもあつて、両者の間に中の君をめぐって心理的対立の火花が飛び散っているのが緊張感を伴って詠出されている」と指摘する。

(14)注(13)掲出の小町谷論文(点線部)に指摘があるように、氏もまた本文Aの場面に、句宮の中の君引き取りの契機を読み取っている。しかしそれは句宮が「自分の行状を顧みて」、換言すれば薫の中の君恋慕への疑念なのであつて、中の君への直接的な疑念と考える本論とはその主張を異にする。

(15)玉上評釈は、「この解では露骨すぎる」として、この説をとらない。

(16)後撰和歌集の引用本文はすべて、新古典文学大系『後撰和歌集』(片桐洋一校注 岩波書店 一九九〇年四月)に拠る。なお、一部私に表記をあらためた箇所がある。

(17)正確には四回である。①「后宮は中の君を」二条院の西の対に渡いたまひて、時々も通ひたまふべく、忍びて聞こえたまひければ……(句宮は)おぼつかかなるまじきはうれしくて、(中の君に)のたまふなりけり」「総角三四〇頁」、②「宮は、(宇治に)おはしますことのとどころせくありがたければ、京に渡しきこえむと思したちたり」「早蕨三四八頁」、③「宮も、かの人(中の君を)近く渡しきこえてんとするほどのことども、(薫に)語らひきこえたまふ……」「早蕨三五〇頁」、④「浅からぬ仲の契りも絶えはてぬべき(宇治の)御住まひを、いかに思しえたるぞ」とのみ(中の君に)恨みきこえたまふも……」「早蕨三五二頁」。

(18) 中の君の心情の推移という点からも、ここには「あらじ」を認めるのが自然ではないかと思われる。同様の例として、「あふ」とのあらしにまよふ小ぶねゆゑとまるわれさへこがれぬるかな「さい宮のくだりたまふに九条右大臣集」(『新編国歌大観』第三卷 私家集編Ⅰ 家集)があるが、ここでは「あらし」に「あらじ」が掛けられているのは明白である。一方、注(4)掲出の小町谷論文は、「あらし」の掛詞について、諸説を整理し、次のように述べている。「あらし」に「嵐」と「あらじ」の掛詞を認めるかどうかについて、解釈が分かれる。『評釈』や全集本では認めず、大系本や集成本では認めて、中の君が上京したら見る人もあるまいという意に解している。語勢から言えば掛詞を認めたいところである。掛詞を認めた場合、「あらじ」という未来形から「人」を中の君とするのが通説だが、大君亡き今も、中の君が立ち去った後も、と少し広げた解釈をしたらどうであろうか。「嵐」は惑乱の意と共に、荒廢の意にも用いる。大君も今はなく、自分は途方にくれているが、このさびれてしまった宇治の邸宅は今後ますます荒れ果てていくことだろう。そんなに心細い思いでいるところに、大君在世の折りを思い出させるように、なつかしい薫が慰めに来てくれた、と感謝しているのである。「また、新編全集本、新大系本はともに掛詞を認めている。」

(19) 吉井美弥子は、その論「早蕨巻の方法―巻頭表現を起点として―」(『中古文学論攷』早稲田大学大学院中古文学研究会一九八五年一〇月)の中で、「(引歌と関連させて)物語の表現は、大君を、すでに思い出されるべき「過去」の人として規定しようとしていると考えられるのである」と述べている。

(20) 注(17)掲出の小町谷論文(点線部)は、中の君の贈歌に、薫への感謝を読み取る。また三田村雅子は、その論「方法としての〈香〉―移り香の宇治十帖へ―」(『有精堂』一九九六年三月)の中で、中の君の贈歌は「大君に託して表明された中君の、薫への思慕であり、執着なのである」と述べている。

## 第二章 歌が紡ぐ物語―宿木卷「朝顔」の贈答歌―

### 一 はじめに

宿木卷は、「宇治十帖」中最も長大であり、様々な出来事が矢継ぎ早に語られる巻である。薫と今上帝女二の宮の結婚話に始まるこの巻は、匂宮と夕霧女六の君の結婚、中の君の懊悩、薫の恋情愁訴、中の君の出産へと続き、その展開の性急さは、あたかも橋姫巻から連綿と続く大君・中の君物語の流れを一気に収束させてしまおうとするが如くである。さらにこの巻は、その後半に『源氏物語』最後のヒロイン浮舟の登場という新たな物語の始発が予感させられてもおり、多く宿木卷は、大君物語から浮舟物語へのつなぎの巻であるとか、正編の二番煎じの女君中の君の悲嘆を語る巻であるなどと論究されてきたのであった(注<sup>1</sup>)。

大君や浮舟といった特異な人生を歩んだ二人に比べて、貴顕と結ばれ都において平穏な生を歩んだ中の君の評価は必ずしも高いものではない。しかし、その大半が論拠とするのはこの宿木卷であり(注<sup>2</sup>)、それは換言すればこの巻における中の君像の考察がいかに重要であるかということを意味してもいよう(注<sup>3</sup>)。

本稿では、夫匂宮と夕霧女六の君の結婚が迫ったある朝の、朝顔をめぐる中の君と薫の贈答歌を中心に取り上げる。後に薫の添い臥し事件を招き、それに困じた中の君が浮舟を呼び込むという新たな展開の始発点となっているこの

場面は、物語において如何なる意味を持つのだろうか。勿論、本稿はこの一場面のみを取り上げて従来の中の君像を覆そうと試みるものではない。ただ、こうした中の君の詠歌及びその周辺を表現に即して辿っていくことで、物語における中の君造型、ひいては中の君の、物語における役割を解明する端緒となればと考えている。

## 二 薫の贈歌

まず、考察の対象とする本文を掲げる。

声なども、わざと似たまへりともおぼえざりしかど、あやしきまでただそれとのみおぼゆるに、人目見苦しかるまじくは、簾も引き上げてさし対ひきこえまほしく、うちなやみたまへらん容貌ゆかしくおぼえたまふも、なほ世の中にも思はぬ人は、えあるまじきわざにやあらむとぞ思ひ知られたまふ。……折りたまへる花を、扇にうち置きて見るとまへるに、やうやう赤みもて行くもなかなか色のあはひをかしく見ゆれば、やをらさし入れて、

(薫)よそへてぞ見るべかりける白露のちぎりかおきし朝顔の花

ことさらびてしももてなさぬに、露を落さず持たまへりけるよとをかしく見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば、(中の君)消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくる露はなほぞまされる



何にかかれる」といと忍びて言もつづかず、つつましげに言ひ消ちたまへるほど、なほいとよく似たまへるものかなと思ふにも、まづぞ悲しき。

〔宿木三九三〜三九五頁(注4)〕

匂宮と夕霧女六の君の結婚は、中の君に妻としての絶望をもたらしただけでなく、その仲介役である薫にも深い憂愁を抱かせる一件であった。それは、臨終の大君に「このとまりたまはむ人(中の君)を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに、違へたまはざらましかば、うしろやすからましと、これのみなむ恨めしきふしにてとまりぬべうおぼえはべる」〔総角三二七頁〕とまで口にさせた、中の君と匂宮の結婚(中の君の現在の不幸を招いたこと)への自責の念と、それによつて大君の忘れ形見である中の君を自らの手で失つてしまったことの後悔の念とである。それまで薫は、大君にいよいよ似てくる中の君に恋情を募らせながらも、自らに課した後見人としての役割を誠実に果たそうと努めてきたのであった。しかし苦境に立たされた中の君の様子はあまりに大君に似通っており、恋情を押さえることができない。

薫の歌は「よそえて見るべきでした。白露が約束してくれた朝顔の花——貴女ではなかったでしょうか」の意である。「白露」は大君、「朝顔の花」は中の君を喩えている。薫のこの歌は、例えば新編全集には「人間のはかなさ、中の君との縁の薄さを嘆く歌(注5)」と解釈されている。しかしこの歌には、そうした諦念に収まりきらない、薫の蠢く欲望が詠み込まれているのではないか(注6)。

まず「白露のちぎり」に着目してみよう。薫は一体何を根拠に「大君が約束してくれた貴女ではなかったか」と詠出したのか。仮にその言葉を信じるならば、薫は大君と中の君の処遇について「ちぎり」を交わしたことになる。しかし大君

の意向は老女房弁を通じて間接的に伝えられただけであり、先に掲げた臨終の大君の言葉「このとまりたまはむ人（中の君）を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに……」〔総角二二七頁〕からも、直接大君との間に「ちぎり」が交わされた訳ではないことが分かる。

一方、「かかる筋にはいますこし心も得ずおほどかにて、何とも聞き入れたまはぬ」〔総角二四七頁〕中の君が、大君の思惑に気付いたのは、薫が既成事実を作ってしまったおうと大君（実際には姉妹）の寝所に忍び込んだ、あの夜の一件であつた。

中納言は、独り臥したまへるを、心しけるにやとうれしくて、心ときめきたまふに、やうやう、あらざりけると見る。いますこしうつくしくらうたげなるけしきはまさりてやとおぼゆ。…逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど、  
ほどもなく明けぬる心地して、いづれと分くべくもあらずなまめかしき御けはひを、人やりならず飽かぬ心地して  
「あひ思せよ。いと心憂くつらき人の御さま、見ならひたまふなよ」など、後瀬を契りて出でたまふ。我ながら、あ  
やしく夢のやうにおぼゆれど、なほつれなき人の御気色、いまたび見はてむの心に思ひのどめつつ、例の、出でて  
臥したまへり。

〔総角二五三〜二五五頁〕

注意すべきは、薫はここで初めて中の君に一方ならぬ恋情を抱き、「後瀬を契」っているという点である。薫と中の君の関係において「契り」という語が使用されるのは、実はこの一箇所にしかない。もしかして、薫の言う「白露のちぎり」は、実はこの「契り」なのではないだろうか。つまり、大君によって互いが恋の相手として認識させられたこの一件、そし

てそこで交わされた「契り」こそが、薫が中の君に訴えかけた「白露のちぎり」ではなかったか、ということである。

さらに下の句「朝顔の花」にも目を向けてみよう。薫が中の君に朝顔を差し出した直接の動機は何だったのか。本文を再掲する。

折りたまへる花を、扇にうち置きて見ゐたまへるに、やうやう赤みもて行くもなかなか色いろのあはびをかしく見ゆれば、やをらさし入れて…。

波線部に注目すると、薫の視線は漠然と朝顔に向けられているのではなく、赤みを帯びてゆく様子にこそ注がれているということが分かる。そしてそれは、はかなさよりもむしろ「をかしく」の内に捉えられているのであった。朝顔の花の色については、例えば万葉集に次のような歌がある(注7)。

i 臥ふいまろび恋ひは死ぬともいちしろく色いろには出でじ朝顔が花

【万葉集 卷十】

ii 言に出でて言はばゆゆしみ朝顔のほには咲き出ぬ恋もするかも

【万葉集 卷十】

i は「恋に焦がれて死んだとしても、決して著しく色に出すまいよ、朝顔の花のようには」、ii は「言葉に出して言うのは憚られる。朝顔のようにには目立たない恋をすることだ」の意。『古今和歌六帖』には「人しれぬ」の項にこの歌が収載されており、原岡文子は、この歌に「秘められた恋のイメージを朝顔に結ぶ(注8)」ことができると指摘している。

しかしそれは逆に、朝顔の花の色は秘められていた筈の恋を露呈してしまう危うさを持つていとも言えるのではないだろうか。しおらしくはかなげな花、しかし枯れる瞬間、その存在を誇示しようとするように色づく、その赤い色の鮮明さ、艶やかなイメージが、この歌の根底にはあるのである。そしてそれは、朝顔が多く「女の朝の顔」と重ね合わされることも決して無縁ではないだろう(注9)。

薫の歌自身には色づいた朝顔は詠み込まれていない。しかし大君を喩えた「白露」の「白」は、まさに「赤」く移ろう朝顔との対比であり、それは「赤い朝顔」を詠み込んでいるのに等しい。朝顔は、女の朝の顔——一夜を共に過ごした、あの中の君の顔(姿)なのである。

そもそも薫の中の君への未練は、今までも直接的に間接的に、幾度となく語られてきたのであった(注10)。しかし今回は状況が違う。匂宮は今、当代一の権勢家である夕霧右大臣家に奪われようとしているのである。

花心におはする宮なれば、あはれとは思すとも、いまめかしき方にならず御心移ろひなんかし、女方も、いとしたりたかなるわたりにて、ゆるびなくきこえまつはしたまはば、月ごころも、さもならひたまはで、待つ夜多く過ぐしたまはんこそ、あはれなるべけれ……。

〔宿木三八六〜三八七頁〕

「花心におはする宮」とは匂宮のことであるが、薫がここで匂宮を好色人と断定する根拠は、実は乏しいということ、既に指摘されている(注11)。「花心」は薫の主観であり、そう捉えたい願望の表れであろう。波線部「かならず……」、「いとしたりたかなる……」、「すぐしたまはんこそ……」と、強調を重ねることによって推論を重ねていく薫の思惟の

ありようは、中の君の悲劇、さらには夫婦の危機という結論、確信へと結びつき、薫の欲望をさらに掻き立ててゆく。句宮から中の君を奪うのではない。中の君の幸せを奪うのではない。句宮にうち捨てられた中の君を手に入れるのだ——赤く移ろう朝顔の花にあの夜の一件を託した薫の歌は、その肥大化する欲望そのままに、強く恋情を訴えかけるものとなっているのである(注12)。

### 三 中の君の答歌

こうした薫の贈歌に中の君はどのように答えたのか。歌意は「露が消えぬ間に枯れてしまった花のようににはかない姉君でしたが、後に残された露のような私は、なおいつそうはかない身の上です」である。

薫が中の君を「朝顔の花」に喩えて恋情を訴えたのに対し、中の君はそれを「枯れぬる花」と退け、さらにそれよりはない我が身は「露」のようだとい慨嘆している。薫の贈歌とは言葉自体にも内容的にもほとんど共通性が見い出せないことから、答歌というよりはむしろ独詠歌に近いものとまずは言うことができよう。先行研究も「薫の贈歌をうまく切り返した歌」という見解で概ね一致しているように思われる(注13)。

確かに中の君の立場からすれば、安易に薫の恋情に応える訳にはいかない。しかし、だからといって返歌をしないのでは都合が悪い。そこでこのような歌になったのだという理解が、一見妥当のように思われる。しかし「(露の)消えぬまに、枯れぬる花のはかなさに、おくるる露は、なほぞ(はかなさ)まされる」と、言葉を補ってやらねば訳せぬ程、この歌

は歪んだ構造をしているのであり、それは中の君の屈折した想いをそのまま反映しているのだと言えるのではないだろうか。まず上の句「消えぬ間に枯れぬる」であるが、周知の通り、ここには大君臨終の場面、

見るままにももの枯れゆくやうにて、消えはてたまひぬるはいみじきわざかな。

〔総角三二八頁〕

が重ね合わされている。中の君は、枯れゆく花に大君の死を想起している。それは大君の死の追認行為と言うことができようか。そしてさらに注目されるのは「露」という語である。

こゝろはらびてしももてなさぬに、露を落さで持たまへりけるよとをかく見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば、

消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくる露はなほぞまされる何にかかれる」といと忍びて……。

二重傍線部は、それぞれ「露を落とさないで」、「(露を)置いたまま」、「(露が)消えない間に」、「後れてしまった露は」、「(露は)何に寄りかかったらいいのか」という意である。ここからは中の君が「露」に、より関心を向けていることが理解できよう。中の君は、朝顔よりもはかない筈の「露」が消え残っている現実——意外性に共感しているのである(注14)。

本来寄りかかるべき「花」が枯れ、「露」だけが残っているという現実は、自らを「はかばかしくもあらぬ身」〔総角二四五頁〕と位置づける中の君の生にそのまま重なるものである。中の君のこうした「存在の不安」は、物語の始発から繰り返し詠歌中に見られるものであった。

泣く泣くもはねうち着する君なくはわれぞ巢守になるべかりける

〔橋姫一一三頁〕

絶えせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき

〔総角二八四頁〕

来し方を思ひいづるもはかなきを行く末かけてなにしたのむらん

〔総角三三七頁〕

「泣く泣くも……」は、八の宮家が宇治に隠棲する前の、親子による唱和である。既にこの時点で中の君は自分が他者に縋つて生きる他ない存在であることを実感している。橋姫巻で、母親に「ただ、この君をば形見に見たまひて、あはれと思せ」「橋姫一一九頁」と遺言された八の宮は「この君をいとしもかなしうしたてまつりたまふ」「橋姫一一九頁」と中の君を愛育した。そして大君もまた、死の間際「このとまりたまはむ人を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに……これのみなむ恨めしきふしにてとまりぬべうおばえはべる」「総角三二七頁」と薫に託し(注15)、現在は薫の後見と匂宮の庇護を受けてある身である。多くの愛情を受け、大切に養育されたという点で、中の君は確かに正編のヒロインの系譜に位置づけることができよう(注16)。しかし生かされている自分を自覚し、生き抜いていく術を模索し続けるところに、中の君の生に対する姿勢、即ち中の君の独自性が見い出せるのではないか。

中の君は今回の件に関して「何かは、かひなきものから、かかる気色をも見えたてまつらんと忍びかへして、聞きも入れぬさまにて過ぐしたまふ」「宿木三八四〜三八五頁」と、その不安感を夫匂宮にさえ見せようとはしていない。それは、匂宮との関係の持続を願う行為であると同時に(注17)、中の君の誇り高さの表れとも言えるだろう(注18)。しかしそんな中の君が、我が身の愁いを繰り返し歌に詠み込んでいる点、また「何にかかれる」という呟きを他ならぬ薫に向けている点を鑑みる時、世の無常を憂うる詠歌という体裁の向こう側には、庇護者たる薫への媚態が透き見えてくるのである。

#### 四 おわりに

激しい恋情を訴える薫、そんな薫に自分は「朝顔」ではないと拒みつつも、媚態を見せる中の君——二人の間に交わされた朝顔をめぐる贈答は、その後の両者の接近、添い臥し事件を必然化するものとしてここに存在する。しかしこの歌は、ただそれだけの理由でここに据えられているのだろうか。

宿木巻に見える花の喩は、実は朝顔だけではない。

〔A〕(帝)「まづ、今日は、この花一枝ゆるす」とのたまはすれば、(※薫ハ)御答へ聞こえさせで、下りておもしろき枝を折りて参りたまへり。

世のつねの垣根にほふ花ならば心のままに折りて見ましを  
と奏したまへる、用意あさからず見ゆ。

霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるかな

とのたまはす。

〔宿木三七九頁〕

〔B〕(落葉の宮は)さかしらはかたはらいたさに、(返歌を)そそのかしはべれど、(六の君は)いとなやましげにてなむ。

女郎花しをれぞまざる朝露のいかにおきけるなこりなるらん」

あてやかにをかしく書きたまへり。

〔宿木四一〇〜四一一頁〕



Aは宿木巻冒頭、薫が今上帝から女二の宮との縁談を持ちかけられた場面、Bは匂宮と六の君の結婚一日目の後朝の文の返歌（継母落葉の宮の代筆）である。帝は女二の宮を「菊」に、落葉の宮は六の君を「女郎花」にそれぞれ喩えている。薫と中の君の「朝顔」の贈答歌は、ちょうどその間に位置する。

宮中の「菊」、三条宮の「朝顔」、そして六条院の「女郎花」——これらに共通して言えるのは、それぞれ喩えた側が権力と大きく結びついた人物であるということである。男たちの野望と欲望が交錯する中で、女たちは何ら言葉を発することなく「道具」として花の喩に絡め取られている。しかもその花々は、かつて夕霧によって紫の上が「春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたる」「野分二六五頁」、また玉鬘が「八重山吹の咲き乱れたる盛りに露かかれる夕映え」「野分二八〇頁」と喩えられたような華やぎを持たない。

このことは、物語がそうした美しい花々の競演を切り捨てていこうとしていることの表れではないだろうか。女たちは、男達の権力闘争の中で辛うじて「のこり」、しかし「しをれ」「枯れ」てゆく存在である。

宿木巻が語ろうとするもの、それは花（女であること）の象徴とも言えよう（の喩であること）の拒否——女性性に絡め取られていくという生のあり方そのものの否定——に発するものではなかったかとも思われる。物語は、中の君が、花は「枯れた」として自らの生のあり方を模索していく姿を丹念に描いていこうとしている。そしてそれは勿論、浮舟へと継承されていく問題でもあるのである。

(1) 池田和臣「浮舟登場の方法をめぐる——源氏物語による源氏物語取——」(『國語と國文學』東京大学国語国文学会 一九七七年)など。

(2) 中の君が「物語」の中心にあつて活躍するのは、総角卷末の大君の死以降である。しかし、次卷の早蕨卷での上京、続く宿木巻での結婚生活、苦惱、男子出産の後には早くも浮舟が登場している。中の君の人物像が最も深められているのが宿木巻であるといえよう。

(3) 「宇治十帖」の中でも、とりわけ目立たない存在である中の君が注目されるようになったのは、一九六〇年代半ばに入つてからのことである。その先駆ともいえる藤村潔は、その論の中で「中の君の結婚生活は、大君の世界のだめ押しとして描かれたのである」(『源氏物語の構造』桜楓社 一九六六年)と述べる。こうした消極的評価は他に、千原美沙子氏(一九七一年)、中野幸一(一九七一年)、重松信弘(一九八二年)、倉又幸良(一九八五年)、木村正中(一九八七年)、武谷恵美子(一九八九年)の論などに見える。勿論これに反発するものや構造論の立場から中の君を積極的に評価しようとする論も少なくないが、近年はどちらかというところとしてよりも「宇治十帖」という大きな物語の流れの中で、人物を相対的に捉えようとする動きが主流であるといえよう。

(4) 『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(5) 総角三九四頁。この他、例えば玉上琢弥の『源氏物語評釈』には「それにつけても薫は、まず姫宮のことが思い出されて悲しい

のである」とあり、一方原岡文子は「歌語と心象風景——朝顔」の花をめぐる（『國文學 第三十七卷四号』學燈社 一九九二年）において「大君ゆかりの女君として、今はその人への募る思いを抱えながら、同時に姉大君その人を共に追慕し得る人として、薫は誰よりも中の君を選ばずにはいられない。……こうした大君追懐の場面の「朝顔」の取り込みは、もとよりなまめかしい魅力に溢れる「女郎花をば見過ぎて」立ち去る、道心の人薫の、無常の花への思い入れを語るものに他ならない」と述べている。

(6) 勿論、新編全集頭注や玉上評釈、原岡論文が薫の中の君への恋情をまったく読み取っていないと言っている訳ではない。むしろ本稿は「朝顔」を積極的に恋の手段として薫が利用しようとしている点を重視したのである。この点については既に、小町谷照彦「薫は中君に対する執着をますます強め、そこに何らかの変貌が窺われるように思われる。中君の訪問に先立って独詠「けさのまの」を朝顔の露によせてもらしているが、それは人生を無常と認めてなおかつ刹那的な情念に身をゆだねて行く」とする現実把握である。そして、中君へのかなり大胆な愛情の告白の贈答「よそへぞ」「消えぬまに」にとつながっている（『源氏物語の和歌——物語の方法としての役割——』（『国文学解釈と鑑賞——特集古典文学の分析批評——』至文堂 一九六七年）、越野優子「大君への思いに中の君への思いを重ねたこの歌の「朝顔」には、単なる無常だけではない異性即ち中の君を求める好色な思いが託されている」（「喩としての朝顔——源氏物語の朝顔の姫君を中心に」（『中古文学第五十九号』一九九七年）等に指摘がある。本論文は、これをさらに具体的に、本文との絡みの中で実証しているようにするものである。

(7) 引用本文は、新編全集本『万葉集3』に拠る。

(8) 前掲原岡論文を参照。

(9) 『和歌植物表現辞典』（平田喜信・身崎壽 東京堂出版 一九九四年）、『王朝語辞典』（秋山虔編 東京大学出版会 一九

九九年)、『歌ことば歌枕大辞典』(久保田淳・馬場あき子編 角川書店 一九九九年)など。

(10) 例えば、上京を直前に控えた中の君に「袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿や」となる[「早蕨巻三五七頁」と、後悔を滲ませた歌を贈っている。

(11) 甲斐陸朗「源氏物語の人物把握の一方法―匂宮の人間像を中心に」(中古文学 一九七一年)、榎本正純「総角巻 匂宮と中の君」(『講座源氏物語の世界 第八集』有斐閣 一九八三年)、伊井春樹「匂宮の変貌―「幸人」中君との関連を中心に―」(『源氏物語作中人物論集』森一郎編 勉誠社 一九九三年)など。榎本はさらに「……もはや物語の世界を開示してゆくかつての源氏のような人物は見出し得ない。あるのは、“花心”と“聖心”を相互に批判し邪推しあつたり、あるいは“世評”という窓を通しての偏った解釈を提示する人物たちである。いうまでもなく作中世界の“諸事実”はある角度―例えば作中人物や語り手を通して提示される。したがって、同一対象に対しても異なった解釈がなされたり、その人物のくだす解釈が妥当でないことも起こり得る(宇治十帖では、人物の偏った主観的解釈を作者は意図的に活用する)。」と述べている。

(12) 実はこの直前に、様々の物思いに眠れぬ夜を明かした薫が、弱々しく這いまつわる朝顔の花に目を留め、独り「今朝のまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見る はかな」[「宿木三九一頁」と詠じる場面があるのだが、この独詠歌は中の君の答歌に大変似通っている。このことは、薫が元々二条院を訪れた目的――「朝顔」に象徴される「世のはかなさ」を中の君と共有したいという思いを、中の君を前にして恋情に変容させてしまったこと――薫の贈歌の異常性(≡恋情の愁訴)を暴き立てるものとなっている。一方松井健児も、その論「薫独詠歌の詠出背景」(『源氏物語の生活世界』平成十二 翰林書房)の中で、薫の心情が歌という形式を取ると、恋愛譚の形式に取り込まれてしまうという興味深い見解を示している。

(13) 新編全集頭注一四「三九五頁」、今井上氏「源氏物語『宿木論』論」(『國語と國文學』東京大学国語国文学会 二〇〇一

年)など。

(14) 朝顔と露のどちらがより儂いかということについては、実はどちらとも言えない。しかし中の君の歌意「朝顔に置く筈の露の方が残ってしまった」から考えると、朝顔の方がよりはかかないと捉えていると考えるべきであろう。

(15) 大君の薫への恨み言は、薫に中の君の後見人としての自覚を植えつけるものでもあった。

(16) 藤本勝義「宇治中君造型―古代文学に於けるヒロインの系譜―」(「國語と國文學」東京大学国語国文学会 一九八〇年)。

(17) 新編全集頭注一四「宿木三三八頁」。

(18) 少なくとも上京後の中の君は、例えば朝顔を手に訪れた薫に「いとめやすし」「宿木三九二頁」と言わせる程に女房をよくしつけている。

### 第三章 宇治中の君の孤高性―宿木卷「山里の松」の解釈をめぐって―

#### 一 はじめに

『源氏物語』『宇治十帖』の世界は、薫、匂宮という二人の男主人公と、その執着の対象である宇治八の宮家の大君、中の君、浮舟という三人の姫君を中心に繰り広げられる。しかし、薫との結婚を拒否し続け、自ら死を選び取った大君と、薫と匂宮への愛の狭間で苦しみ抜き、尼になった浮舟という二人の個性的な生き方に対して、匂宮の妻となり、京に迎えられ、世間から「幸ひ人」と称される中の君は、その穏やかな生ゆえに今まで考察の対象となることは少なかった。とりわけ中の君自身の心情を凝縮させた詠歌についての考察は、ほぼ皆無に等しい状態である。

そこで本稿では、中の君の人生を考える上で最も重要と思われる、匂宮と六の君（夕霧右大臣女）の結婚の際に詠まれた中の君の独詠歌一首と、それを中心とした場面を取り上げる。匂宮の、権門の女との結婚は、中の君自身予期していたこととはいえ、匂宮の愛情の衰退を現実たらしめる、それまでの人生の中で最も大きな事件であった。この和歌を含んだ場面に描かれた中の君の姿を丹念に読み解くことで、中の君がどのように造型されているのか、また宇治十帖において中の君がどのような位置にあるのかを考えていきたい。

## 二 独詠歌「山里の松のかけにも」の解釈

中の君の独詠の場面は、その直前に長大な思惟が語られる（本稿第三節を参照）。思惟、すなわち中の君が悲嘆の中でさまざまに思いをめぐらせる場面は、この他にも早蕨巻巻頭に、また匂宮と六の君の婚約の場面に見られるが、それら思惟の後、その思いを声として発するのはこの場面だけである。ここに詠まれた歌は、おそらく中の君が自らを慰めようと苦悶した、その到達点にあるものと考えられる。歌それ自身と、その前後の地の文から、まずはこの歌にどのような意味が込められているのかを確認しておきたい。

おのづからながらへば、など慰めんことを思ふに、さらに姨捨山の月澄みのぼりて、夜更くるままによろづ思ひ乱れたまふ。松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとのかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

山里の松のかけにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

来し方忘れにけるにやあらむ。

〔宿木四〇四頁（注一）〕

匂宮を夕霧に奪い去られた中の君は、自らの心を慰めようと自問自答を繰り返す。そしてわずかながら冷静さを取り戻した時に、初めて十六夜の月が澄みのぼっていることに気づくのであった。しかしその月は『古今集（注二）』の「わが

心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て」(卷一七・雑上・読み人しらず)を想起させ、今の絶望的ともいえる状況を中の君に再認識させる。松風の吹き通つてくる音は、宇治の山おろしに比べれば穏やかで、この二条院は「いとのとどかになつかしくめやすき御住まひ」には違いないものの、しかし今夜はとてもそうは思われぬ。中の君は、その音を少なくともあの山里の椎の葉の葉ずれよりは劣っている、と思うのである。「椎」は、源氏物語の中ではこの場面と、八の宮の死後、薫が八の宮を偲んで詠んだ次の歌に用例があるのみである。

立ち寄りむ蔭とたのみし椎が本むなしき床になりけるかな

〔椎本二二二頁〕

この「椎の葉の音」について田中仁は、その本歌「優婆塞が行ふ山の椎が本あなそばそばし床にしあらねば」(『宇津保物語』(注3)『嵯峨院』等から、「椎の葉の音」は、宇治の暮らしのすべてを一括して表していると解釈しなければならぬ理由はない」とし、その時を「宇治の暮らしの初めから終わりまですべてではなく、そのうちのある特定の時期、はっきり言えば八の宮の生前、その庇護の下に暮らしていた頃」と比定している(注4)。とすると、中の君に現在思い出されているのは、八の宮・大君・中の君の三人の宇治での暮らしということであり、ここでは宇治での暮らしを回想した、その延長としての「山里の」の歌が詠まれているということになる。確かに、一般的にも「山里の松のかげ」は、宇治での侘びしい暮らしを指していると言われている。

しかしここでは、従来の注釈書では指摘されていないが、「松」には「待つ」が掛けられていると考えるべきであろう。田中は、この「松」について、次のように述べる。



もつとも「山里の」の歌の方に、「樵」ではなくとりたてて「松」を用いた理由がある。「集成」が指摘するように、この「歌」は「秋」に「飽き」を響かせてある。しかしそれだけではない。「松」には「待つ」が懸けられてはずである。男女の仲にかかわる歌、しかも閨怨の歌に詠み込まれている「松」に「待つ」が懸けられていないとは考えられない。したがって、「山里の松の蔭」とは「宇治で句宮を待っていた頃」という意味になろう。宇治で暮らしていた頃のうち、八の宮の没後、薫の企みによつて句宮を受け入れてから二条院に移されるまでである。「宇治で暮らしていた頃」の始めから終わりまでではない。その中から句宮を待っていた頃を取り出すために、「松」は用いられたと考えられる。

この当否について、以下に検討を試みることにする。まずは、今までこの歌がどのように解釈されてきたのか、注釈書で確認しておきたい。

〔源氏物語評釈(注5)〕あの宇治の山里の松のかげにも、こんなにまで身にしみる秋風はなかったことだ。

〔新潮古典集成(注6)〕山里の松の木蔭住いでも、これほど身を切られるようにつらい秋風の吹くことはありませんでした。「秋」に「飽き」を響かせる。

〔新古典文学大系(注7)〕宇治の山荘でもこれほど身にしみ秋風は経験したことがなかった。「秋」に「飽き」を掛ける。

〔新編古典文学全集(注8)〕宇治の山里の松の陰の住いにも、これほど身にしみ悲しい秋風の吹くことはなかった。

頭注：宇治の荒涼の自然に対比しながら、秋風の景に絶望的な心を託した歌。

田中の言うように、恋の歌で「松」に「待つ」が掛けられていないとは、本来ならばまず考えられないところである。にもかかわらず、諸注釈があえて無視する理由は、中の君の嘆きをすべて「宇治での暮らし」と一括りに考えるからであらう。つまり、「榎の葉の音」「山里の松のかげ」「来し方」をすべて一括りに「宇治での暮らし」と考えようとする場合、恋人を「待つ」という意味での「松」をここに含めると「山里の松のかげ」の時期が限定されてしまい、歌が地の文である「榎の葉の音」「来し方」と齟齬を来してしまうのである。とは言うものの、ここに「待つ」が掛けられていないとは、やはり考えにくいであらう。

歌に「待つ」の意を読み取る条件として、以下の三点があげられる。

①「山里」とある以上、それは「宇治」でなくてはならず、また「秋の風」とある以上、季節は「秋」に限定されなくてはならない。

②中の君の嘆きは、「山里の松のかげにもかくばかり……」と、現在の「身にしむ」状況と比較されている。おそらく「待つ」状況であったその時期は、現在よりひどくはないものの、同等に近い嘆きとして受け入れられていたはずである。

③この歌には「秋の風」に「飽きの風」が掛けられている。つまり現在は「あの時よりもっと飽きられている」と解釈せねばならず、言い換えれば、その時既に「飽きられていた」という意識があったと考えなければならぬ。

そこでまず、①から見ていくことにしたい。中の君と匂宮の結婚は、今現在（八月一六日）を起点として、昨年（八月

二十八日「総角二六二頁」である。よつて「秋」とはそれ以降、匂宮を待つていた頃を指している。二人の結婚の後、匂宮が宇治を訪問するのは結婚の三日を除いて計三回である。一回目は九月一〇日頃、匂宮が一人では決めかねていた宇治行きを、薫の助言によつて共に訪れるという場面。しかしその時の中の君の様子はほとんど語られず、ただ翌朝匂宮が「中納言の、主方に心のどかなる気色こそうらやましけれ」(総角二八九頁)と言うのを、訝しく思つて聞いていたとあるのみである。二回目は、一〇月一日頃、やはり薫の計画で、今度は宇治に紅葉狩りに行くという場面。しかしこの忍び旅行は、すぐに母明石中宮の知れる所となり、大勢の従者が宇治に差し向けられ、匂宮は身動きが取れず、中の君の元へは立ち寄らずに帰京する。三回目は十一月、大君を失つた中の君の悲しみを思う匂宮が矢も楯もたまらず雪をおして弔問に訪れるという場面。しかしこれは真冬のことであり、秋とは無関係である。このように見ると、計三回の訪問のうち、二回目の紅葉狩りが適當ということになる。

続いて②であるが、この紅葉狩りは十月のことであり、既に冬に入つてゐる。しかし、薫の「紅葉御覽すべく」(総角二九二頁)の大義名分としては、おそらく諸注釈の引く『後撰和歌集(注①)』の「宇治山の紅葉を見ずは長月の過ぎゆくひをも知らずぞあらまし」(巻七・秋下・長月のつごもりの日、紅葉に氷魚をつけておこせて侍りければ・千兼がむすめ)が念頭にあつたと思われる。また「紅葉を葺きたる舟の飾りの錦と見ゆるに」(総角二九三頁)、「紅葉を薄く濃くかざして」(同頁)とことさらに紅葉狩りであることが強調されている点からも、人々はこの季節を冬ではなく秋あるいは秋の終わりと認識してゐたのではないかと考えられる。この紅葉狩りは、匂宮が中の君の元を訪れるべく薫によつて画策されたもので、薫は「論なく中宿したまはむを、さるべきさまに思せ」(総角二九二頁)と食料などの必要な物品、人員までも送り込んで大君・中の君に期待を抱かせたのであつた。しかし結局は、このような軽率な行動が後の世の例となつて

はと危惧する明石中宮の命で、衛門督が大勢の殿上人を引き連れてやって来たため、事が大仰になり、匂宮は姫君たちのもとへは立ち寄ることができず、無念のうちに帰京したのであった。この一行の帰京の様子に中の君は次のような感慨を催している。

数ならぬありさまにては、めでたき御あたりにまじらはむ、かひなきわざかなといと思し知りたまふ。よそにて隔てたる月日は、おぼつかなさもことわりに、さりともなど慰めたまふを、近きほどにのりしりおはして、つれなく過ぎたまふなむ、つらくも口惜しくも思ひ乱れたまふ。

〔総角二九五頁〕

中の君の「数ならぬありさま」という実感は、華々しい匂宮一行を目の当たりにすることで現実のものとなる。人数でもない我が身の上では、貴人と付き合うのも甲斐のないことであつたとつくづく思い知らされた中の君は、眼前の華麗な世界に、それまで辛うじて保っていた誇りさえも打ち碎かれるのである(9)。と同時に、もし遠く離れたまままで月日が経つのであれば、それはそれで諦められようものをと恨めしく残念に感じるのであるが、しかしこの一件は、匂宮が六の君と結婚する直前の場面で、薫に「かの近き寺の鐘の声も聞きわたさまほしくおぼえはべるを、忍びて渡させたまひてんや」「宿木三九七く三九八頁」と依頼するように、宇治帰郷をことさら願う中の君の心情が、実はそのまま匂宮と円満な夫婦関係を持続させたいがためであることと一致する。つまり中の君は、都において気苦労が絶えない辛い毎日を送るよりも、宇治にいれば、たとえ毎日逢えずとも、それはそれでいつまでも期待を持って待ち続けられると考えるのである。この「よそに隔てたる月日は、おぼつかなさもことわりに、さりともなど慰めたまふ」という心情表現は、都

における宇治帰郷の念と同じ発想であるという点で、「紅葉狩り」の場面における中の君の悲嘆の深さが読み取れよう。  
ところで、句宮は帰京の際に人々との唱和の中で次のような歌を詠んでいる。

秋はててさびしさまさる木のもとを吹きなすぐしそ峰の松風

とて、いといたく涙ぐみたまへるを、ほのかに知る人は、げに深く思すなりけり。今日のたよりを過ぐしたまふ心苦しき、と見たてまつる人あれど、ことごとしくひきつづきて、えおはしまし寄らず。  
〔総角二九七頁〕

歌の部分を現代語訳すると、「秋が去つて、ひとしお寂しさがまさってくるこの山里の—あの人の元を—あまり強く吹きすすんでくれるな、峰の松風よ」となる。この歌は、一見紅葉狩りの遊宴の唱和の体裁を取りながら、一方でそれは誰にも語ることでできない心情の告白であり、また形は唱和ではあるものの、独詠の要素を多分に含んでいる。「秋」「松」「風」と、中の君の歌との共通点も多く、時間、場所ともに違うが、中の着まいの独詠歌と並べてみるなら、あたかも贈答であるかのような感は否めまい。この歌が、中の君の元に届いていたかはともかく、むしろここでは、「峰(を渡る)松風」がこの時の印象的な一風景として語られていることに注目したい。つまり、句宮は、同じ宇治の、故人の宮邸のすぐ近くにあつて、中の君を想い、おそらく今自分のいるところ同様に吹きすすんでいであろう「松風」に呼びかけているのである。悲嘆に沈む中の君にとつても、この吹き渡る「松風」は、その心象風景そのままに、やはり印象的な一風景として心に残つたに違いない。したがつてこの「松風」には、あの「山里の松のかげ」が重ね合わされている可能性が高いであらう。

最後に③であるが、結論から言えば、中の君が「飽きられている」という思い、不安は絶えずあつたと思われる。しかしそれはきわめて主観的であり、その実態とは必ずしも一致しない。句宮の愛情を疑いながら、否、そんなことはない  
と否定する、その揺れる心情は、宇治在住時に限らず様々な場面で見ることが出来る。

(句宮は)「思ひながらのとだえあらむを、いかなることにかと思すな。夢にてもおろかならむに……」といと深く  
聞こえたまへど、(中の君は)絶え間あるべく思さるらむは、音に聞きし御心のほどしるきにやと心おかれて、わが  
御ありさまから、さまざまもの嘆かしくてなむありける。

〔総角二八一〜二八二頁〕

結婚三日目の夜、幾度も夜離れの我からではないことを訴える句宮に対して、そこまで言うのは噂に聞く浮気性の  
せいではないかと疑う場面である。後には信じて待ち続けようと心情が変化するものの、しかしその愛情を信じ切るこ  
とのできない中の君は、既に結婚の時点で見られるものである。中の君の句宮への愛情の根底には、絶えず顧みられな  
くなることへの不安があるのである。したがって、「山里の松のかげにもかくばかり」とは、飽きられていると感じつつも信  
じようとして信じていることができた、あの「秋」の日が重ね合わされていると見ることができよう。

今をときめく今上帝第三皇子と零落した官家の身寄りのない姫君。厳しい現実の中で、二人の仲を唯一つなぎ止め  
るものは句宮の愛情でしかないことを、中の君は理解している。紅葉狩りの一件は、句宮との関係の中で最初に直面し  
た現実であり、中の君の不安を現実たらしめる大きな事件だったのである。

結論としては、田中の言うように、中の君の独詠歌「山里の松のかげにも」の「松」には「待つ」が掛けられており、それ

は同時に宇治の山里で匂宮を待つていた頃ということが出来るであろう。そしてさらに限定するなら、それはあの紅葉狩りの一件のことを指しているのである。よつてこの歌は、次のように解釈されることになる。

山里の松のかげで、あの人を待つていたあの時でさえ、こんなに身にしみて辛い秋の風は吹いてこなかった。(紅葉狩りの際につれなく帰つてしまわれたあの時も、飽きられているのかとは薄々思いながらも、それでも信じて待つことができたのだ。しかし今夜の風は本当に飽きられたのだと実感させられて、あの時よりもずっと身に染みて、辛く感じられる秋の風であることよ。)

### 三 中の君の孤独を照射するもの

振り返つてみれば、この紅葉狩りの一件は、中の君にとつてだけではなく、大君にとつても、ひいては物語にとつても一つの転機となる大きな事件であつた。すなわち、訪問が中止されたことで大君は(その落胆ゆえに)薫、匂宮への不信をますます強め、男性不信の念をいつそう強固にし、死へと至る直接の原因となつたのである。中の君が匂宮を待つていた時間とは、そのまま大君の体調不良、病状の悪化とも相まつて、想像を絶する悲しみと苦しみ、そして孤独の間でもあつたはずである。

さて、この独詠歌「山里の松のかげにも」が紅葉狩りの一件を指していると考えた場合、その前の地の文はどのような

解釈されるべきであろうか。

「椎」の用例は、前述したように『源氏物語』中にはこの歌を含めて二首あるのみである。いま一首は、薫の「立ち寄りむ蔭とたのみし椎が本むなしき床になりにけるかな」（本稿第二節を参照）であるが、ここでの「椎」は八の宮自身を指しており、最初に掲げた場面で思い起こされているのもまた八の宮邸と見て間違いないであろう。そしてこの「椎の葉の音」に比定されるのが「松風の吹き来る音」なのであった。

「松風の吹き来る音」は、直接的には、「いとのだかにめやすき御住まひ」つまり二条院を指している。従来の注釈書では、「まだ宇治の邸のほうが良かったです」と否定的に解釈するものが多いが、それは中の君の嘆きの果てに両者（宇治八の宮邸と二条院）が比較されていると理解しているからであろう。しかし、二条院はたしかに「いとのだかにめやすき御住まひ」と中の君には映っているのであって、彼女はたしかに二条院での暮らしを結構なものと感じているのである。ここは「二条院よりもまだ宇治の邸の方がいい」のではなく、「二条院もいけれど、でも今夜は宇治の邸の方がいい」と肯定的に解釈されるべきであろう。つまり中の君は、現在と過去の一苦労しかった時期と比較することで、その苦しみを相殺しようとする懸命に試みているのである。「椎の葉の音」とは、「紅葉狩り」の一件を含め、それ以来二条院に転居するまで、宇治で独り匂宮を待ち続けていた頃を指していると考えられる。

ところで、このように嘆きの淵に沈む中の君に対し、語り手は「来し方忘れにけるにやあらむ」と訝しむ。しかし、「過去のごとは忘れてしまったのでしょうか」というこの表現には疑問を抱かざるを得ない。なぜなら、地の文と歌に凝縮された心情は今まで見てきた通り、その過去と密接に関わっているからである。またこのことは、その前に連綿と語られていた長大な思惟によっても明らかである。



幼きほどより、心細くあはれなる身どもにて、世の中を思ひとどめたるさまにもおはせざりし人ひとこゝろを頼みきこえさせて、さる山里に年経しかど、いつとなくつれづれにすこくありながら、いとかく心にしみて世をうきものとも思はざりしに、うちつづきあさましき御事どもを思ひしほどは、世にまたとまりて片時経べくもおぼえず、恋しく悲しきことのたぐひあらじと思ひしを、命長くて今までもながらふれば、人の思ひたりしほどよりは、人にもなるやうなるありさまを、長かるべきこととは思はねど、見るかぎりには憎げなき御心ばえもてなしなるにやうやう思ふこと薄らぎてありつるを、このふしの身のうさ、はた、言はん方なく、限りとおぼゆるわざなりけり、ひたすら世に亡くなりたまひにし人々よりは、さりとも、これは、時々もなかはとも思ふべきを、今宵かく見棄てて出でたまふつらさ、来し方行く先みなかき乱り、心細くいみじきが、わが心ながら思ひやる方なく心憂くもあるかな、おのづからながらへば、など慰めんことを思ふに……。

〔宿木四〇三〜四〇四頁〕

傍線部が宇治での暮らしを回想している部分である。「幼きほどより」と、中の君はまず自らの幼い時分を思い出す。続いて、父宮と姉君の死を思い、その悲しみを現状と比較する。つまり中の君は、自らの不幸な人生経験を振り返ることで現在の悲しみを相対化し、その心を慰めようとするのである。最初にも述べたが、このような自問自答を繰り返す中で、中の君は少しずつ落ち着きを取り戻していったのである。「姨捨山の月」も、「松風の吹き来る音」も、そうした冷静さの中に、やつと取り戻した感覚であり、それゆえにまたいつそう荒涼とした心象風景を照らし出すものであったといえよう(注10)。しかし、やはりここには語り手の言う「来し方忘れにける」中の君の姿は見えない。むしろ、過去を総括することで、現在の苦境に懸命に対処しようとする健気さだけが際立ってくるのである。「過去のこととは忘れてしま

つたのでしょうか……」この問いはむしろ、読者である我々に向けて発せられた言葉である。そしてそれは、おそろく「中の君は決して過去を忘れてははいない」ということについての注意を我々に喚起することで、それに続く女房の言葉に注意を促してゐるのである。

老人どもなど、「今は入らせたまひね。月見るは忌みはべるものを。あさましく、はかなき御くだものをだに御覽じ入れねば、いかにならせたまはん。あな見苦しや。ゆゆしう思ひ出でらるる」ともはべるを、いとこそわりなく」とうち嘆きて、「いでこの御事よ。さりとて、かうて、おろかにはよもなりはてさせたまはじ。さ言へど、もとの心ざし深く思ひそめつる仲は、なごりなからぬものぞ」など言ひあへるも……。

〔宿木四〇四〜四〇五頁〕

眼前の月にさえ慰められず、むしろいつそう悲嘆を深めてゆく中の君に対して、無遠慮に思うままを述べ立てる女房たちは、中の君の心情をまったく理解していない。また、懐妊に加えてこの度の一件で食の進まない中の君に、食を断つようにして亡くなった姉・大君を「ゆゆしう思ひ出でらるること」と引き合いに出し、「いとこそわりなく」と嘆息を漏らす。同じ「来し方」を共有し、さらには中の君以上に主人として崇めてきたであろう大君を「ゆゆし」と忌む女房たちは、懐かしく、慕わしく大君を思い起こしている中の君の反発をいよいよ強めていく。また、この一件を同情的に話し合う女房の声も、中の君にはやはり煩わしい。周囲の声にますます拒絶の度を深めていく中の君に、語り手は「こでもう一度、「我ひとり恨みきこえんとにやあらむ」「宿木四〇五頁」と推量する。この語り口は、「来し方忘れにけるにやあらむ」と同様に、私に構わないで欲しいという悲痛なまでの中の君の叫びを浮き彫りにしている。女房たちの現実的な

声は、それに取り囲まれるようにしてある中の君の孤独を、よりいっそう強めるものとして機能しているのである。

ところで、本稿で取り上げてきた独詠の場面は、今まで見てきたように、中の君の独詠歌を中心に据えて、その嘆きと孤独な内面を執拗なまでに描き出している。女房たちは、中の君と同じ「来し方」を共有しながら、しかしそれを否定することでこの現実を生き抜こうとする。一方中の君自身は、「来し方」を肯定することでこの現実を生き抜こうとするのである。この対照的な両者の「来し方」は、共有されているように実は共有されていないという、各々の隔絶した心情を鮮明に描き出している。そしてそれは、この場面に点描される「月」にも同様のことが言えるのである。

i (夕霧) 十六夜の月やうやうさし上がるまで心もとなければ、(句宮の)いとしも御心入らぬことにて……。

〔宿木四〇一頁〕

ii (夕霧) 大空の月だにやどるわが宿に待つ宵すぎて見えぬ君かな。

〔宿木四〇二頁〕

iii (句宮が中の君に対して) よろづに契り慰めて、もろともに月をながめておはするほどなりけり。

〔宿木四〇二頁〕

iv (句宮) 「いま、いととく参り来ん。ひとり月な見たまひそ。心そらなればいと心苦し」と聞こえおきたまひて……。

〔宿木四〇二頁〕

v (中の君) おのづからながらへば、など慰めんことを思ふに、さらに姨捨山の月澄みのぼりて……。

〔宿木四〇四頁〕

vi (女房) 今は入らせたまひね。月見るは忌みはべるものを。

〔宿木四〇四頁〕

結婚当夜、六条院方では、匂宮の来訪を今か今かと待ちこがれている(i)。夕霧は十六夜の月がのぼってくるのも忌々しく、とうとう息子の頭中将を匂宮のもとに遣わし、苦言を述べるのであった(ii)。一方、中の君とともに二条院で月を眺めていた匂宮(iii)は、それもまた不憫と思い、「ひとり月な見たまひそ」(iv)との言葉を残して六条院に赴く。一人残された中の君はその月が「姨捨山の月」にも見え(v)一人嘆きに沈む。それを女房たちが月は忌むものと咎め立てするのであった(vi)。

ここでは十六夜は、単に時間の経過を表すだけではなく、見る者の思惑をさまざまに抱え込んだものとして描かれている。つまり、この月はそれを忌々しく見上げる夕霧と、あるいは忌むものとして感じている匂宮や老女房の姿を、俗世間の象徴として描き出しているのである。一方、そんな現実を文字通り照らし出す月に対して悲嘆に沈む中の君の見るそれは「姨捨」の孤独な月である。ここに描かれた月は、中の君の孤独をより鮮明に照らし出すものとしてここに据えられているのである。

#### 四 おわりに

中の君自身の独詠歌、女房たち、語り手、月等を通して描かれたのは、中の君の切実な嘆き、孤独であった。そしてそれは一方で、中の君が厳しい現実と対峙しているこうとする孤高な姿を映し出している。否、少なくとも物語はそうした中の君の姿を描き出そうとしているのである。

大君は薫を拒み続け、死を選んだ。新編全集は、大君のそうした姿を「頑なまでの孤高の姿」「総角二五六頁頭注」と評している。しかし大君とはまた違った意味で、ここに描かれた中の君の姿も孤高と呼ぶのにふさわしいであろう。大君とはまた違った壮絶な生き様がここには描かれているのである。

中の君は、孤高な死ではなく、俗世において生き続けるという道を選んだ。それは一見相反する生き方のように見えるが、しかしここに描かれた孤高な精神は、明らかに大君のそれを受け継いでいる。つまり中の君は、大君と本質的に同じ主題を担わされ、物語を生き抜く存在なのである。

## 注

(1) 『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(2) 引用本文は、『古今和歌集全評釈(下)』(竹岡政夫著 右文書院 一九七六年一月)に拠る。掛詞等の指摘についても、同書に拠る。

(3) 新編全集『うつほ物語①』(中野幸一校注・訳 一九九九年六月)。

(4) 田中仁「椎の葉の音―『源氏物語』宿木巻―」(『國語國文 第五九卷第一〇号―六七四号―』京都大学国語国文学研究室 一九九〇年)。

(5) 『源氏物語評釈』第一卷(玉上琢弥著 角川書店 一九六七年一月)。

(6) 新潮日本古典集成『源氏物語六』(石田穰二・清水好子校注 新潮社 一九八二年五月)。

(7) 新日本古典文学大系『源氏物語五』柳井滋 室伏信助 大朝雄二 鈴木日出男 藤井貞和 今西祐一郎校注 岩波書店  
一九九七年三月)。

(8) 新大系『後撰和歌集』(片桐洋一校注 一九九〇年四月)。

(9) 新編全集『源氏物語⑤』二九四頁頭注一六

(10) 新編全集『源氏物語⑤』四〇四頁頭注六には、「宇治の荒涼の自然に対比しながら、秋風の景に絶望的な心を託した歌」とある。

第四部 宇治中の君を取り巻く人々

# 第一章 「幸い人」の系譜―宇治中の君の可能性―

宇治中の君『源氏物語』の「幸ひ人」論について、極力多くの論文（先行研究）を掲げ、同時に今後の「幸ひ人」論の可能性を模索するというのが本章の目的である。

## 一 『源氏物語』の「幸ひ人」

『源氏物語』の「幸ひ人」でまず想起されるのは、原岡文子の一連の論考であろう（注<sup>1</sup>）。「幸ひ人」は、辞書では「運のよい人。幸せな人。特に、高貴な人の寵愛を一身に受けている女性」（小学館 古語大辞典）と定義されているが（注<sup>2</sup>）、原岡は『源氏物語』における「幸ひ人」には、この範疇におさまりきらない「ある騷り」が透き見える、という。しばし耳を傾けてみたい（注<sup>3</sup>）。

源氏物語の「幸ひ人」は全八例。内訳は、明石の君、明石の尼君、紫の上、浮舟（各一例）、中の君（二例）、一般論（男女各一例）である。一見ただけでも用例は女君に集中していることが分かる。しかも、葵の上や女三の宮など、然るべき身分を背景に光源氏の正妻として導入された人物に対してこの語が使用されることはない。むしろ、明石の君や紫の上、中の君など「本来そうなるはずがない」女君の希有な生の状態をあらわすものとして用いられている。こうした点



から『源氏物語』における「幸ひ」とは、幸福と置き換えられるよりは、幸運と置き換えられるのにふさわしい。

「幸ひ」「幸ひ人」をめぐる翳りとは、外側の目が意外な幸運と捉えるものと、危うい幸運を支える「幸ひ人」の内実との乖離に関わっている。「幸ひ人」の苦悩・憂愁は明石の君・紫の上そして中の君へと引き継がれていくが、しかし中の君のそれは、先の二人以上に深められることはない。ゆえに中の君は正編の二人の女君の「二番煎じ」(注4)とも断じられてきたのであった。

「二番煎じ」に終わらない中の君の物語の新しさとは何か。その鍵は、中の君をめぐる「語り」の方法にあるのではない。語り手は、妻の座の定位に関わる懐妊の辺りから、今までとはうって変わって皮肉な、批判的なまなざしを投げかけ始める。また女房たちも、薫の思慕と匂宮の猜疑、そしてその間で煩悶する中の君を「幸ひ人」と呼ぶ——。何か一つでも狂えばすべてが崩れ出す危うさの上に辛うじて成り立つもの、それが「幸ひ」であり、「幸ひ人」とは、幸運とか幸福とかそれ自体に担わされた脆さ危うさの陰で、幸運や幸福を支える血の滲む努力を重ねる、幸福で不幸な存在に違いない。

浮舟の物語は、このような「幸ひ」をめぐる叙述の道筋を経て、はじめて描かれ得る新しい主題を担っている。幾多の構想の挫折の果てに置かれたのもあろう「幸ひ人」中の君の物語は、重い必然性をもってその道筋に位置づけられているのである。

原岡の論は、『源氏物語』の「幸ひ人」を論じる際には、まず引用されるのであるが(注5)、しかし昭和五十年代後半に執筆されたこれらの論が「幸ひ人」研究の嚆矢ではもちろんない。次節では、「幸ひ人」の研究史について概観する。

## 二 「幸ひ人」の研究史

「幸ひ人」の研究史については、既に工藤重矩に詳細な論がある(注6)。ここでは先学に導かれつつ、冒頭に記したように『源氏物語』における「幸ひ」「幸ひ人」論を極力擲い上げ、私にまとめてみたいと思う。

『源氏物語』の「幸ひ人」について言及した早い例に、阿部秋生「明石の君の物語の構造」(『源氏物語研究序説』一九五九年 東京大学出版会)がある。阿部は、平安期の女性と明石の君を絡めて論じ、「幸ひ人」を「この人々の経て来た生活を全く無視して、撰閲家の子息・子女の母となつたといふことだけを捉へていふことである。その女性が、撰閲家において、どういふ地位を与へられてゐたのかを全く問題にしてゐない無責任な言葉であつただが、それが当時の社会に共通してゐた物のいひ方であることに変わりはなかつた」、さらに「その当人達は苦しんだり、泣いたりしてゐる事実がいくらかもあるのだ」と、外面(世評)と内面(当人の苦悩)の乖離を指摘した。工藤は、原岡の論がこの延長線上に位置するものであり(注7)、一方で日向一雅や伊庭美代子、木村正中らの論(注8)が、「幸ひ人」という言葉の持つ意味合い——当代の人々の「玉の輿」に対する厳しい視線(羨望と軽蔑のまなざし)——を欠落させてしまつてゐることを指摘する。工藤の指摘は確かに重要である。しかし「幸ひ人」論の多くは、そうした「世間の視線の厳しさ」よりも、それを受け止める側に着目したものであり、今後も「幸ひ人」は、そう呼称される女主人公たちの苦悩と密接に関わりながら、構想論や方法論(注9)、人物論(注10)など様々な視点で論じられていくことであらう。

### 三 宇治中の君の可能性

最後に、中の君の「幸ひ人」論の可能性について触れておきたい。第一節で掲げた原岡論文が、その冒頭に『源氏物語』固有の幸い人の構造を最もよく語るものとして中の君の物語を読み解きたい」と記しているように、「幸ひ人」論の中で最も多く取り上げられてきたのが中の君であった。たった二例しかない「幸ひ人」をめぐって多くの論が展開されてきた背景には、宇治の女主人公としては異質な存在である「幸ひ人」Ⅱ中の君の存在意義がまだ説明されていないということがあるだろう。原岡の論は、そうした疑問に一つの解答を与えた形になるのだが、では本当に新しい読みの可能性は残されていないのだろうか。

例えば、宿木巻で「(匂宮に)二心おはしますはつらけれど、…なほわが御前(中の君)をば幸ひ人とこそ申さめ」と、無遠慮に主人を批評する老女房たちの声に、若女房たちが「あななまや」と嫌悪感を抱き、それを制する場面。ここには中の君の生き方を「幸ひ」と結論づけようとする老女房と、「幸ひ」を生きる中の君の姿をうっとり眺める若女房の心情のズレが描かれている。「幸ひ人」という語は、若女房には何ほどの意味もなく、老女房の語るそれは虚しく空転しているのである。このことは、中の君の周囲には、既存の「幸ひ人」を越えていこうとする新しい価値観が胚胎しているのだとも言えるのではないだろうか。「宇治十帖」が「女房というものの存在を幾重にも問いかける物語」(注1)であるならば、中の君を取り巻く女房を切り口とした「幸ひ人」論も、今後展開されてもいいように思われる。

- (1) ①「源氏物語作中人物論 中の君」(『別冊国文学 No. 13 源氏物語必携Ⅱ』一九八二年 學燈社)、②「宿木卷 幸い人中の君」(『講座 源氏物語の世界 第八集』 有斐閣 一九八三年)、③「幸い人中の君」(『源氏物語両義の糸―人物・表現をめぐって―』有精堂 一九九一年)、④「幸い人の論理―中の君をめぐって」(『季刊 ichiko』ペリエールアートセンター 一九九二年)、⑤「幸い人中の君」(『源氏物語の人物と表現―その両義的展開―』翰林書房 二〇〇三年)。③は②を転載したもの。⑤は②を基本とし、④によつて一部改稿したもの。
- (2) 「幸ひ」の語義については、原田芳起「文学的發想における“さいはひ”―中古物語文学に関する試論―」(『樟蔭国文学 第十号』大阪樟蔭女子大学 一九七七年)に詳しい。
- (3) 構成の都合上、内容を損なわない程度に文章を改変してある。
- (4) 千原美沙子「大君・中君」(『源氏物語講座第四卷 各巻と人物Ⅱ』有精堂 一九七一年)など。
- (5) 今井上「源氏物語「宿木巻」論」(『國語と國文學』東京大学国語国文学会 二〇〇一年)、秋山虔・三田村雅子「大君・中の君物語」(『源氏物語を読み解く』小学館 二〇〇三年)など。
- (6) 工藤重矩「源氏物語の個人・家族・社会―「さいはひ」「さいはひ人」をめぐって―」(『源氏物語研究集成第六卷 源氏物語の思想』風間書房 二〇〇一年)。また、原岡文子「『源氏物語』第三部の研究史と今後の展望 相対化の時空をめぐる語り・表現、そしてフェミニズム・身体への視座」(『新物語研究4 源氏物語を(読む)』若草書房 一九九五年)も、「宇治」を読み解く鍵語の一つとして「幸ひ人」を取り上げている。あわせて参照願いたい。

(7)「共同討議 源氏物語を読む」(『國文學 第二十五卷六号』學燈社 一九八〇年)における今西祐一郎発言にも同様の指摘がある。

(8)日向一雅「宇治十帖への一視点―「家」觀念と「恥」の契機を軸として」(『東京女子大学紀要 論集第二十八卷二号』東京女子大学 一九七七年)、伊庭美代子「源氏物語」明石の上論―その「さいはひ人」説をめぐって―」(『大谷女子大國文 第九号』大谷女子大学 一九七九年)、木村正中「幸い人の物語―早蕨・宿木」(『國文學 第三十二卷第十三号』學燈社 一九八七年)。

(9)目加田さくを「源氏物語論―幸福の形成―」(『文藝と思想 第三十五号』福岡女子大学文学部 一九六六年)、伊井春樹「匂宮の変貌―「幸人」中君との関連を中心に―」(『源氏物語作中人物論集』勉誠社 一九九三年)、藤井和子「源氏物語のさいはひ」と(『日本文学論叢 第四号』大谷女子大学大学院 一九九八年)など。

(10)山上義実「『源氏物語』宇治十帖における中君をめぐる」(『北住敏夫教授退官記念 日本文芸論叢』笠間書院 一九七六年)、斎藤昭子「中の君物語の(ふり)―宇治十帖の(性)―」(『新物語研究 4 源氏物語を(読む)』若草書房 一九九五一年)、小酒井敬子「『源氏物語』の「幸ひ人」―不幸を抱えた女君たち―」(『新大國語 第二十四号』新潟大学教育学部国語国文学会 一九九八年)、石坂晶子「東屋巻の思惟―「知る」ことをめぐる逆説―」(『源氏物語における思惟と身体』翰林書房 二〇〇四年)など。

(11)原岡文子「女房―宇治十帖を中心に」(『源氏物語研究集成第十一卷 源氏物語の行事と風俗』風間書房 二〇〇二年)。

## 第二章 宇治中の君物語の周縁——「幸ひ」を支える女房たち——

### 一 はじめに

中の君の（幸ひ）を支える女房の存在について考えてみたい。中の君の（幸ひ）については、例えば原岡文子氏は「幸ひ人」という語に着目し、物語中の用例を検証した結果、「幸運や幸福を支える血の滲む努力を重ねる、幸福で不幸な存在」（注1）と結論付けた。また斉藤昭子氏も、中の君の「ふり」に着目し、中の君が匂宮の欲望を模倣すること（Ⅱふりをする）とその歛心を買ひ、自ら（幸ひ）を掴み取っていったことを論じている（注2）。中の君の（幸ひ）Ⅱ「都における生活」を実質的に支えているのは、夫匂宮や薫からの物的援助であることは勿論だが、むしろそれ以外のこと（中の君自身の努力）が大きく作用しているのではないかというのが両氏の見解である（注3）。

本章は、こうした論を踏まえた上で、中の君に仕える「女房」を手がかりに、中の君の（幸ひ）への過程を再考察しようとするものである。

大君は、女房たちに自らの未来を透き見て絶望して死に、一方浮舟は、女房たちの思惑に翻弄され、進退窮まって入水を決意した（注4）。対して中の君は、女房を統括し、都で生き抜いていったのである。中の君と二人との違いは何であったのか、あらためて本文に即して見ていくことにしたい。

## 二 女房の不在

まず最初に、中の君と女房の関係を確認しておこう。

後に生まれたまひし君をば、さぶらふ人々も、「いでや、をりふし心憂く」などうちつぶやきて、心に入れてもあつかひきこえざりけれど、限りのさまにて、何ごとも思しわかざりしほどながら、これをいと心苦しと思ひて、「ただ、この君をば形見に見たまひて、あはれと思せ」とばかり、ただ一言なん宮に聞こえおきたまひければ、……（八の宮は）この君をしもいとなしうしたてまつりたまふ。……さぶらひし人も、たづきなき心地するにえ忍びあへず、次々に、従ひてまかで散りつつ、若君の御乳母も、さる騒ぎにはかばかしき人をしも選りあへたまはざりければ、ほどにつけたる心浅さにて、幼きほどを見棄てたてまつりにければ、ただ宮ぞはぐくみたまふ。

〔橋姫一一九〜一二〇頁〕（注5）

貴人として生を受けた者が最初に出会う女房は、まぎれもなく「乳母」であろう。乳母は、「生涯にわたって身边に奉仕し、実の親兄弟以上に養君と緊密な関係をむすぶ」存在であり（注6）、「後宮職員令」によると、二世王には二人の乳母が支給されたらしい（注7）。大君の乳母について物語は何も記述しないが、存在することが常識の世であれば、自明のこととして触れられていないのであろう（注8）。否、むしろここでは、「若君の御乳母も……幼きほどを見棄てたてま

つりにければ」と語ることで、中の君の誕生・生育時の特殊性・異常性を強調していると見るべきではないか。すべての運に見放されたような人の官家で、望まれた性(男子)ではなく、北の方の命まで奪った中の君に、女房たちは露骨に忌々しさをぶつける。さらに、養君を庇護・愛育し、共に将来を囑望すべき「若君の御乳母」も零落していく人の官家に失望して去ってしまった。中の君物語は、その始発に女房(乳母を含めた)の不在が強調されているのである。このことは、中の君物語のもう一つの始発とも言える、上京の場面においても同様である。

日暮れぬべしと、内にも外にももよほしきこゆるに、心あわたたしく、いづちならむと思ふにも、いとほかなく悲しとのみ思ほえたまふに、御車に乗る大輔の君といふ人の言ふ、

あり経ればうれしき瀬にもあひけるを身をうぢ川に投げてましかば

うち笑みたるを、弁の尼の心ばへに、こよなうもあるかなと心づきなうも見たまふ。いま一人、

過ぎにしが恋しきことも忘れねど今日はたまづもゆく心かな

いづれも年経たる人々にて、みなかの御方をば心寄せきこえたためりしを、今はかく思ひあらためて言忌みするも、心憂の世やおぼえたまへば、ものも言はれたまはず。

〔早蕨三六二〜三六三頁〕

大輔の君は、ここに初出の中の君付きの女房で、薫から中の君への贈り物を捌いたり、浮舟の母中将の君と中の君の間を取り持ったりと、後に重要な役割を担う人物である。その歌は、直訳すれば「こうして永らえたからこそ、このように嬉しい折りに恵まれたことでした。もし宇治川に身を投げていたら(このように嬉しい折りは巡ってこなかったでし



よう)「というもので、大君逝去の際の大きな悲嘆を引き合いに出すことで、逆に今日この時の無上の喜びを詠っている(注9)。「いま一人」の歌も、大輔の君ほど明け透けではないが、やはり同様に喜びを前面に打ち出した内容である。宇治を離れがたく思う中の君は、女房たちのこうした言葉に、ただただ嫌悪感と憂愁を深める他はない。

このように、中の君には信頼して自らの生を託すことのできる女房はどこにも存在しない。中の君は、女房という存在に恵まれない女君として造型されているのである(注10)。

### 三 筆頭女房大輔の君の役割

では、中の君の周辺にはどのような女房が仕えていたのであろうか。まず前述の大輔の君であるが、従来その存在はほとんど注目されず、その他の女房(多くは老女房と呼ばれる者)たちと同列に扱われてきたのであった。たしかに大輔の君は、中の君に「年経たる人」「早蕨三六三頁」と呼ばれ、また薫にも「おとなおとなしき人(注11)」「宿木四四〇頁」と呼ばれてはいる。しかし、中の君は中将の君を匂宮に紹介する時、「大輔などが若くてのころ、友だちにてありける人は。」「東屋五十八頁」と言っており、また娘右近の年齢をも合わせて考えてみるなら(注12)、それまで大君に近侍していた「老人ども」と決して同じ世代ではなく、むしろ中将の君と同様、中年(中堅というべきか)の女房と考えた方がよいのではないだろうか。今回の上京にあたって、新たに登場を要請された人物との見方もある(注13)。ともかく、大輔の君は老女房と若女房を纏め上げると共に、都で如才なく立ち回ることでできる人物として、ここに登場させら

れたのである(注14)。そう考えると、前節で取り上げた詠歌は、老女房の間に埋もれるようにしてあった大輔の君が、中の君の筆頭女房という栄えある立場に立てたことの無上の喜びを詠ったものであったと言えることができるであろう。そしてそれは同時に(中の君付きの女房集団内において)、老女房から中堅の女房へと実権が移ったことを意味しているのである。

(薫は)大輔の君とて、おとなおとなしき人の、睦まじげなるに遣はす。……(大輔の君は)御覽ぜさせねど、さきさきも、かやうなる御心しらは常のごとにて目馴れにたれば、気色ばみ返しなどひこじろふべきにもあらねば、いかがとも思ひわづらはで、人々にとり散らしなどしたれば、おのおのさし縫ひなどす。若き人々の、御前近く仕うまつるなどをぞ、とりわきてはつくろひたつべき。下仕どもの、いたく萎えばみたりつる姿どもなどに、白き裕などにて、掲焉ならぬぞなかなかめやすかりける。

〔宿木四四〇頁〕

薫からの贈り物を手際よく捌いていく大輔の君は、古参女房ならではの臨機応変さと、職務を適切に遂行する高い能力を兼ね備えている。中の君にとつて決して「同じ心」で語り合える存在ではないが(注15)、しかし気心の知れた有能な女房として、中の君の信頼を得ていたということができらるであろう。

さらにここでもう一つ注目したいのは、薫から一任された贈り物を、大輔の君がまず「若き人々」すなわち若女房たちに配布したという点である。若女房は、女君の身の回りの世話をするだけでなく、その機知により女君を美しく飾り立て、引き立てる存在である。女房たちが女君の貴人としての生活を支えていたこの時代、大輔の君のこうした采配

は、例えば、薫が朝顔を手折り二条院の中の君を訪ねた時、女房たちの対応に「いとめやすし」「宿木三九二頁」と感じ、その恋情をさらに強めていった過程でも發揮されたに違いない(注16)。若く才氣あふれる女房を中の君の周辺に配すること、それは図らずも老女房を物語の外へ押し出す力ともなった。

女ばら物の背後に近づき参りて、笑みひろごりてあたり。「一心おはしますはつらけれど、それもことわりなれば、なほわが御前をば幸ひ人そこそ申さめ。かかる御ありさまにまじらひたまふべくもあらざりし年ごろの御住まひを、また帰りなまほしげに思して、のたまはするこそいと心憂けれ」など、ただ言ひに言へば、若き人々は、「あなかまや」などと制す。

〔宿木四六八頁〕

かつて大君を翻弄し死に至らしめた老女房たちは(注17)、ここでも中の君の宇治帰郷の念を公然と批判し、一方でその生を(幸ひ人)と総括する。この声は、以前中の君に、「……など(老女房タチガ)言ひあへるも、さまざまに聞きにくく、今は、いかにもいかにもかけて言はざらなむ」「宿木四〇五頁」と拒否された声でもあった。その声は、今ここで〈雑音〉として押さえ込まれ、「上をたぐひなく見たてまつる」「東屋七一頁」若女房たちの嘆息にかき消されてしまっている。

中の君の周辺には、宇治在住時(八の宮の生前)から仕える老女房たち、大輔の君ら中堅の女房、新参の若女房たちがおり(注18)、中でも若女房は、中の君に近侍することでの発言力を強めていき、やがて老女房の声を中の君の周辺から排除するに至る。大君を、中の君を苦しめたその声は、新たな勢力となった若女房たちによって、物語の前面から完全に消去されてしまうのであった。

#### 四 匂宮の好色性と中の君の嫉妬

若女房の台頭は、老女房の声を封じ込める一方で、好色な匂宮の欲望をさらにかき立てるものとなった。匂宮の中の君への愛情は、多少の波風を立てながらも総角巻以降途絶えることなく連綿と続いてきており、それは「またの日も、心のどかに大殿籠り起きて……」「宿木四三六頁」、「帳の内に入りたまひぬれば、若君は、若き人、乳母などもてあそびきこゆ。人々参り集まれど、なやましとて、大殿籠り暮らしつ」「東屋四三頁」、「明くるも知らず大殿籠りたるに……」「東屋五九頁」という表現に象徴的に現れている。しかし一方でこのことは、匂宮の情熱の迸りと見ることもできよう。浮舟への添い臥し事件の際の匂宮の強引さ・執拗さは、その延長線上にあると言っても過言ではない。そしてそこに織り込むように、中の君の憤懣(嫉妬)が語られているのである。中の君の嫉妬心は、匂宮と六の君との結婚の前後に繰り返し内省や独詠歌の形で語られていたが、東屋巻以降は次のような言葉に姿を変えていく。

さぶらふ人々もすこし若やかによろしきは見棄てたまふなく、あやしき人の御癖なれば……。〔東屋六四頁〕

上は、いと聞きにくき人の御本性にこそあめれ、すこし心あらん人は、わがあたりをさへ疎みぬべかめりと思す。

〔東屋六五頁〕

さぶらふ人の中にも、はかなうものをものたまひ触れんと思したちぬるかぎりは、あるまじき里まで尋ねさせたまふ御さまよからぬ御本性なるに……。

〔浮舟一〇五〜一〇六頁〕

宮も、あだなる御本性こそ見まうきふしもまじれ……。

〔浮舟一〇八頁〕

姉中の君を頼つて二条院を訪れた浮舟、その可憐な姿を偶然見かけた匂宮は、以後執拗に追い求めるようになる。匂宮は浮舟の居所を知るべく中の君を責め立てるが、中の君は決して口を開こうとはしない。それは、匂宮が中の君の若女房に節操なく手を出し、時にその実家にまで訪ねていくという性癖の持ち主であり、それが妹となれば、さらに外聞の悪いことになるかもしれないという危惧を抱いたからである(注19)。ここからは、中の君が浮舟を無意識のうちに若女房と同列に扱っているのと同時に、中の君が常日頃から若女房(召人)にまで目を光らせていたということが分かるのではないだろうか。本来であれば取るに足らない存在である召人だが(注20)、中の君はそれら一々についても視線を注ぎ、把握していたということになるか(注21)。

『源氏物語』において、貴人の嫉妬が描かれることは決して珍しいことではない。しかし女主人が女房に対して嫉妬したり(少なくとも女房はそう受け止めている)、女房がそれに怯えたりという構図は、「宇治十帖」で初めて見られるものであったように思われる。

(浮舟の)乳母、車請ひて、常陸殿へ去ぬ。北の方(中將の君)にかうかうと言へば、胸つぶれ騒ぎて、人もけしからぬさまに言ひ思ふらむ、正身(中の君)もいかが思すべき、かかる筋のもの憎みは、あて人もなきものなり、……。

〔東屋七五頁〕

(弁の尼)「この宮(匂宮)の、いと騒がしきまで色におはしますなれば、心ばせあらん若き人、さぶらひにくげにな

む。おほかたは、いとめでたき御ありさまなれど、さる筋のことにて、上のなめしと思さむなむわりなきと、大輔がむすめの語りはべりし」と言ふにも、……。

〔浮舟一六六〜一六七頁〕

匂宮が中の君に愛情を注げば注ぐほど、そこに控える若女房たちもまた、匂宮の目にとまる機会が増加する。好色人と称される匂宮であれば尚更のことであろう。中の君はこれに不快感を顕わにするのであるが、若女房はそのことに敏感に反応している。中将の君にしても、本来であれば格下の者（浮舟）への嫉妬などあり得ぬはずである。しかしここではそうした感慨を抱かせる中の君の在り方にこそ着目すべきなのではないか。そしてそれは、都のうちで育つた姫君とは明らかに異質であり、このことは、養育者たる女房（乳母を含めた）を持たなかつた生育環境とも密接に関係していると思われる（注22）。ともかく、若女房たちは中の君の匂宮批判の向こう側に嫉妬心を透き見、無言の圧力を感じ、怯えている。中の君と若女房の間には、ある種の緊張関係が存在しているのである。

## 五 〈幸ひ〉を支える女房たち

本章では、中の君を取り巻く女房に着目し、中の君の〈幸ひ〉への過程を再考察した。

まず、中の君物語の始発となる出生及び上京の場面を取り上げ、中の君には、愛育してくれる乳母や「同じ心」で仕え、盛り立ててくれる女房が不在であることを確認した。このことは、都にありながら都の常識を超える存在としての

中の君の姿(本来であればあり得ぬ女房への嫉妬)を浮き彫りにするものであった。続いて、早蕨巻に初めて登場する筆頭女房大輔の君について、その存在が物語を大きく転換する力(中の君に近侍する女房集団の変化)となっていることを指摘した。かつて大君を、また中の君を苦しめた老女房たちは物語の外へ押し遣られ、代わりに若女房たちが物語の中心に呼び込まれることになったのだが、それは一方で匂宮の好色性を呼び込むものでもあった。若女房たちは、その多くが匂宮の召人となりながら、それに眉を顰める中の君に仕えるという点で大きな苦悩を抱え込んでいる。しかし、中の君にしてみれば、そこにはかつてのように(世間の常識)を捲し立てる老女房たちは存在せず、職務を忠実に遂行する大輔の君と、自身が常に監視の目を光らせ、統御できる従順な若女房たちがいるのみである。こうして中の君は、都のうちで生き抜いていく地盤を固めたのであった。

ところで、大君の物語を女房拒否の物語、浮舟の物語を女房に翻弄される物語ととらえた場合、中の君の物語は、女房を御する(幸ひ人)の物語と位置づけることができるのではないだろうか。女房の主體的言動が物語を動かす「宇治十帖」において、実はそのどれもが女主人に対して(幸ひ)をもたらしてはいない。物語は、両者の皮肉な関係を繰り返し描くことで、従前の物語の枠を越えていこうとしているように思われる。

注

(1)『源氏物語の人物と表現―その両義的展開―』(翰林書房 二〇〇三年)。

(2)「中の君物語の(ふり)―宇治十帖の(性)―」(『新物語研究 4 源氏物語を(読む)』(若草書房 一九九五年)。

(3)工藤進思郎『源氏物語』宇治十帖の中君についての試論(『文学・語学』第五十五号 一九七〇年)以降、中の君独自の生については多くの論が展開されており、原岡論文も斎藤論文もその一例である。

(4)浮舟の入水については、薫と匂宮の愛に翻弄された結果と見るのが一般的である。しかしその過程においては母中将の君や老女房弁が深く関わっている。原岡文子「女房―宇治十帖を中心に―」(『源氏物語研究集成第十一卷 源氏物語の行事と風俗』風間書房 二〇〇二年)、外山敦子「弁の尼と中将の君―(母)たちの浮舟物語―」(『源氏物語の老女房』新典社 二〇〇五年)等が参考になろう。

(5)『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(6)『王朝語辞典』(秋山虔編 東京大学出版会 二〇〇〇年)に拠る。

(7)『新訂増補國史大系 令義解』(国史大系編修会編 吉川弘文館 一九八五年)の「後宮職員令 親王及子乳母条」を参照。乳母論については、吉海直人『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯―』(世界思想社 一九九五年)に詳しい。吉海はこの規定について、「あくまで令にそう規定されているというだけのことであり、現実にきちんと施行されていたか否かはわからぬ」とも述べている。

(8)ただし、清水好子は『源氏の女君』(『源氏の女君(増補版)』塙書房 一九六七年)の中で、「乳人もいないゆえに、姉の大君はいつそう結婚の準備ができなかったのである」と断じる。

(9)大輔の君の悲嘆ぶりから、元々は「大君付きの女房ではなかったかと思われる。



(10) 勿論、中の君自身がそうした女房を求めていなかった訳ではない。このことは、「さぶらふ人々も、すこしもの言ふかひありぬべく若やかなるはみなあたらし、見馴れたるとは、かの山里の古女ばらなり、思ふ心をも同じ心になつかしく言ひあはすべき人のなきままには……」「宿木四四三頁」といった嘆息などに端的に現れている。

(11) 「おとなおとなし」は、「いかにも大人である。分別があり、落ち着いている」の意(小学館古語大辞典)。

(12) 「東屋」で機転の利いた言動をする大輔の君の娘・右近は、中の君の側近女房である。右近自身が「若き人」と呼ばれる記述はないが、例えば中の君が「すこしもの言ふかひありぬべく若やかなるはみなあたらし」「宿木四四三頁」と嘆息をもらす相手(女房)は、右近らを指すと推測される。

(13) 大輔の君の役割については、藤村潔が、その論「右近と侍従―橋姫物語と浮舟物語の交渉」(『國語と國文學』東京大学国語国文学会 一九五八年)の中で、大輔の君が浮舟の母と朋輩であることに着目し、「浮舟を中君に引きあわすためには、大輔の君の存在が是非必要であつたのである」と述べている。

(14) 女房の役割について、『王朝語辞典』(注(6)参照)には、「女房は一般に、日夜主人に近侍し、身のまわりの世話、話し相手、訪問者の取りつぎ、手紙の代筆などを行なう存在とある。また、清水好子(注(8)参照)は、「女房たちは、処世の達人でなければならぬ。日常生活に不束かであつては、ことに後宮の后妃たちの間で、競争に負けてしまう。衣食住などの経済的な面はもとより、対人関係において、世間人としての訓練と処世の知恵を求められる。後宮は勢力争いの中心であつたから、女主人のために巧みに侮辱をほらいのけ、競争者を目立たしめぬ才覚と神経の強さ、情勢判断の正しさは何よりも側近の女房、乳人や顧問役には必要であつただろう。すなわち大人しき女房といわれる連中はしたたかものであり、優にやさしく振舞つてはいても、心は冷静に利害勘定をはじいていなければならぬ」と述べている。

(15) 中の君は、大君死後、大君と同様に「同じ心」で語り合える人物が不在であることを常々嘆いていた。注(10)参照。

(16) 無論、よく躰の行き届いた女房は、主人である中の君の手柄である。『源氏物語評釈』(玉上琢弥 角川書店 一九六七  
年)には、「これはやはり中の宮のしつけが良いからである。このように緊張して生活していらっしゃる中の宮と、昨夜まどろま  
ず明かした薫が対面することになる。朝早く出かけてきたのに別段驚いたようでもなく、みごとに衣ずれの音をさせて、座布  
団をさし出したのは、さすが中の宮の女房と思われた。作者はここに、中の宮がすばらしい女性であることを強調している」と  
ある。

(17) 老女房の姿は大君に現世への厭離の念を抱かせ「総角二八〇〜二八一頁」、その言動は彼女を次第に追いつめていった「総角  
二八七頁、二九八頁〜二九九頁など」。

(18) 新参の女房には、中の君の結婚直後「総角二八七頁」、上京時「早蕨三五一頁」、その後に雇い入れられた者たちがいると考  
えられるが、ここでは古参女房との対比として、一括してこのような表現を使用した。

(19) 「浮舟」一〇六に、「よその人よりは聞きにくくなどばかりぞおぼゆべき」とある。

(20) 前掲『王朝語辞典』には、「貴顕の邸に仕える女房のうち、主人あるいはそれに準ずる位置にある男性と情交関係にある人  
のことをいう。妻妾としては認知されず、社会的にも公認されているわけではなく、周知のことであっても部外者はそのことに  
は触れないのが一般的であつたらしい」とある。

(21) 実際、浮舟の入水までの一件も、中の君はすべて把握していたらしい。「蜻蛉二三四頁」。

(22) 中の君の嫉妬を世間知らずだと諫める匂宮の姿は「宿木」に点描されている。

# 結 論

本論文は、これまで平凡な生を歩んだ女性として注目されることの少なかつた中の君を、その最も凝縮された思いである(和歌)を中心とした場面を主に考察した。

第一部第一章では、幼少時の詠歌を取り上げた。ここに描かれた世界は、宇治隠棲前の八の宮家の都での生活(語られない過去)を象徴するものであった。そもそも正編が光源氏の誕生から語りおこされるのに対し、続編である「宇治十帖」の主人公たちは、概して成人した一家言を持つ人物として描かれている。この唱和の場面は、そんな二人が後に歩むことになる生き方を先取りするものとして描かれているのであった。

第二部では、宇治在住時の詠歌を取り上げ、第一章は結婚前に中の君が匂宮と交わした二組の贈答歌を取り上げた。両者は結婚前に幾度となく歌を交わしたとされるが、その詠歌が具体的に物語中に描かれるのは椎本巻の二度の贈答のみであり、これらには強い照応関係が見られる。両場面は、匂宮と中の君の心の接近を語りつつも、新しく詠まれたはずの歌が過去の歌に牽引されてしまうという点で、未来に向かつて切り開かれることはない。そうした言葉の循環構造(飽和状態)の中で、二人の物語が収束させられるという物語のあり方を指摘した。

第二章では、八の宮の死を嘆き悲しむ大君・中の君の贈答四首を取り上げた。姉妹は、成人後「二ところ」「同じ」と常に相似形の姉妹であると強調されるのだが、実はそれは「同化への欲望」が強く働いているのである。物語は、埋めることのできない二人の差異を逆に明確にすることで、二人の生の起点を定めている、それがこの哀傷の場面なのだということを指摘した。

第三章では、中の君の結婚の場面に描かれる宇治川の情景を、その発想の根底にある「宇治の橋姫」伝承とのかかわりの中で考察した。物語は「宇治の橋姫」(「待つ女」を強烈に意識させながら、しかし究極的には「宇治の橋姫」を存在させてはいない。古来人々に親しまれてきた、理想的な恋物語という幻想をうち破る物語として、宇治十帖が描か

れていることを指摘した。

第四章では、総角巻後半、大君が死の床についている、その枕辺でなされた薫と中の君の贈答歌を取り上げた。従来この場面は、「なぜ阿闍梨は常不軽を選んだのか」ということについては論じられてきたのだが、続く和歌についてはほとんど看過されてきたのであった。しかし常不軽はあくまでこの贈答歌を導くための（方法）としてあったのである。常不軽は、死してなお娘たちへの執着を棄てきれなかった人の宮と、人の宮と共にしか生きられなかった大君を葬り去る（物語から退場させる）ためのものであり、それは同時に、もう一つの「中の君物語」即ち薫と中の君の物語の端緒となっていることを指摘した。

第三部では、上京前後の詠歌を取り上げた。早蕨巻は、椎本巻において父八の宮を、総角巻において姉大君を失い、天涯孤独になった中の君が、宇治の地を離れ夫匂宮の元に引き取られる過程を綴った短い巻である。この巻は、その短さとは対照的に多くの歌が散在している。にも関わらず、ここには描かれてしかるべき匂宮との贈答歌は記されていないのである。第一章は、記されないことの意味を、記された歌（薫との贈答歌）から導き出そうと試みた。その結果、中の君が多分に意志的な存在であること、両者の心情が微妙にすれ違ってしまったており、それがその後の薫との危うい関係を暗示するものであることを指摘した。

第二章では、夫匂宮と夕霧女六の君の結婚が迫ったある朝の、朝顔をめぐる中の君と薫の贈答の場面を取り上げた。後に薫の添い臥し事件を招き、それに困じた中の君が浮舟を呼び込むという新たな物語への転換点となっているこの場面は、物語において如何なる意味を持つのか。実は宿木巻前半は、女君たちを「菊」（今上帝女二の宮）「女郎花」（夕霧六の君）「朝顔」（中の君）と、ことさらに花の喩に絡め取ろうとする。中の君の朝顔の歌は、そうした枠を拒否するものであり、それが他の姫君たちとは異なる生き方を示していることを指摘した。

第三章では、匂宮と六の君（夕霧右大臣の娘）の結婚の際に詠まれた中の君の独詠歌一首と、それを中心とした場面を取り上げた。中の君の独詠歌は、匂宮に見棄てられたことの嘆き、孤独を詠んだものであるが、注目されるのは、それを取り巻く語り手、女房たち、そして夜空に澄みのぼる月までもがその嘆きを批判するものとして描いている点である。しかしそれは逆に、中の君の孤高な生を浮き彫りにするものであり、一見相反する生を選んだ大君の孤高性と通底するものであることを指摘した。

第四部では、宇治中の君を取り巻く人々（女房たち）を取り上げた。第一章は、源氏物語の幸い人論について、極力多くの論文（先行研究）を掲げ、同時に今後の「幸い人」論の可能性を模索した。例えば、宿木巻で「匂宮に」二心おはしますはつられけど、……なほわが御前をば幸い人とこそ申さめ」（宿木巻）と、無遠慮に主人を批評する老女房たちの声に、若女房たちが「あななかまや」と嫌悪感を抱き、それを制する場面がある。ここには中の君の生き方を「幸い」と結論づけようとする老女房と、「幸い」を生きる中の君の姿をうっとり眺める若女房の心情のズレが描かれている。「幸い人」という語は、若女房にとっては何ほどの意味もなく、老女房の語るそれは虚しく空転しているのである。このことは、中の君の周囲には、既存の「幸い人」を越えていこうとする新しい価値観が胚胎しているとも言えるのではないだろうか。今後の中の君論の可能性として、女房という切り口があるのではないかとこのことを指摘した。

第二章は、第一章を踏まえ、中の君を取り巻く女房に着目し、中の君の（幸い）への過程を再考察した。まず、中の君物語の始発となる出生及び上京の場面を取り上げ、中の君には、愛育してくれる乳母や「同じ心」で仕え、盛り立ててくれる女房が不在であることを確認した。このことは、都にありながら都の常識を超える存在としての中の君の姿（本来であればあり得ぬ女房への嫉妬）を浮き彫りにするものであった。続いて、早蕨巻に初めて登場する筆頭女房大輔の君について、その存在が物語を大きく転換する力（中の君に近侍する女房集団の変化）となっていることを指摘した。か

つて大君を、また中の君を苦しめた老女房たちは物語の外へ押しやられ、代わりに若女房たちが物語の前面に押し出されることになったのだが、それは一方で匂宮の好色性を呼び込むものでもあった。若女房たちは、その多くが匂宮の召人となりながら、それに眉を顰める中の君に仕えるという点で、大きな苦悩を抱え込んでいた。しかし、中の君にしてみれば、そこにはかつてのように「世間の常識」を捲し立てる老女房たちは存在せず、職務を忠実に遂行する大輔の君と、自身が常に監視の目を光らせ、統御できる従順な若女房たちがいるのみである。こうして中の君は、都のうちで生き抜いていく地盤を固めたのだということを描いた。

「宇治十帖」は、誰か一人を取り出して論じることができないほど、多くの人物が複雑に絡み合つて物語を生成している。しかしそれを自覚しつつも、あえて中の君自身にこだわり、その「声」(＝和歌)に真摯に耳を傾けることで、物語の読みの可能性を探ってきたのが本論文であった。

高貴な血筋に生まれながらも、誰一人有力な後見人を持たない中の君が、「幸ひ」に満ちた人生を送るといふのは、大君・浮舟とは別の意味で、女性の憧れの姿と言えるであろう。しかしその「幸ひ」は、決してきれいな事だけで手に入られるものではない。匂宮や薫、女房たち、大君、浮舟までも巻き込んだ上での「幸ひ」である。中の君の「幸ひ」は、自らを取り巻くすべての人を巻き込んで、自らの力で掴み取った「幸ひ」なのであった。

本論文は、物語の読みを大きく変えるものではない。しかし中の君の生が決して「平凡」「ヒロインたりえない存在」などと言いつたものではなかったことを、多少は確認できたのではないだろうか。

中の君は全部で一九首の歌を詠んでいる。本論文はそのうちの二〇首しか取り上げておらず、研究はまだ道半ばである。今後は残った和歌およびそれを取り巻く場面にも焦点をあて、中の君の機能を探っていきたいと考えている。